
水沢夢
[イラスト]春日歩
俺、ツインテールになります。11
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。11

水沢　夢

イラスト　春日　歩



俺、ツインテールになります。11
水沢夢
[イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


トゥアール
観束総二
津辺愛香
神堂慧理那
イースナ
メガネドン
津辺恋香
桜川 尊


自罰など必要ない。
愚痴(ぐち)れ。喚(わめ)け。喧嘩(けんか)しよう。
それが……仲間(ツインテール)だと。

目次

俺、ツインテールになります。11

水沢夢
［イラスト］春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）
主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

トゥアール
異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那（しんどうえりな）
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

津辺愛香（つべあいか）
総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、ネタにされると激しく怒る。

桜川 尊（さくらがわ みこと）
慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

観束未春（みつかみはる）
総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

イースナ
善沙闇子（いいすなあんこ）の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

結翼唯乃（いわばねゆの）
フェニックスギルディが
ポニーテールの少女となった姿。
圧倒的な戦闘力を誇る。

？ アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。



首領直属戦士
ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。
後に離反し、
テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）

最高科学者：マーメイドギルディ
交渉人：グリフォギルディ

ついにヴェールを脱いだ、アルティメギル最大最強部隊。
ひとたび出撃すれば、狙った世界を確実に破滅させると恐れられている。

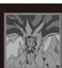
死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）



隊長：ティラノギルディ
右牙の副将（ライトファング）：プテラギルディ
左牙の副将（レフトファング）：トリケラトップギルディ

一般兵に至るまで強力な処刑部隊。隊長のティラノギルディはツインテイルズを壊滅寸前まで追い込む強敵だったが、覚醒したレッドに敗北した。

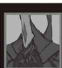
貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。

美の四心（ビー・ティフル・ハート）



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

俺、ツインテールになります。 **10** 巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

ツインテール属性を奪われ、変身不可能となった総二。死の二菱の総攻撃で人々が絶望に包まれる中、総二は心の力で奇跡の復活を遂げる。真の究極のツインテール・アルティメットチェインへと覚醒し、ティラノギルディに勝利。運命を乗り越えるのだった。

アルティメギル組織図

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊
隊長：ドラグギルディ
隊員：スワンギルディ、スパロウギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。

- **リヴァイアギルディ部隊** 隊長：リヴァイアギルディ
- **クラーケギルディ部隊** 隊長：クラーケギルディ
- **タイガギルディ部隊** 隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。
いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者 フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。

プロローグ　おかんの日常。

　今日も一日、お疲れさん。

　歌番組の生放送の収録が終わって、ウチとイースナちゃんは家に帰ってきた。
　イースナちゃんは善いい沙すな闇あん子ことしてアイドル活動。ウチは──メガ・ネプチューン＝Ｍｋ．IIいうんやけど──メガネドンっていうゆるキャラの着ぐるみを着て、イースナちゃんのお仕事の手伝いをしとる。
　この世界の「自宅」は、アルティメギルを抜けてから、イースナちゃんが借りたマンションや。いらん言うたのにウチの部屋まで考えて、広いマンションを選んでくれてなあ……。
　このマンション、ウチは洗濯スペースが広いのが気に入ってる。
　あと、アルティメギルの基地の時と違って、ベランダがあるんや。洗濯物をお外に干せるのは、やっぱり気持ちえええで。
　もちろん、この部屋は玄関からベランダまでくまなく認識攪乱装置イマジンチヤフで守られているから、セキュリティは万全や。
　イースナちゃんの脱いだ靴くつを揃えて、玄関から〝お気に入り〟の洗濯スペースに向かう。
　そこでウチは、ここまで着てきたメガネドンの着ぐるみを脱いで、ハンガーに掛ける。
　イースナちゃんお手製の着ぐるみで、洗濯機で丸洗いできるんやけど……でっかいから、これだけでいっぱいになってまう。先に、イースナちゃんの服の洗濯からや。
　洗濯機のスイッチを入れてリビングに戻ると、イースナちゃんが、ぽ

いぽいと服を脱ぎ散らかしとるところやった。
　つい一時間前まで、何千人もの観客にペンライトを振られとった、押しも押されもせん人気アイドルやのになあ……。
　今ならまだ間に合うから、これも洗濯機に入れてこよ。下着は分けて……と。
　そや。今朝畳んで箪たん笥すの下着入れに戻そうとしたぱんつが、また減ってたことを思い出した。
　ソファーに全裸で寝っ転がって（はしたない！）、スマホをいじってるイースナちゃんに声をかける。
「なーイースナちゃーん、またぱんつ一枚無くなっとったでー」
　イースナちゃんは、思い出し笑いと一緒に返事をしてきた。
「ゆ、昨夜ゆうべ、そ、総そう二じさんに……あげてきた……」
「まぁたか……総二君も困るやろ」
「そ、総そう二じさんは……鈍感だから、たくさんアプローチしないと、女心に、気づかない……」
　アプローチは大事やろうけど、ぱんつも二枚目からは衝撃も一〇〇分の一ぐらいやで……。
　何や、やきもきするなあ。
　総二君好き好きー、で、イースナちゃんなりにアピールしとるのはわかるんやけど……。
　イースナちゃん、男の子に恋をしたのが初めてやから、戸惑っとるんやと思う。
　けど、イースナちゃんがすごくいい方にいい方に変わってきとるのは、トゥアールはんたちのおかげでもあるけど……やっぱり、総二君の影響が一番大きいんやなって思う。
「ふぁ……」
　また欠伸あくび。収録中もずっと我慢してたみたいやったもんな。

「寝不足なんか、イースナちゃん？」
「エ、エロゲー……いっぱい積んでるから……夜よ更ふかし……しちゃう」
　嘘うそやんな。ほんまはウチ、知っとる。
　イースナちゃんが最近、なかなか寝付けなくて……やっと眠れても、今度はすごくうなされてるて。何や、怖い夢でも見てるんやろか。
　こんなごつい身体からだじゃ、添い寝もしてあげられへんしなあ……。
　洗濯機が回っている間、浴槽を洗って、お湯を張って、それが終わったらすぐキッチンに向かって、夕ご飯の準備や。
　ちらっとリビングのイースナちゃんの方を見ると、まだスマホいじっとる。
　まーたえっちなゲームでも通販で注文しとるんやろか……。
「イースナちゃん。家事はウチが好きでやっとるから手伝ってくれんでええけどな、お掃そう除じとかお洗濯とか覚えて総二君にやってあげると、喜ぶと思うで？」
　小言だけじゃあかん。さりげなーくアドバイス。
　ぱんつ渡されるよりぱんつ洗ってもらう方がきゅんとするんやないかな、男の子って。
　……古いかなあ……ウチ。
「そ、総二さんの回りには……可愛かわいい子ばっかりだし……総二さん、鈍いから、普通のことじゃ、だめ……。いっぱいえっちなことして、気を引かないと……」
　うん、あんまり反論でけへん。イースナちゃんはまだ小さいのにえっちなゲームばっかりやっとるし、趣味も変わっとるけど……総二君の方がもっと変わっとるもんなあ。
　総二君、ツインテール好きすぎて、鈍感ちゅうか普通の男の子が普通

に女の子に持つはずの興味が、何や、めっちゃ薄いんや。
　回りの女の子もやきもきして、イースナちゃんみたくどんどん過激になっていくし……。
　じゃあ、あまり口出しせえへん方がええか。
「……ん？」
　もう一度イースナちゃんの方を見ると、スマホを置いて、ソファーの上で胡座あぐらを掻かいてこっちを見ていた。……まだ全裸やで。はしたないで。
　そして、にまぁっと笑って──

「……メ……メガ・ネも、総そう二じさんとえっちなことしたいの……？」

「…………………………………………………………………………は？」
　じゅ～うぶんに長考したつもりやけど、そんな間の抜けた返事しかできひんかったわ。
　急に何言い出すん、この子。
「え、な、何で……？」
「だ、だって、総二さんのこと、よく話題に、するから……。す、好き……なんでしょ」
　反論しようとして、思わず笑わろてしもたわ。
　だって……ウチが総二君の話題をたくさんするのは……イースナちゃんが総二君の話題をたくさんするからやろ？
「まあ、好きか嫌いか言うたら、もちろん総二君のことは好きやけど」
「え、えへへ……」
　何せ総二君はウチらの恩人やし、とにかくええ子やしな……って、めっちゃ笑とるなイースナちゃん。

「も、もし望むなら、メガ・ネのサブボディを造る……。美少女の、ツインテールの、女の子のボディ……。そういう機能も頑張ってつける」
「いやそういう機能て」
　んもー、子供やのに、えっちなゲームばっかりしてるから……。
　でも、最近はそれが恋愛に活かされてなくもないから、悪いとも言えへんのよ。
「ふ、二人で、総二さんに、えっちに迫るの……。あ、で、でもそれ、親おや娘こどんぶりに、なるのかな……」
　あかんこの子あかん。口出さんとこ思うたけど、やっぱ見守るだけじゃダメやな。
　所々で色々言うたったらんと……。
「ウチはこの身体からだと……イースナちゃんのくれたメガネドンの着ぐるみがあれば十分や。新しい身体ボデイはいらんから、それを作る時間で、総二君に何かしてあげぇ」
「え、えっちなこと？」
「そればっかりやな……」
　世のお父さんお母さん、娘さんがえっちなことばっかり考えるようになったら、どうしとるんやろ……どうアドバイスしとるんやろ。
「とにかくなー、イースナちゃん。家では、ちゃあんと服着いや。四六時中裸でおったら、男の子だってドキドキせえへんやろ」
「……そ、総そう二じさんが、女の子の裸に慣れてるのって、トゥアールさんが、しょっちゅう裸見せようとしてるからじゃ……」
　ほんで愛あい香かちゃんに怒られてるもんな、トゥアールはん。
　傍はたから見るといっつも喧けん嘩かしとるけど、あの二人の仲の良さは、ほんま微笑ほほえましい。わかり合ってる、って感じなんや。
「でも、大丈夫……わ、私は、トゥアールさんより、恋愛テク、上だから……」

「はいはい……あとそれトゥアールはんに言わんといたってや……色々気にしとるっぽいし」
　ジャージに着替え始めたイースナちゃんを見て、ウチはキッチンに向かう。
　微笑ましい仲の良さ……か。せや、いい考えが浮かんだわ。
「なぁイースナちゃん、お友達んところにお泊まりさせてもらったらどうやろ」
　さりげなく、そう提案してみる。
　友達と一緒に寝れば、怖い夢見たりせえへんかな、って。
「友達……？　総二さんは、私の、彼氏……」
「いや、総二君だけやなくて、愛香ちゃんとか、慧え理り那なちゃんとか……」
　途端、イースナちゃんは黙り込んでもうた。
「そ、総二さんと、トゥアールさん以外は……仲間だけど、友達か、どうか……」
「なんやそれ、あの焼き鳥ちゃんが言うてたことの、まるっきり逆やないの」
　焼き鳥……フェニックスギルディはんが言うてたもんな。ツインテイルズとは、友達やけど仲間やないて。
「ふ、普通に、仲良くはしてるから、大丈夫……。でも、お泊まり、いいね……」
　この調子やと、お泊まりするいうても総二君とこやろなあ。
　イースナちゃんも、総二君だけでなく、他の子ともっと仲良くでけへんやろか。
　それこそ、変身する前でも、遠慮なく喧嘩したりできるようになればええんやけど。愛香ちゃんと、トゥアールはんみたいに。
　ちょっと、急ぎすぎかな、これ以上を今すぐ望むのは。

今のイースナちゃんは、ホンマに幸せそうやし……。

だから、ウチもすっごい幸せや。
この世界で、みんなと一緒に、ずっと楽しく毎日を過ごせるように。
頑張ろうな、イースナちゃん――。

あ、洗濯終わったみたいやな。

第一章　ツインテールに願いを。

　その日の朝、俺は驚くほど清すが々すがしい気分で目を覚ました。

　瞬まばたきの延長のような軽さで、瞼まぶたがすっと開く。

　同時に、数瞬の微睡まどろみもなく思考が冴え渡っていく。

　ベッドの端はしの目覚まし時計へ目線を送ると、時間は六時ぴったり。

　昨夜床に就ついたのが確か午前〇時になるかならないかなので、理想的な睡眠時間と言われる七～八時間には、少し足りないぐらいだ。

　だというのに、身体からだは僅わずかな屈伸の必要もないほど軽く、倦けん怠たい感の欠片かけらもない。

　目標起床時間の七時には、随分と余裕がある。二度寝をすることもなく、俺はアラームのスイッチを切った。

　同じ早起きでも、不安で眠れなかったつい先週とは全くの逆だ。

　何せ、先週起こった出来事は、俺──観み束つか総そう二じの人生の中でも、最大の試練だった。

　自他ともに認めるツインテール馬ば鹿かの俺が、ツインテールを愛する心、すなわちツインテール属性をアルティメギルに奪われてしまったのだ。

　失って初めてわかる大切さ──使い古された言葉だが、それが我わが身に降りかかった時、心底痛感した。ツインテールとは、俺にとって筋骨臓ぞう腑ふより不可欠なものだったのだと。

　それに加えて俺を苦しめたのは、俺自身の存在そのものについてだった。

　──究極のツインテール。

　全世界全次元の人間を強制的にツインテール好きに変えてしまうと言

われる、ある意味エレメリアン以上に人類の災厄と呼べる存在。
　それが、この俺なのだと……宿敵フェニックスギルディの口から明かされた。
　この世界の人々にもたらす災いを思い、俺はついにはツインテール属性を取り戻していいのかどうかさえ悩んだ。
　絶望と諦てい観かん、恐怖と悲痛。
　立ちはだかる障害を全て乗り越え、俺は自分自身の真実をこの手に掴つかんだ。
　その果てにツインテール属性を取り返した俺は、真の究極のツインテール・アルティメットチェインへと到達。
　俺の属性力エレメーラを奪ったティラノギルディを撃破し、苦悩の日々に決着をつけたのだ。

　ベッドから起き上がる。勉強机の上の置き鏡で、自分の顔をまじまじと見つめる。
　そして意識を集中して右手首にテイルブレスを可視化させ、胸の前で構えた。
「テイルオン」
　小声で変身機構起動略語スタートアツプワードを発した瞬間、俺の身体からだは紅あかい光の粒子に包まれた。鏡に注いでいた視線が、見る見るうちに下がっていく。アンダースーツとプロテクターが身体を覆おおい、ツインテールの戦士・テイルレッドへの変身が完了する。
　鏡に映るツインテールの鮮烈な輝きを前に、俺の胸に様々な思いが去来する。
　ツインテールを取り戻したという安あん堵ど。再びツインテールとともに在あれるという歓喜。
　そして、ツインテールを二度と手放すまいという強い決意──。

「ツインテール……」
　秘め隠すような慎つつましさで囁ささやく。
　煌きらめく髪束を小さな手で掬すくい取り、そっと瞳ひとみを閉じた。
　鋭敏に手の平を刺激する、ツインテールの感触。
「ツインテール」
　この感動を、なんと表現したものか。
　耳に心ここ地ちよい言葉は思いつかないが──やっぱり、ツインテールっていいな。
「……ツインテール……!!」
　三度、己おのれの思いを虚空に紡つむいだ後、手の平に載せたツインテールをはらりと宙に散らす。
　俺は充足感のままに、空手となった拳こぶしを握り締めた。
　ありがとう、ツインテール。
　お前がこうして輝いてくれているだけで、とめどもなく勇気が湧わいてくるよ──。

　頭を上げ、再び視線を送った鏡には──窓の桟さんに足をかけたまま、白目で硬直している愛あい香かの姿が映し出されていた。

「…………………………………………………………そーじ……」

　カラオケで数時間シャウトした果てのような掠かすれ声が、何とか絞り出される。
　愛香は、滑り落ちるように俺のベッドに着地した。
　パジャマ姿だが、ツインテールはしっかりと結ばれている。さすがだ、愛香。

「おはよう、愛香」
　テイルレッドに変身したまま、俺は努めて爽さわやかに挨あい拶さつをした。
「こんな朝早くに電気が点ついてるから、心配になって来てみれば……また変身して……」

　力無く頭こうべを垂れた愛香が立ち上がるまで、それから一〇分ほどの時間を要したのだった。

　　　◇

　ティラノギルディとの一件で、俺はみんなに随分と迷惑をかけた。絶望で砕けてしまいそうだった俺の心は、仲間たちの優しさで繋つなぎ止められたのだ。
　みんなの支えがあったからこそ、今日この日の俺のツインテールがある。
　そこで俺はお詫びとお礼を兼ねて、愛あい香かたち全員に一人一つずつ「何でも言うことを聞く」と提案した。
　今日はまず、愛香のお願いを聞くことになっている。

　いつもなら登校時間の頃合いだが、折しも今日は日曜日。俺の家・喫茶店アドレシェンツァは、朝からお客さんで埋まっている。
　その中の窓際の角のボックス席に、愛香が座って待っている。今朝は俺のツインテールを見るなり白目で硬直してどうなることかと思ったが、無事リカバーしたようだ。
　俺は着慣れない燕えん尾び服にこそばゆさを感じながら、姿勢を正して歩み寄った。

「わー、似合ってるじゃない、そーじ!!」
「そ、そうか？」
　いつもと違う格好の俺を見て、愛香が褒ほめ立ててきた。
「もう、違うでしょ！　そーじは今日、あたしの執事なんだから!!」
「は、はい……えーと、愛香お嬢様」
「……ふぁ……」
　俺の中の執事イメージで適当にお嬢様呼びをすると、愛香は途端に顔を弛し緩かんさせた。
　うーむ、やはり俺が執事をやるのは、かなりギャグみたいだぞ。にやにやしてるじゃないか、愛香。
　愛香の願いは……「自分の執事をやって欲しい」というものだった。
　ご丁てい寧ねいに執事服━パリッと糊のり付けされた燕尾服まで用意して……。これは、文化祭でクラスの出し物だった占いの館の衣装の中にあったもので、愛香がクラスの友達から借りてきたそうだ。
　しかも普段はシャツにホットパンツなどカジュアルな私服を好む愛香が、今日は袖そでや合わせ部分にフリルたっぷりの上着に、タイトなロングスカートという、むしろ姉の恋れん香かさんの私服のような出いで立ちだ。こっちは多分、その恋香さんが用意してくれたのかもしれない。
　お嬢様を意識した衣装というわけだ。
「早く早く！　六時間だけなんだから！　どんどん執事って!!」
　俺がぼへーっと突っ立っていると、愛香が新たな動詞を生み出してまで急せかしてくる。
「俺、時間制限なんて決めたっけ？」
「あたしたちの間で決めたの！　午後は会長の番なんだから、時間は有限よ!!」
　すぐ後ろのボックス席では、トゥアール、イースナと母さんが三者三

様の顔でこちらを観察している。日曜日の朝なので、慧え理り那なは俺の家のリビングでヒーロー番組を見ている。終わったら、桜さくら川がわ先生と一緒にこちらへ来る予定だ。
……ちなみに観察しているのはトゥアールたちだけではない。
ＰＣで作業するふりをしたり、常連客同士で談笑するふりをしたりして露骨にこちらへと視線を送ってはこないが、お客さんたちも明らかに俺や愛あい香かを注目している。
執事とお嬢様ごっこだ、珍しいのかもしれないけど。
「見ましたかイースナ。お嬢様と言われただけであの発情っぷり……六時間後には薄い本の最終ページぐらい弛し緩かんしきった顔になってますよ、あのエロ蛮族……」
「わ、わざわざお店でやらせるのが、やらしい……。み、みんなに見られて、悦よろこんでる……」
「慧理那ちゃんのお株を奪ってるわねえ……お嬢様も、見られて悦ぶ方も」
トゥアール、イースナ、母さん。顔を寄せ合って小声で会話しているが、愛香は全く気にする様子はない。
俺はカウンターに入って、母さんが淹いれた珈琲コーヒーをカップに注ぐ。それをソーサーに載せ、慎重に愛香の席まで運んだ。
「珈琲をお持ちしました、愛香お嬢様」
「ありがと、そーじ」
口をつけるなり、愛香はカップを離して珈琲を見つめた。
「お口に合いませんでしたか？　お嬢様」
俺も頑張ってなりきってみる。
「え⁉　ち、ち、ち、違うのよ⁉」
一瞬取り乱すも、こほん、と大おお仰ぎように咳せき払いをし、
「少し熱くてよ。ふーふーして冷まして頂ちよう戴だい？」

　愛香は俺以上に演技がかったお嬢様口調でそう要求してきた。
「かしこまりました」
　俺は愛香からカップを受け取り、珈琲が跳ねないよう静かに吐息をかけた。
　愛香は口くち端はを吊つり上げて俺をじっと見つめている。何かやりづらいな……。
「うぎぎぎぎ噴きたての溶岩をジョッキで飲んでも平気そうな舌のくせに……!!」
　目め端はしで愛香の後ろのボックス席を窺うかがうと、トゥアールが白衣の裾すそをハンカチのように噛かんで悔しがっていた。
「どうぞ、お嬢様」
　頃合いを見計らって俺がカップを差し出すと、愛香は一口で飲み干してしまった。
「いかがですか」
「ええ、とっても美味で御座いましてよ、そーじ。ごきげんよう」
　……やっぱり愛あい香かも探り探りのキャラだな。
「デザートが食べたいわ。ケーキを頂ちよう戴だい？」
「かしこまりました愛香お嬢様、サイズは８号丸々でよろしいですか？」
「今日はあたし、カットサイズな気分だわよ」
　いつもなら愛香は一人で７～８号のケーキをぺろりと平らげるが、今日はショートケーキでいいのか……。俺は再びカウンターに入り、冷蔵庫からケーキを出して持っていく。
「食べさせて？」
　愛香は人生で三度と見たことのないぶりっこ顔で、俺にそう要求してきた。
　世のお嬢様って、執事とかメイドさんにいちいち食べ物食べさせても

らってるのかなあ……。
　本物のお嬢様はただ今ヒーロー番組を刮かつ目もくしているので、真偽を聞けないのが惜しい。
　俺はフォークでケーキを一口サイズに切って、愛香へと差し出した。
「はい、あーん」
「あ、む」
　ケーキを口に含んだ途端──
「～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ!!」
　愛香は急に俯うつむき、椅い子すをべしべしと叩たたき始めた。
「おいどうした愛香お嬢様!?」
　慣れない言葉遣いだと、ツッコミ時にうっかり地が出そうになる。
　ケーキにトウガラシでも入ってたのか……!?
「……ああ、何だろこれ……胸の奥から熱い何かが溢あふれ出して止まらない……!!」
　愛香は陶然として天井を見上げた。
「その平たい胸の奥じゃなくて股またの奥の間違いでしょうエロ蛮族!!」
「負け惜しみが気持ちいいわねえ？　この素晴らしい願いをいち早く思いつかなかった天才科学者さん!!」
　とうとう無視せず席越しに口くち喧げん嘩かを始めたぞ、愛香お嬢様。
「ぐぬーーーーーーーーーーーーーーーぬぬぬ……!!」
　トゥアールの悔し声も、いつもより長めだ。
　お嬢様たるもの余裕を持つべし、という理念からか、本日愛香はまだ一度もトゥアールを攻撃していない。キャラを演じるというのは、こんな副次効果もあるのか……。

　ターバンを巻いた中東系の顔立ちのイケメンが後ろの席に歩み寄り、店長である母さんに握手を求めていた。
「イイモノ、見マシタ。オ礼ニ、持ッテルオイルフィールドーツ、アゲマス」
　オイルフィールド……？　油田という訳な気がするが……いやいやまさか。
「うふふ、私じゃ回せないから、その分日本への卸値を安くして？　テイルレッドちゃんフィギュアとかが原価安くなるでしょ？」
「ワカリマシタ。ラブコメ、セカイノ宝」
　母親が……秘密裏に対外貿易を進めているような気がする……。
　さらに店の奥へ目をやると、サングラスの黒服が、同じくサングラスをかけたナイスミドルに若干焦りながら話しかけていた。
「……プレジデント……そろそろご出発なさらなければ……」
「遅れると連絡してくれたまえ。これを見終わるまでは帰れん。それは君も同じはずだ」
「はっ、お恥ずかしながら……」
　プレジデント……今大統領プレジデントって言わなかった!?　もちろんごっこだよね!?
　よく見れば、サングラスかけてもテレビで見たことあるよーな雰ふん囲い気きを感じるんだけど!?　すっげー流りゆう暢ちような日本語だけど!?
　大丈夫か、この店の客層!?
　ああ、慣れない執事をやってるせいか、心の中でのツッコミが滝のように溢あふれてくる……!!

　常連客のことを真剣に考えていると、心臓がいくつあっても足らない。

　愛あい香かにケーキを差し出しながら、俺はトゥアールにも質問してみた。
「トゥアールは、お願い決まったのか？」
「ええ……。この数日、ずっと何をお願いしようか吟味に吟味を重ねまくっていたんです」
　トゥアールが、得意げに指を立てて言った。
「あんま熟考されても困るぞ!?　俺にできる範囲のことだけだからな!?」
　愛香みたいに、適当にノリで言って欲しいんだけど……。
　トゥアールは、ノートを白衣のポケットからいつも通りにゅるんと取り出し、大おお雑ざつ把ぱに捲めくってその書き込み量を俺に見せつけてきた。
　遠目でも判別できる綺き麗れいな文字で、ノートがみっちりと埋まっている。
「こんなに書いてもまだ決まらなくて……でももう少し！　もう少しだけ待ってください、きっと素晴らしいお願いを考えますから!!」
　パラパラめくるノートの中の、僅わずかばかりの文字列が目に入った。
　見間違えでなければ、『総そう二じ様の色々な部分を開発したい』と書かれていたはずだ。
　………………開発……？
　科学者のトゥアールの願いだけに、俺の身体からだの各所をサイボーグ化でもするつもりなのだろうか。
　それ、開発というよりは改造だと思うが……。
　ともかく、さすがにそれはお願いと言われても断らなくてはいけない。
「ねえ、そーじぃ。お嬢様がケーキを食べ終わったわよ、お口ふきふき

して？」
　瞳ひとみとツインテールをきらきらさせて、愛あい香かお嬢様がおねだりしてきた。
　大丈夫か、執事への命令が幼児退行に繋つながり始めている気がするぞ。
「では、ふきふきします……」
　俺はテーブルのスタンドからペーパータオルを抜き取り、愛香の口元へと近付けた。
「ん……」
　目を瞑つぶって顎あごを上向ける愛香。
「普段はそんな大胆な仕草できないくせに、シチュエーションマジックで完全に気が大きくなってますね、キーッ!!」
「ト、トゥアールさん、貧乳さんが、目を瞑ってる隙すきに、唇くちびる、奪ってきたら……」
「地球上で一番いらない物の一つですよ愛香さんの唇なんて！　不動の一位は愛香さんのおっぱいですけどね!!」
「無いのに、一位って……哲学……」
　トゥアールとイースナが、他のお客さんの目も憚はばからずいつものような会話を繰り広げる。
「…………」
　愛香お嬢様、無言でテーブルの端はしを握り潰つぶすのはおやめくださいませ。
　俺はトゥアールたちに気を取られていたせいで、愛香の口を拭いていたペーパータオルを落としてしまった。
　愛香の唇に、直じかに指で触れてしまう。
「ほゃっ⁉」
「おお、ごめん……」

　愛香が突然大きな声を上げたので、こっちが驚いた。
「い、い、いいのよよくってよおほほ!?　好きなところを触るがよろしいのよ!?」
　口調の安定しないお嬢様のご厚意に甘え、俺は執事らしく、ツインテールに恭うやうやしく触れた。
「愛香お嬢様、今度はツインテールを梳すきます」
「あ、ありがと、そーじ」
　ポケットからブラシを取り出し、愛香お嬢様のツインテールを梳く。
　俺が想像する執事のお仕事なんて、ツインテールのケアぐらいだ。これなら、拙つたないながらも精魂込めてできるぞ。
「ゆ、ゆ、ゆ、指使いが、よくってよ。褒ほめてつかわすし？」
「光栄です」
　光栄なので、ツインテールをさわさわする。
「っ、ふ、ぅ…………」
　俺がツインテールに触れる度たび、愛あい香かお嬢様が身体からだをびくびくと震ふるわせる。指を噛かんで、必死に声を押し殺しているように見える。
「な、何か今までと違うよ、そーじ……ツインテールの、触り方……!!」
　パワーアップしたからな、俺のツインテールは。扱いも上達しているはずさ。
「……こ、このままじゃ、あたし……」
　目は泳ぎ、頬ほおは紅潮して、実にリラックスしていただけているようだ。執事冥みよう利りに尽きる。
「ッ………………は、そ、そーじ！　次の！　お仕事!!」
　身体の震えが小刻みになってきたと思っていると、愛香は急に席の奥まで飛とび退のいた。

「あ、足……マッサージして」
「え」
　愛香は靴くつを脱いで脚をソファーの上に乗せる。そしてスカートを捲めくり、すらりと伸びる健康的な脚を俺に差し出してきた。
「大丈夫だから！　ちゃんと綺き麗れいにしてきたから!!」
「べ、別にそこまで気にしなくてもするよ、マッサージぐらい……」
　ちらっと横を向くと、お客さんが総立ちでこちらを注目していた。もう隠れて見るつもりもないようだ。そんなに珍しい光景だろうか……。
「でも、ツインテールのマッサージと違って、下へ手ただぞ、きっと」
「下手でもいいの！　一生懸命してくれたら、あたしは嬉うれしいから!!」
　何で愛香の目は爛らん々らんと充血しているのか。
　トゥアールは席から乗り出して愛香に抗議する。
「黙ってりゃどこまでもつけ上がっていきますねエロお嬢様！　変な声上げて『あの、これ本当にマッサージなんですか？』とか言うつもりでしょう！　んで、総そう二じ様は『声を出しちゃうのは自然な反応ですからね』とか言ってどんどん指使いが……!!」
「あたしからお願いしてるのにどうしてそんなやらしい流れになるのよ!!」
「どうしてすぐエロシチュエーションだと理解するんですか愛香さんは!!」
　そうだ、足の裏をまずマッサージしよう。足の裏にはツボが密集していて、髪の毛や、頭皮の血行にいいツボもあると聞いたことがあるぞ。
　執事であるからには、主のツインテールの体調を第一に考えなくてはならない。
「靴下脱がすぞ」
「えっ!?」

　ツボを押すのだから、素足の方がいいだろう。俺は執事として、お嬢様の靴下を脱がせる。
　愛香の素足の足の裏を、力を込めて指で押していく。
「っ……ま、待って待ってそーじ、これ……」
　高圧電流を流されたように身体を震わせ、身をよじる愛香。
「ああ、すまん。探り探りだから……この辺？」
「っ……ご、ごめ……もう、止やめ──」
　足の裏を揉もみほぐしながら、ここだと思ったポイントを一気に指で刺激する。

「──ひゃ、あんっ……!!」

　愛あい香かが、驚くほど甲かん高だかい声を上げた。
　即座にはっと我われに返り、居住まいを正してテーブルに手を着いて立ち上がる。
　常連客さんたちは神速の変わり身で我関せずというリアクションをし、トゥアールとイースナと母さんはこれまた三者三様な顔つきで愛香をじっと見ていた。
　愛香は顔を真まっ赤かにして肩を震ふるわせ……
「ゃ～～っ!!」
　店の奥、俺の家の方へ走って行ってしまった。
「愛香お嬢様！　靴くつ！　靴!!」
　脱ぎっぱなしの靴を見つけ呼びかけるも、愛香から応答はない。
　直後、店内にお客さんからの拍手が鳴り響く。賞賛されるような何をした!?
「痛みに強いくせに快楽に弱い。相変わらず女騎士みたいな体質です

ね、愛香さんは……」



「うちの息子、ツインテールいじって絶頂まで持ってけるぐらい成長したのね……」
　トゥアールと母さんが何やら俺たちで不穏な分析をしている。
「それにしても頑張ったわねえ愛あい香かちゃん、未み春はる賞だわ！」
「お義か母あ様、その賞まだ私頂いてないんですけど⁉　トゥアール賞と交換しませんか⁉」
　母さんに半泣きでしがみつくトゥアール。
「……あ、あの反応……ずるい……。私も、お願い決めなくちゃ……」
　そしてイースナは、椅い子すの上に体育座りして親指の爪つめを噛かんでいた。

　執事始めてからまだ一時間も経たってないけど……いいんだろうか？　愛香は。

◇

　テイルレッド・観み束つか総そう二じは、ツインテールへの愛を失うという究極の絶望に打ち勝ち、最強の力を手に入れた。
　しかし、絶望に抗あらがい続けてきたのは、何も総二たちツインテイルズだけではない。
　総二たちの世界へ侵攻しているアルティメギル部隊もまた、ずっと絶望との抗争に身を窶やつし続けてきた。
　テイルブルー怖い。
　テイルイエロー脱ぐ。
　テイルブラック筋肉召喚する。
　テイルブルーやばい。

テイルブルー酷むごい。

テイルブルー因縁つけてくる。

テイルブルー平たい。

──いったい、どれほどの苦難絶望が彼らを襲おそったことであろうか。

だが非ひ業ごうに直面する度たび、この怪人たちは何度も立ち上がってきた。

迷うこともあった。挫くじけることもあった。

その度、仲間と手を取り、絆きずなを確かめ合い、力強く明日へと一歩を踏み出すことで抗い続けてきた。

〝テイルレッド可愛かわいい〟という、唯一の希望を胸に。勇気と信念を気け高だかき力に変えて。

それでも、敵対する両者それぞれが希望を求め戦い続ければ、いずれかが絶望に屈するは必ひつ定じよう。希望であったテイルレッドが、最強の将であるティラノギルディを打倒したのは、皮肉とも呼べぬ運命であったと言えよう。

そう。彼らの部隊を最後に導いた、〝臆病なる猛将〟ティラノギルディさえもが──とうとう、敗北してしまったのだ。

隊長が撃破される度たび、失意の静寂しじまが支配していたアルティメギル基地の大ホールだが──

「ほう、そこに並べたるは昨日発売されたテイルレッドのフィギュア付き食しよく玩がんだな……ライザーチェインなる強化形態が三つダブっているようだが、一つわけてくれまいか」

「自分で買えい。テイルレッドにダブリはない、同じ物が何個当たってもそれは神からのギフトなのだ」

「テイルレッド４コマができ上がった……早速お絵描きサイトにアップせねば」

「待てい。見させてはもらったが、今週分はオチが弱い。４コマ目を改稿せねばデイリーランキング入りは望むべくもないぞ」
「テイルレッド可愛かわいい」（動画視聴中）
　──今、ここに集まった残存兵たちは、意外にも穏やかな談笑を交わしていた。
　玩具を見せ合い、絵を描き、映像を見て。各々が楽しげに過ごしており、敗残兵の惨みじめさがいささかも垣かい間ま見えない。
　それには、涙ぐましき理由があった。
　ティラノギルディ率いる死の二菱ダー・イノ・ランヴアス全兵士とツインテイルズの総力戦を、この大ホールのモニターを通して固かた唾ずを呑のんで見守っていた彼らは……その果てに、テイルレッドが威風堂々と復活したのを目まの当たりにした。
　ありえない光景だった。ティラノギルディにツインテール属性を奪取されていながら、テイルレッドは戦場に再臨したのだ。
　戦いの顚てん末まつは、戦闘映像の中継が途中で切れたことで、ついに見ることは叶かなわなかった。一度は奪ったレッドのツインテール属性も、完全に取り返されてしまったことだろう。
　傲ごう岸がん不ふ遜そんな帝王は、無勲のままに散ったのだ。
　しかし彼らはむしろ、ティラノギルディの見せた最後の男気に、深く感じ入っていた。
　映像中継がティラノギルディの指示で切られる直前、レッド以外のツインテイルズは涙していた。これまで彼らが悪魔、夜叉、破壊神、怪物、直線ツールで十分な胴体、と畏おそれ戦慄おののいてきたテイルブルーまでもが。
　戦線離脱していたレッドの復活に、仲間の無事に、戦いの最中に気が緩んだのだろう。
　彼らがモニター越しに見たテイルブルー、イエロー、ブラックは、そ

の瞬間だけ普通の少女だった。
　勝利のためならばいかなる策も尽くすと断じていた帝王が、しかし、戦士の涙だけは利用し辱はずかしめまいと秘した、気け高だかき矜きよう恃じを目に焼き付けた。
　そして、その戦士もまた、涙流す普通の人間なのだと知り、彼らの胚はらは据わったのだ。
　誇り高く散った帝王に報いるためにも、最後まで戦おう。恐れることなく、己おのが信念に殉じようと━。
　なればこそ、こうしていつも通りの日常を過ごしているのだ。
　テイルレッドがどれだけパワーアップしても、我われ々われは引き続き、彼女を愛めでる。そして、堂々と戦う━と。

　ドラグギルディ斃たおれた後この混成部隊でずっと参謀役を務めてきた古兵・スパロウギルディが、今は誰だれも立つ者なき登壇台の横に歩み寄った。兵たちの談笑が、揃って止やむ。
「皆、聞いてくれ。定期連絡が来た━━」
　スパロウギルディもまた、神妙というより穏やかな佇たたずまいで報告を始める。
「この部隊へ補充・合流の申請をしてみたが……やはり、どの部隊からも名乗り出は無かったようだ。死の二菱ダー・イノ・ランヴアスを撃破した戦士のいる世界と知ってはな……当然だが」
　補充の可否の結果は、聞くまでもなく、皆薄々予想していたことだった。
　末端の戦士に至るまでその威名轟とどろく、首領直轄部隊・アルティメギル四し頂ちよう軍。
　無数の異世界に散り活躍する全てのアルティメギル一般戦士たちが密かに憧あこがれた、文字通り組織の頂点に君臨する四つの部隊。

そのうち三つまでも、この世界の守護者であるツインテイルズは撃破したのだ。
　他の平行世界を侵略している並の戦力の部隊が、今さら合流しようとは思わないだろう。
　武勲や腕自慢のために屈強な戦士たちが我こそは、と合流する次元は、とうの昔に終わってしまった。
「そして……知らぬ者も多いだろうが、四頂軍最後の一隊──神の一剣ゴー・デイア・ソードは、決して他部隊の救援を行うことはない」
　唯一この説明にだけは、ホール内の兵士たちにざわめきをもたらした。
「理由は我ら末端の与あずかり知るところではないが……首領様をお守りするために、世界移動を禁じられているからとも聞く」
　一般部隊の補充はない。四頂軍最後の一角は不動。進退窮きわまった彼らだが──
「もちろん、撤退すると言っても誰も聞きはすまい。せめて、皆で最後まで──」

「こんにちはー」

　ホール内に、澄んだ女性の声が響く。
　あまりにも場違いな声こわ音ねに、兵たちに特攻の是非を問おうとしていたスパロウギルディまでもが言葉を止め、一斉にホールの入り口に視線が集まった。
「……何なに奴やつ⁉」
　代表するように、スパロウギルディが問いかける。
　こんな時。
　絶望にくれそうになった時。自棄に支配されそうな時。

いつも頼もしい新部隊の戦士が、あの入り口から姿を現し、彼らを鼓こ舞ぶしてくれた。

しかし、それはもう二度とないとわかっている。

では、今姿を現したのは……!?

張り詰める空気の中へ歩み入ったのは──

「初めまして。マーメイドギルディです」

戦士たちは総立ちとなり、現れた小柄な戦士の挨あい拶さつになおの注視をもって応えた。

「増援を募集してたから来たの。と言っても、今は私一体ひとりだけれどね」

「何と、増援……!?」

屈強なエレメリアンたちの、剥むき身の刃やいばを思わせる険しく勇猛な面体とは一線を画する、麗美なる容よう貌ぼう。

女王冠テイアラのように頭部に輝くパーツは女神の如き気け高だかさを溢あふれさせ、穏やかな双そう眸ぼうは見る者を陶然とさせる。

波は濤とうのように足元まで流れる腰部装甲は麗うるわしき人魚の足びれのようでもあり、しかし、肩から繋つながっていることに注目すると、たちまち研究者の白衣のような怜れい悧りな美しさを感じる。

そして、外側半分はその白衣のようなパーツに隠れているものの、胸部を押し上げる豊かな双丘は、彼女が女性型エレメリアンであることを雄弁に伝える。

「う、うむむ……女によ性しよう……！」

純情な戦士たちは、一度注いだ視線をどこに固定あわせていいものかと、たまらずもじもじし始めた。

「マーメイドギルディ……殿。所属を聞いてよろしいか」

「部隊というか、科学班に所属しています。階級がない一般兵ですね」

悠ゆう然ぜんと歩を進めたマーメイドギルディは、そう質問したスパ

ロウギルディの横に立つと、ホールの戦士たちへと向き直る。
「だから〝殿〟とか畏かしこまらなくて大丈夫ですよ、スパロウギルディ様」
「い、いや……私も済なし崩し的に参謀の座を継続しているだけなので、フランクにしてもらって結構」
　言ってから、スパロウギルディは女性型エレメリアンに殿はないか、と首を捻ひねる。
「しかし……科学班から出向されるとは、何なに故ゆえ……」
　兵士の一人が質問すると、マーメイドギルディは柔和に微笑ほほえんだ。
　まるで、突然の美少女転校生と、それに質問を浴びせる男子生徒のような光景だ。
「ツインテイルズという戦士、アルティメギルの歴史の中でも類を見ない難敵だと聞いたわ。このまま強力な戦士を補充するだけでは、侵略が停滞するのは必至。そこで、科学班がサポートできないかと考えたの。私、戦闘はからっきしだけれど、科学で皆さんのお力になれるかもしれないと思って」
　簡明な返答に、兵士たちは思い思いに嘆じた。にわかにざわめきだすホール。
「というわけで、皆さんさえよろしければ……是非、この部隊に置いてくださいね」
　深々と頭を下げるマーメイドギルディ。
「遠慮せずに、マーメイドギルディちゃん、って呼んでくれると嬉うれしいわ」
　戦士たちは、周りを窺うかがいながら不揃いに歩み出て、マーメイドギルディの周りに集まった。
　しかし、彼女の半径一メートル以内には誰だれも近付かない。

　童貞が女性を前に展開する強固なる結界、ＫこれでＧげんかいＳスペースである。
「も、も、も、もちろんですとも。こちらこそ、是非に」
「むさ苦しいところですが……あ、ええと、椅い子すはいかがいたしますか。フットレストは必要ですかな？　ランバーサポートつきがよろしいか？」
「そ、そうだ、音楽でもかけましょうか……『Ｇ線上のアリア』などはいかがか」
　どぎまぎしながら、探り探り彼女に気を使う。
　格好をつけてクラシックなどを勧めようとしても、アニメや映画、ＣＭでよく使われている超メジャーなものしかレパートリーにない辺りが、彼ら末端兵のポテンシャルの限界だった。
「本当、お気遣いなく。…………んー……」
　マーメイドギルディが、値踏みというには清せい廉れんな視線で戦士たちを順に眺め始める。
　ツインテールの生えたティラノギルディをオタサーの姫と崇あがめた彼らではあったが、「可愛かわいいが中身が俺たちな姫」ならガツガツ接していける。美少女上官だったダークグラスパーも、色々と残念だったので同様だ。
　しかし……初めての女性の同僚、「マジ姫」相手ではそんなことはできない。
　……ちなみに、テイルレッドが相手なら、敵同士とはいえマジ姫を通り越して崇拝すべき女神なので、さほど照れは無い。むしろ、かえって平気なのだが。
　今このホールにはびこっているのは、クッソめんどくさい思春期の距離感だった。
「科学班、か……」

　スパロウギルディは姫の囲いを離れ、手にしていた情報端末を操作した。改めて、情報をチェックする。
　こちらの増援要請に対しての返信は、確かに〝皆無〟と記載されている。
　科学班の協力自体が異例だとしても、それが組織の公式な決定であれば、この返信の中で教えられていてもよいはずなのだが……。
（まあ、よいか。戦意が向上するのはよいことだ……）
　スパロウギルディの思案を余よ所そに、マーメイドギルディは視線を正面に立つ二体のエレメリアンに定め、熱烈な眼まな差ざしを送り続けた。
「ど、どうなされた、マーメイドギルディ……ちゃ、ちゃん……」
　居たたまれずに問い質ただす一体に、マーメイドギルディがしなを作りながら応える。
「いえ。あなたとあなた――どちらが受けか、シミュレーションしてたの。ふふふ」
「え…………受け……？」
　視線を注がれていたもう一体も不思議そうに聞き返す。
「あ、私、男子愛属性ボーイズラブなので……出会った男性型エレメリアンは、全員カップリングを作ることにしているの」
　魔女の紡つむぐ呪のろいの言葉が、ホール内を瞬時に毒の霧で包む。
「ふふふ、こんなに人数が多いと無限にカップリングが作れるわ！　来てよかったー!!」

　数秒後。
　屈強な戦士たちは一斉に猛然とダッシュし、ホールを後にしたのだった。

◇

「まあ、観み束つか君！　すごく似合いますわね！」
　ソファーに座ってテレビを見ていた慧え理り那なが、俺の姿を認めるなり手を組んで立ち上がった。
　ちょうど目当ての番組を見終わったところのようだ。
　愛あい香かを追い、俺とトゥアールとイースナは家の中に。そのままリビングへと移動した。母さんはお店の常連客と色々話があるらしく、そのまま店に残っている。
　テレビの横で、体育座りをしている愛香を発見した。
　視線を戻すと、まだ慧理那は俺を見つめていた。桜さくら川がわ先生も近くに寄って、俺をしげしげと観察する。
「うむ。似合ってるぞ観束、きっと結婚式でタキシードも似合うはずだ」
　賞賛とともに、三角折りした紙片を俺の燕えん尾び服の胸ポケットに挿し入れてくる桜川先生。
　まあ、いつものあれでしょうな。
「わ、わたくしも観束君に執事になってほしいですわ」
　慧理那は燕尾服の袖そでを引きながらそう嘆願する。体育座りの体勢から一足飛びでソファーの前のテーブルを飛び越え、愛香は慧理那に詰め寄る。
「駄目よ会長！　他の人と同じお願いはしないルールだったでしょ⁉」
「あうう、そうでしたわ……」
　愛香たちの間で、そんなルールが取り決められていたのか……。
「では、わたくし観束君にメイドさんになってもらいますわ！」
　名称と衣装の違いはあれど、役目は同じ。男女平等を推進するお嬢様。

「おお、それはいいな。メイド服なら私のを貸すぞ、観束」
「いや、桜さくら川がわ先生……その膝ひざ上数十センチのスカートは、さすがに」
　桜川先生の目が普通に本気だったので、俺はきっちりと断っておく。
「え、えへへへへへ……メイド服、似合いそう……」
　イースナが、口くち端はの涎よだれを手の甲で拭ぬぐう。
　この人たち、テイルレッドになった俺にメイド服を着せようって言うんじゃないよね？　男の俺を脳内でメイド服に着せ替えして、この反応なんだよね……？
「津つ辺べさん、もうよろしいんですの？」
「あ、うん……これ以上は…………我慢が……いや、何でもない」
　手を振って誤ご魔ま化かす愛あい香か。とにかく、愛香は先ほどの奉仕で満足してくれたようだ。

　今までずっとここでヒーロー番組を観みていた慧え理り那なに対し、イースナは少し不満げのようだ。
「ド、ドＭさん……総そう二じさんが、貧乳さんの毒どく牙がにかかろうとしている、この時に……ヒーロー番組を観ているなんて……」
「わたくし、リアルタイムで観るのが信条ですので……」
「…………子供っぽい……」
「む……」
　大好きなヒーロー番組を引き合いに出され、さすがの慧理那も唇くちびるを尖とがらせる。
「ヒ、ヒーロー番組は、卒業するべきです……。子供のものだし……私たち自身が、この世界の、ヒーローなんですから……」
「確かにわたくしたちはヒーローですが、まだまだヒーロー番組から学ぶべきことはたくさんあります！　何より、大人が観ても素晴らしいも

のですわ！」
「と、年は下でも、私の方が、大人……。エロゲー、たくさんやって、知識もあるし……」
　善いい沙すな闇あん子この状態なら愛香やトゥアールと口論することも珍しくないが、素の状態で、しかも慧理那とここまで言い合うなんて珍しいな。何かきっかけがあったんだろうか。
「ドＭさん、エロゲー、やったこと、ないでしょう……」
「むむぅ～……」
　勝ち誇るイースナを見て、さらに唇を尖らす慧理那。
　メインの対象年齢は違うと思うけど、ヒーロー番組とエロゲーって異種格闘技すぎて同じ土俵で戦うものじゃないだろう……。
「な、何だったら……エロゲーのこと、教えてあげなくもない、です……。わ、わ……私の家、とかで……」
「イースナさん、わたくしのこと、認めてくださったんじゃありませんの!?　ヒーローへの憧あこがれだけで戦っているのではなく、きちんと信念を持っていると!!」
「……え、あ、あ……そ、それとヒーロー番組好きとは、別、っていうか……」
　慧え理り那なの反論に遭い、イースナは彼女に近づけていた顔を素早く引っ込めた。
　………………あれ？　イースナ、もしかして今、慧理那を自宅に誘った……？
　決して自然な流れだったとは言い難いけれど、イースナなりに、頑張って友達を遊びに誘ってみたのかも。
　うわ、何だろう、気づいてしまったら微笑ほほえましいというか……何か嬉うれしいぞ!?
　慧理那も、普段は人一倍そういう気配りができる子なのに、大好きな

ヒーロー番組をやり玉にあげられたせいで、ちょっとそこまで考えを回せていないみたいだ。
　これは……後押ししてあげたいけど、どうしたものかな。
「……ふ、ふんだ。別に、いい、です。ドＭさん、ドＭのくせに、あまりにも、性知識が貧弱、だから……教えてあげようと、思ったのに……」
　ああ、やっぱりイースナ、むくれて撤回してしまったか……。
　この調子だと、俺が余計な口を出すと、ますます頑かたくなになってしまいそうだな。応援したいのは山々だけど……一歩は踏み出せたわけだし、黙って見守るのが吉か。
　愛あい香かと、トゥアールは……表情を窺うかがう限り、気づいていないようだし。
　一方慧理那はというと、ぷう、と頬ほおを膨ふくらませ、
「観み束つか君！　わたくしのお願いです！　一緒にヒーロー番組を観みてくださいな！」
　唐突にそうお願いしてきた。うーん、こちらもイースナに挑発されて、さらに意固地になってしまった感はあるが……慧理那らしいといえるか。
　しかしあまりにも普通、というか別にお願いされることでもないので、拍子抜けした。
「それだけでいいの？」
「先日買ったものがありまして……尊みこと、出してくださいな」
「はい、お嬢様」
　ソファーの後ろに控えていた桜さくら川がわ先生が、床に置いていた大きな鞄かばんからこれまた大きな箱を取り出した。
　テーブルの上に置かれた長方形の箱には、パノラマのように子供向けヒーロー番組の登場人物がプリントされていた。

「……こんな大きなブルーレイＢＯＸ、お店で売ってるのか……？」
「いえ、ネット限定の受注生産ですわ」
　だろうな……コンパクトケースをまとめたＢＯＸなのに、全長が家庭用エアコンと同じぐらいあるもんな。
「本当は昭和からの全ヒーロー作品をお勧めしたいのですが……鑑賞をご一緒するのに、あまりお時間を取らせるわけにもいきませんもの。こちらヒーローの一シリーズ、それも平成の初期一〇作品をまとめたブルーレイＢＯＸですの」
「一〇作品の割りには、随分多くないか……？」
「高画質版なので枚数が多いのですわ。ＴＶシリーズ全作全話と劇場版合わせて、ブルーレイ二二八枚組みです!!」
「………………にひゃくっ……」
　想像以上の物量に絶句する俺。
　受注生産なわけだよ……値段は聞かない方がよさそうだ。
「会長、最大で六時間よ!?」
　愛あい香かは時間を気にして、取り決めたらしいルールを確認する。
「もちろん！　厳選してぴったり六時間にしますわ」
　あ、それでも六時間ぶっ続けなんだ……。
「側そばでわたくしが全話概要や見所を説明しますわ！　それと新しい形態や武器が出る度たびに、スペックと設定と必殺技名などを余さず解説します!!」
　本編音声とコメンタリーを等音量で同時に聞くようなものだろうか。
　ヒーローものの話をする時、慧え理り那なは本当に生き生きとしているな。
「後々伏線となるシーンが来たら、ぽんぽんと肩を叩たたくのを合図にいたしましょう」
「それは前もって教えない方がいいんじゃ……」

　小説で、伏線に相当する文章が太字になっていて、欄外に「この部分はあとで重要になるので覚えておいてね！」とわざわざ書いてあるのを想像してしまう。
「それでは、再生ですわ」
　慧理那はブルーレイを再生すると──ソファーに座る俺の膝ひざの間に、その小さな身体からだを滑り込ませた。
「「なっ⁉」」
　ユニゾンして声を上げる愛香とトゥアール。
「……わたくし、子供っぽいですもの。甘えながら観みてもおかしくないですわっ」
　慧理那のツインテールが、偶然俺の両腕に乗っている……。生まれたての子猫が手の平に乗っているような儚はかなさだ、これでは迂う闊かつに動けないぜ‼
「それ絶対わざとでしょ、狙ねらったでしょ、会長‼」
「特撮に興奮したふりをしてお尻をリズミカルに震動して総そう二じ様の総二様を刺激するつもりですね⁉　わかっています、私ならそうしますから‼」
　愛香とトゥアールの追及を優雅にスルーし、慧理那は初めて映画に連れて行ってもらった子供のようにはしゃぐ。
　そして、先ほど一悶もん着ちやくあったイースナへと、意味ありげな視線を送っていた。
「……ず、ずるい……ドＭさんなのに、そんな、素直な甘え方……」
　親指の爪つめを噛かんで体育座りしながら、視線を送り返すイースナ。
　これは愛香風に言えば、歓迎すべき喧けん嘩かじゃないのかなあ。
　慧え理り那なのツインテールで動きを封殺されたこの嬉うれしい悲鳴な状況でなければ、もっと二人のやりとりを見守りたいところだ

が……！
「始まりますわ、観み束つか君！」
　くっ、ツインテールが俺の腕の上でリズミカルに震動し、刺激してくる……!!
　この体勢で六時間……果たして俺は、耐えられるだろうか……。
「あっ！　タイトルの直後に出てくる食事シーンに、ラストでの逆転のアイテムが隠されていますから、お見逃しなくですわ!!」
　そして、ごっこではない真のお嬢様は、開始ハナからすっげーネタバレしてくるのであった。

◇

　マーメイドギルディが丁てい重ちように部隊に迎えられて数日。
　アルティメギル基地の最奥には、早くも彼女の工房が完成していた。
　だがその工房には、ビーカーも、薬品も、はたまた電子部品や金属片も……一目見て研究室であるとわかるようなものは、ほとんど存在しなかった。
　壁に貼られたポスターには、耽たん美びに絡み合うアニメキャラ二人。どちらも少年だ。
　部屋の一角を占める大きなラックには、いつの間に仕入れてきたのか……この世界の人気男性声優が出演しているＢＬＣＤが、ずらりと並ぶ。ＣＤの下の段には、背表紙ではタイトルが判読できない薄さの本が隙すき間ま無く詰まっている。この棚だけで、ＢＬ前線基地の完成というわけだ。
　いや、人間ならばまだいい。魔女の食指は、人外にまで及んでいた。
　デスクの上では、特撮ヒーローの巨大ロボットの玩具が二体。その同じ作品の主戦力と追加戦力のロボットは、少ない可動域を全開にして覆

おおい被かぶさって抱き合い、おもちゃメーカーが意図しないグレート合体を果たしてしまっていた。

　恐るべきは、男子愛属性ボーイズラブを極めし魔女。

　この工房はまさに、ＢＬという禁断の魔力がはびこる邪城だった。

「テイルレッドは……ツインテイルズの最大戦力……。幹部撃破数が突出しているわね……」

　絡み合ったロボットを横に臨むデスクモニターに、ツインテイルズの映像が映されている。

　マーメイドギルディは、この基地に記録されたツインテイルズの戦闘記録を閲覧していた。

「この貧乳ブルーちゃんは、エレメリアンの撃破数だけならレッドにも負けてない……と」

　同じ女ゆえの余裕だろうか。屈強なアルティメギル戦士たちが再生を拒こばみ、せめて早送りを、と恐れてきたテイルブルーの凶悪ムービー集を、涼しい顔で眺める。

「イエローは、成長幅だけならツインテイルズでもトップクラス。ブラックは……ブラックは……うーん……ちょっと優等生なスペックね……特殊能力は私好みだけど」

　ブラックに世間が変質者の烙らく印いんを押した忌いみ技、筋肉召喚の儀と称されしセラフィックインフィニットにこそ、マーメイドギルディは理解を示していた。

「……これが見られただけでも、この基地に来た価値はあったわね。やっぱり情報は、現場で収集した生の物が一番だわ」

　情報と知識に鮮度を求める。科学者らしい一面を見せるマーメイドギルディ。

　続いて映像は、これまでにツインテイルズに倒されたエレメリアンが

全戦士、サムネイルとなって整然と表示された。その数に驚き、小さく嬌きよう声せいを上げるマーメイドギルディ。
「やりにやったり……。もったいない、たくさんの組み合わせを潰つぶしてくれたわけね……」
　まるでゲームのスコアをリプレイするかのような、淡泊な批評。
　仲間を尊とうとぶ他の戦士たちとは、雰ふん囲い気きを異にしている。

「――――何やら忙せわしなく立ち回っているようだが、暇ひまを持て余しているのなら発明の一つでもしてみせたらどうだね、科学者」

　並の男子おのこであれば立ち込める腐の闘気に恐怖し踵きびすを返すであろうこの魔城に、雄お々おしく足を踏み入れる者がいた。
　頭部から膝ひざまでは、白いローブに覆おおわれていて判然としない。
　しかし視線を落とすと、節だった足首と、凶悪な巨きょ爪そうを宿す爪つま先さき。
　その巨爪でもって、ＢＬという強固な結界へ踏み入ってきたのは明白だった。
「あら、レディの部屋にノックも無しに失礼じゃなくて？　グリフォギルディ君」
「……恐れ知らずな女レデイだ。首領様も、戯たわむれが過ぎればお目こぼしもされんぞ」
　グリフォギルディ――首領の勅命を帯びた戦士。
　罷まかり越した神の一剣ゴー・デイア・ソードの尖せん兵ぺいを前に、マーメイドギルディは渇いた嘆息をこぼす。
「あーあ。神の一剣ゴー・デイア・ソードがこの部隊に追いついて来る

前に、もう少し遊びたかったのに」
　遊びの終わりを諭さとされた子供のような無邪気な声で拗すねるマーメイドギルディ。
「……何を他ひ人と事ごとのように……君もまた、私と同じく栄誉ある神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士ではないか」
　だが、グリフォギルディは特に咎とがめ立てはしなかった。
「断っておくが、ここに来たのは私だけだ。君にも拘かかずらうことはない」
「あら、この部隊に合流して指揮を執とるんじゃないの？」
　グリフォギルディは聞こえよがしに舌打ちをする。
「そんなつもりは毛頭無い。あのような下級戦士ども、仕事の邪魔になるだけだからな」
「アルティメギル最高の交渉人ネゴシエーターと言われる人は、志こころざしが違うわね」
　皮肉たっぷりに持ち上げるマーメイドギルディ。
「私は自分の任務しごとに誇りを持っている。知性と力を備えた自分にしかできぬとな」
　いっそ清すが々すがしいほどのエリート意識、高慢なまでの選民思想だった。
「それじゃあ、どうしてここに……私の部屋に来たの？」
「同じ質問を君にしたいものだな。何なに故ゆえこの世界へ？　首領様から正式に命を受けたのは私なのだがね」
　マーメイドギルディはほくそ笑む。
　拘かかずらうことはないと言っておきながら、グリフォギルディは明らかに目の上の瘤こぶとしてマーメイドギルディを意識している。部隊に合流するつもりがないのにここに来たのは、気ままに単独行動をする彼女が目め障ざわりで仕方がないのだろう。

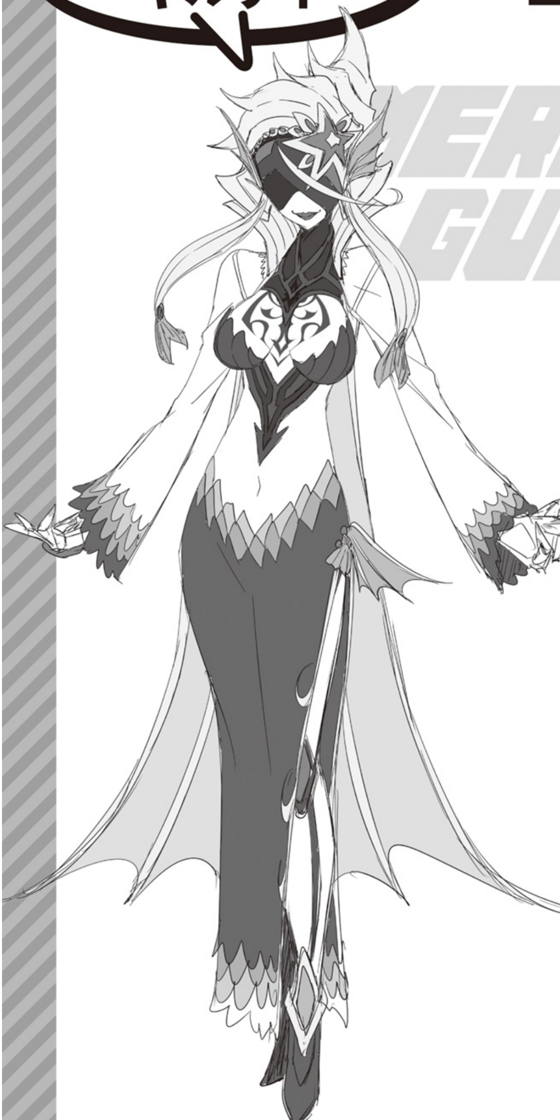
　いつまでも首領が目を溢こぼすわけではないという脅しも、裏を返せば今特別扱いを受けていることを好ましく思っていないということだ。
「私は科学者としての探究心に従っているだけよ。この世界はこれまでに例を見ない激戦区ですもの、ここで踏ん張っている部隊に助力したいと思うのは自然なことでしょ？」
「確かに君は優秀な科学者だ、同士を研究材料としか見ないドライさが特にね」
　最強部隊の戦士同士の腹の探り合い。まかり間違ってこの二人が衝突するようなことがあれば、この部屋どころか基地そのものが消し飛びかねない。
「もっとも、君がここで何をしようと、もう意味は無い。私がこの世界を、君の手が及ばないほどに価値のある場所へと変えるからだ」
　余裕を見せ、先に折れたのはグリフォギルディだった。
「それまでは、この部隊の戦士を焚たき付けるなりなんなり、好きにするがいいさ」
「ええ、遠慮なくこの部隊でカップリングを量産するつもりよ」
　この期ごに及んで適当に躱かわされ、虚むなしく嘆息するグリフォギルディ。
「人間のように子を為なせるわけでもない……私たちエレメリアンを愛し合わせてどうする」
「──考えが人間よりも浅はかね、グリフォギルディくん」
　突風のように部屋狭しと吹き荒すさぶ腐女気オーラに、グリフォギルディはむ、と唸うなる。
「人間の女の子を見なさい……少年同士はおろか、動物、果ては無機物に至るまで、男と見なし、そして絡めることができる──私が唯一尊敬するのは、人間の思考の無限大の大きさ」
　グリフォギルディは、デスクの上で絡み合うロボット玩具へ目線を

やった。
　確かに、無限大に軽く足を突っ込んでいる。
「空想の限界突破……それこそが属性力エレメーラの原点にして頂点ではなくて？　理屈じゃないのよ、私たちは」
　理屈ではなさすぎて恐ろしいが、グリフォギルディは反論しなかった。
「存外、最強のツインテールとはそのような変わり者かもな。早く直じかに会ってみたいよ」
　マーメイドギルディが、自分の任務の邪魔になるか否いなか。それさえ確かめれば、このような魔ま窟くつに用はない。結構、とばかりにグリフォギルディは話を打ち切る。
　マーメイドギルディは心中を見透かしたように、くすりと微笑ほほえんだ。
「ただ一世界の戦士たちに、アルティメギル四し頂ちよう軍の三軍が全壊させられているのよ。すでに奇跡は三度起こされているわ。だったら──四度起こらないとも限らない」
「では、この陰気な部屋で始終見届けるといい。四度目に足を踏み入れた瞬間、奇跡が微み塵じんと砕ける様さまを」
　奇跡を打倒すると豪語する最強軍。
　最後の一軍の先せん鋒ぽう──グリフォギルディは、誇らしげにローブを翻ひるがえし歩み去って行った。
「……可愛かわいいわね」
　マーメイドギルディはその背中へ、情欲にも似た淫いん靡びをまとわせた視線を向ける。
「よーし、グリフォギルディ君は首領と絡ませちゃおっと！」
　彼女が嬉き々きとして呟つぶやいた瞬間。
　神速の足運びでマーメイドギルディの眼前まで逆走し、グリフォギル

ディは声を震ふるわせた。
「やめろ、本当にやめろ頼むやめろ絶対やめろ」
「え～？　仕方ないわねえ。それじゃあ、次に会うまでに相手を見み繕つくろっておくわね！」
「私は、絡まねばならぬのか！　絡むのは不可避なのか!!」
　神鳥グリフオンの慟どう哭こくが、ＢＬの城に木こ霊だました──。

キャラクター名鑑 033

マーメイドギルディ



DATA

身長：179㎝

体重：227㎏

属性力：男子愛(ボーイズラブ)属性

神の一剣(ゴー・ディア・ソード)の戦士。そしてアルティメギル科学班の現最高責任者でもある。属性力奪取用のリングといった組織全隊で共用の備品の製作・開発などが本来の仕事。女性人格の戦士で、その美貌と思わせぶりな態度で同僚を虜にする。首領さえも恐れず好奇心の赴くままに身勝手な行動をしており、未だその実力の底は知れない。友人のユグドラシルギルディにBLのよさを説き、貴の三葉(ノー・ブル・クラブ)を腐色に染めた張本人。

第二章　観束総二包囲網。

　今夜も、夢を見ていた。

　黒。どこまでも続く闇やみ。一条の光さえ射さすことのない暗黒。

　アルティメギルにいた頃、イースナはいつもこの夢を見ていた。

　自分の信念のためにあえて悪逆を受け容れたイースナにとって、黒は誇らしい色だった。

　誇らなければ──泣いてしまいそうだった。

　正しいことをしているのに、何な故ぜ自分の見る夢はこれだけなのか。無意味の烙らく印いんを突きつけるような、無の光景なのか。いつしか、眠るのが疎うとましく思えていた。

　ツインテイルズになって、生き方を誇れるようになって。

　やっと──楽しい夢を見られるようになった。

　仲間と過ごす楽しい世界。楽しい時間。いつまでも続いて欲しいと願っていた。

　けれど、その美しい世界に再び闇がもたらされた。さらに恐ろしい終末やみが。

　自分の想い人が究極へと到達したあの日から毎晩、途切れることなく悪夢を見る。

　地平の果てまで覆おおい尽くした、怪人の大群。それにただ一人相対する、赤い少女。

　彼女の後ろには、青、黄、黒の装甲の少女……そして、白衣の少女が倒れ伏している。

　荒廃したビルに、ヒビ割れた道路──周囲のどこにも、彼女たち以外の人間の姿はない。

　大地だけではない。怪人の群れは、止とめ処どなく出現し、空までを

も闇で覆い始めた。
　ボロボロに砕けた装甲、折れかかった剣。赤の少女に残された力はそれだけだった。
　引き絞るような叫びを轟とどろかせ、赤い少女はただ一人闇へと立ち向かっていく。
　炎は流星の最後の煌きらめきの如く燃え盛り──しかし、怪魔の群れに呑のまれて消えた。

「っ……は……！　あ、はあ、はあ……!!」
　溺おぼれかけてようやく海面に浮上したかのように、空気を求め悶もだえ喘あえぐ。
　イースナは天井、壁、床と視線を走らせ──ようやく、夢から覚めたのだと自覚した。
　汗で眼め鏡がねのノーズパッドが滑り、ずり落ちそうになる。イースナは無意識に眼鏡のブリッジを指で押し上げ、人ひと心ごこ地ちついた。目覚まし時計を見ると……まだ、夜明け前だった。
　アイドルの仕事を終えて帰宅し、着替えもせずに部屋のベッドに寝転んで、そのまま眠ってしまったのだ。最近寝不足だったせいだろう。でも眠りたくなかったのだ。
「イースナちゃん、また、怖い夢……見たんか？」
　ベッドの前には、メガ・ネが心配そうに立っていた。
「……ええい、また見張っておったのか。ちゃんと自分の部屋で休眠状態スリープモードに入れ」
「イースナちゃんこそ、着替えもせんと……眼め鏡がねつけっぱなしで寝たら、危ないで」
「わかっておるわ。おかんか貴様……」
　ただの夢ならばいい。どれだけ悪夢を見ようと、覚めれば楽しい現実

が待っている。
　しかしイースナは、眼鏡を通して全てを見通す少女。あるいは近い未来でさえも、二つのレンズに映すとの自負がある。
　その彼女にとって、夢は、もう一つの現実でもあった。
「なあ、メガ・ネ……。わらわたち──」
　そこまで言いかけて、善いい沙すな闇あん子こから変身を解除し、イースナの状態となって。
　素の自分で、イースナは心細そうに頷うなずいた。
「ずっと、この世界に、いられるよね……？　みんなと一緒に……いられるよね……？」
　メガ・ネは、ベッドの上で膝ひざを抱かかえるイースナの頭を、そっと撫なでる。
「もちろんや。ウチも、イースナちゃんも、総そう二じ君もトゥアールはんも……みんな、ずーっと一緒や」
　イースナはこくりと頷き、気持ちを切り替えるように眼鏡のズレを指で直す。
　総二の部屋に。一番安心できる場所へと、イースナは向かうのだった。

◇

　執事奉仕に、身み動じろぎもせず六時間の映画鑑賞。昨日はなかなかハードな一日だった。
　新たな週の始まり。帰りのＨＲで、クラス担任の樽たる井い先生が相も変わらずのほほんとした口調で連絡事項を伝える。
「えーと、皆さんには直接関係ないですけど～、ツインテイルズに夢中で受験に手がつかない受験生が多くて大変らしいので、家族に受験生が

いたら注意してくださいね～」
　こんな注意を学校の担任が生徒にするのも妙なことだが、実はこれ、この数日ニュースやネットなど様々な媒体で取り沙ざ汰たされている問題だった。
「確かに、この間のレッドたんの可愛かわいさは最強だったからな」
「ああ。強いし可愛いし、何度も見たくなって勉強が手につかねえ」
「むしろ俺はテイルレッド大学を受験するぜ。滑り止めはなしだ」
　クラスの男子たちの頼もしすぎて泣ける呟つぶやきに、俺は教育制度の崩壊を懸念する。
　テイルレッド大学って何だ……。いつか本当に開校しそうで怖い。
「私、今年お姉ちゃんが受験だから……これ、買っちゃった」
　ＨＲが終わり、帰り支度を皆が始める中、一人の女子が鞄かばんから青い人形を取り出した。よく見ると、テイルブルーだ。
　俺と一緒に覗のぞき込んだ愛あい香かの表情が固まる。
「おっ、それ、テイルブルー御守りだな」
　すかさず横から商品を説明する男子。俺にはテイルブルーのフィギュアに見えるが……。
「今大人気らしいよ！」
「えっ、テイルブルーが⁉」
　クラスの女子が誇らしげに語るのを聞き、愛香が険を解いて顔を綻ほころばせる。
「……やっぱり、泣いてるところを見たから、みんな誤解が解けたんだよ」
「そ、そっかな……ちょっと恥ずかしいかも」
　愛香と小声で話し合う。
　さっき男子が言っていた「この間のテイルレッド」とは、ティラノギルディとの戦いの映像だ。駆けつけたテイルレッドを見て涙するテイル

ブルーまでが、ティラノギルディが全世界に中継した映像だ。その後俺が変身解除してしまったり、レッドがティラノギルディを倒したところまでは放送されていないので、やはりそこが一番インパクトがあったのだろう。
　ツインテイルズの劣勢をわざわざ世界に向けて中継するという、卑ひ劣れつな作戦だったが……逆にそれが、完全無欠・冷酷非道というテイルブルーのイメージの緩和に一役買ったのだから、皮肉なものだ。
　テイルブルーは、素晴らしいツインテールだ。それは世界の誰だれもが認めていたはず。
　ただちょっと戦い方が残ざん虐ぎやくだったり、敵を脅迫したり、必要以上に痛めつけたり、理性を失って血祭りにしたり、一般人を威い嚇かくして散らしたりするせいで、誤解を受けていたのだ。
　これからは、デックさんのようにテイルブルーをかっこいいと思う人が大勢出てく──

「テイルブルーを代わりに滑らせて験げんを担ぐ合格祈願アイテムとして、大人気なんだって!!」

　クラスの女子が、見事に再現されたテイルブルーの胸をついーと指で滑らせる。
　樹脂製のフィギュアだというのに、そこには摩ま擦さつ係数がまるで感じられない。
「あれ、夏頃フィギュアとして出したものの全く売れずに返品されて、袋だけ替えて受験アイテムとして今の時期に販売し直したらバカ売れってパターンらしいですよ」
　トゥアールが小声で解説する。商魂たくましいとはまさにこのことか。

　一方、テイルブルーの評価が依然としてネタ枠と知った愛香は、遣り場のない怒りを全身に溜ため込んでいた。
「あ、あれ？　どうしたの愛香!?　砕けそうなぐらい歯を食いしばって!!」
「別に……何でもない……」
「あっ……ああっ…あはは……」
　フィギュアを持った女子が、愛香とテイルブルーのフィギュア、しかもそれぞれの一部分だけに視線を往復させる。男子もおほん、げほん、とわざとらしくくしゃみをしたり、突然話題を変えたりしてその場を離れていった。
　みんな、愛あい香かの前で貧乳をネタにして「しまった」と思ったようだ。
「……気にしないで！　愛香も胸小さいけど、テイルブルーほどじゃないでしょ!?」
「そうだね……テイルブルーよりはあるかもね……」
　愛香の頬ほおを血涙が滴したたる幻視を覚える。
　一応、前進してはいると思うんだけどなあ……テイルブルーの立場。

　　◇

「さて……アルティメギルはどう出るかな」
　ツインテール部部室に俺と愛香、トゥアール、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生。アイドルの仕事を終えた善いい沙すな闇あん子こも合流し、これからの対策を話し合うことにした。
　俺がティラノギルディを倒してから今日までの数日間、エレメリアンは一体も出現していない。
　だがこれはもはや想定通り。大きな戦いを終えた後や一部隊が完全壊

滅した後は、アルティメギル側が戦力増強期間としてインターバルを挟むのが通例となっているからだ。
「普通に考えたら、そのうち最後の一軍が来るんでしょ？　そいつらブッ倒したら、後は元締めだけ。ゴールが見えてきたじゃない！」
　先ほどの精神的ダメージも癒いえ、愛香は嬉き々きとして展望を語る。
「ああ。四し頂ちよう軍は、最後の一軍が残っているからな」
「四がハート、三がクラブ、二がダイヤでしたので……残る一は、スペードですわね！」
　慧理那も気合いを入れる。
「スペードは騎士を象徴するマークでもありますわ。きっと、正々堂々と真っ向勝負を挑む強者の集まりに違いありません……!!」
「搦からめ手で来ないような奴やつの方が、あたしはやりやすいわね。ま、いずれにしてももうしばらくは来ないかな」
　愛香はどんな敵かはさほど興味がないようだ。
　展望を語る俺たちとは裏腹、イースナは表情を険しくし、眼め鏡がねのブリッジを指で持ち上げた。
「―――最後の一隊はこの世界には来ぬ。いいや、来てはならぬのじゃ」
「……え、じゃあ来ないの？　そいつら」
　来て欲しいという期待はこれっぽっちもしていないだろうが、そいつらを倒すことがゴール一歩手前だと思っていたからだろう、愛香が困惑気味に聞く。
　しばしの沈黙の後、イースナは重い口を開いた。
「四し頂ちよう軍最後の部隊。その名を―神の一剣ゴー・デイア・ソード」
　まるで、そいつらの名前を口にすることすらおぞましいと言わんばか

りに。
「正真正銘、アルティメギルの最強部隊じゃ」
　神の一剣ゴー・デイア・ソード。
　それが……最強の敵……。
「そもそも四頂軍は、与えられている任務が全て違う。この世界の戦士、ツインテイルズが三隊まで挑まれ、そして撃破することとなったのは……ほとんど偶然の産物じゃ」
「確かに……。美の四心ビー・テイフル・ハートはあなたが引き連れてきた。貴の三葉ノー・ブル・クラブは、フェニックスギルディ討伐に出かけたあなたに帯同し、そこへ私たちの旅行先がたまたま重なってしまった──」
　トゥアールの言葉を引き継ぎ、イースナが続ける。
「そして、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスは──プテラギルディめが処刑を命じられたわらわを結果的に庇かばったために、後追いで侵攻せざるを得なかっただけ。わかるか、侵攻部隊が倒される度たびに適宜投入されてきたわけではないのじゃ」
　つまり、四頂軍は他部隊の仇かたきを取るためにピストン補充されてきたわけではないということだ。そうなると、次は確実に一の部隊がこの世界に来ると予想していた俺たちが間違っていたわけだな。
「神の一剣ゴー・デイア・ソードは、本質からして他の部隊とはあまりにも異質すぎるのじゃ。首領直属軍という理念を体現した、悪魔の部隊といってもよい」
「神の一剣ゴー・デイア・ソードとは……いったい、何を目的とした部隊ですの？」
　ここまで来てはぼかす意味もないと判断したのだろうか。イースナは再び眼め鏡がねのブリッジを指で押し上げ、神妙な表情で告げた。

「――その世界の破滅じゃ」

　当然、真っ先に愛あい香かが血気を露あらわにして反論した。
「はあ、今さら？　あいつら、元々侵攻した世界を滅ぼしてきてたじゃない!?」
「悪いことは言わぬ、神の一剣ゴー・デイア・ソードが来てくれればなどと間違っても願うなよ。あやつらを倒せば首領に届くのではない、あやつらが来たら全てが終わる……。人間の属性力エレメーラを奪われるだけでは済まん、この世界が地じ獄ごくへと変えられてしまうのじゃ」
　愛香の反論には答えず、会話を打ち切るようにイースナは言い放った。
「あやつらは首領の命がない限り、絶対に動かぬ。いたずらに刺激せず、後は残存兵を適てき宜ぎ倒していけば、この世界の平和は保たれる」
　イースナですらその全容を知らず、ただ絶対的な畏怖だけを持つ最強部隊、神の一剣ゴー・デイア・ソード。
　愛香は納得がいかないようだが、……食い下がろうとはしなかった。
　かくいう俺も、何かが引っかかるのだが……。
　確か、フェニックスギルディが穏やかではないことを言っていた記憶があるのだ。
　と、ナーバス気味なイースナを和なごませようとしてか、慧え理り那なが別の話題を切り出した。
「あの……イースナさん。この間のことなのですけれど―わたくし、謝りたくて……」
　俺は思わず反応しかけるが平静を装う。この前イースナが慧理那を自分の家に誘いかけていたということに、慧理那も後から気づいたのだろうか。きっとイースナも喜ぶはず―

「トゥアールのおっぱい」
　　　「トゥアールのおっぱい」
　　　　　　　「トゥアールのおっぱい」

　エレメリアン出現のアラートだ。
　毎度お馴な染じみの俺の間抜け声が、俺の思考と慧理那の謝罪を強引に打ち切った。
「……エレメリアン……今回は、インターバル早かったわね……」
　苦虫を噛かみ潰つぶしたような表情の愛あい香か。皆に飲み物を用意しているところだった桜さくら川がわ先生も、むう、と唸うなる。
「最後の一隊が合流したということでしょうか？」
　慧理那の予想に、イースナがビクリと肩を震ふるわせる。
「それにしては、反応はあまり強くありませんね……端的にいうと、普通です」
　トゥアールが探知した属性力エレメーラの強さをもって冷静に答えた。
「とにかく出撃しよう」
　まあ、現れた敵が大して強くないなら、残存兵が独断専行したとかだろうな……。

　　　◇

　エレメリアンの反応があった人ひと気けの少ない湊みなと場ばへ、揃って出撃した俺とブルー、イエロー、ブラック。
『姿は見えませんが、エレメリアンの反応はその辺りからです。皆さん油断せずに！』

　トゥアールの通信を受け、俺たちは周囲を探る。
「……はっ……!?」
　言い知れぬ戦せん慄りつに身を貫かれ、振り返る。
　夕霧の奥に──影が揺らめいていた。

「───いい尻だ」
　湊みなとに響きわたる、ダンディズム溢あふれる渋声。
　霧を肩で切り、見上げる長ちよう躯くが悠ゆう然ぜんと歩を進めてきた。
「お前は……!?」
　勿もつ体たいつけるような白いローブをまとった長躯。
　視線を少し下げただけで、何者という疑問さえも消滅する。
　刃やいばのような爪つめを備えた脚が、ローブに下に覗のぞく。──エレメリアンだ。
「ツインテイルズよ……。君たちの尻、しかと見た」
　……しり？　尻って言ったか、今。尻の属性なのか……。
　三段落ちでテンションが下っていく。
「テイルイエローだけは、装甲が邪魔でよくは見えなかったが……はみ出た部分で十分に推測は可能だ。君たちは、実にいい尻をしている」
「は、はみ出してませんわ！」
　腰部装甲で守られたお尻を咄とつ嗟さに手で隠すイエロー。
「装甲で隠れてない部分ってことだろ!?」
　俺は取り乱すイエローを落ち着かせる。
　エレメリアンは、イエローの狼ろう狽ばいに構わずに続ける。
「───返礼に、我わが尻も見せねばなるまい」
　何でそうなる。
　ブルーは露骨に顔を顰しかめている。属性の中でも、トゥアール言う

ところの「部位属性」━身体からだの一部分に注目する属性は審美も直球なため、ブルーの苦手とする分野だ。
　そいつはわざわざ俺たちに背を向け、ローブという名の白いキャンバスに描かれた模様を見せつけた。
　華美に装飾された剣を基調に形成された、荘そう厳ごんなエンブレムだ。
「っ！　な、そ、その紋章は━━━━!!」
　横一列に並び構えていた俺たちのうち、ブラックが息を呑のんで後ずさる。
「知ってるのかブラック……!?」
「あ、あれは……あれは……」
　声を震ふるわせ二の句を継げないブラックに代わり、白ローブは誇らかに自らを名乗り上げる。
「私は神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士━」
　俺たちへ振り返り、ローブの胸元を握り締める。
「その名もグリフォギルディ!!」
　勢いよく豪腕を振り抜き、掴つかんだローブを大おお仰ぎょうに放り捨てる。……が。
「……あ、あ、あ、爪つめが引っかかった……」
　禍まが々まがしい五指の爪が生き地じに引っかかり、投げたローブがぼふっと顔面に覆おおい被かぶさった。
　リアクションができず立ち尽くす俺たちへ向け、グリフォギルディは不敵に鼻を鳴らす。
「…………………………何かね？　その目は……私は君たちを試したのだよ」
　ぽてっと力無くローブを地面に落とし、
「私があえて見せた隙すきにまんまと乗り、攻撃を仕掛けてくるような

ら……今頃君たちは地に倒れ伏していただろう」
　グリフォギルディは俺たちへと指を突きつけてきた。ローブが引っかかった爪つめを。
「だが、存外頭を使う。まずは合格といったところか」
「わかった……もういいから、な？　仕切り直そう……」
　弁解に弁解を重ねて収拾がつかなくなりそうだったので、俺はリセットを提案した。
「……優しいな、幼おさな子ご……」
　哀愁漂う微笑を浮かべるグリフォギルディ。
　しかし、神の軍団の名に恥じない荘そう厳ごんな容よう貌ぼうだ。
　浅黒い全身で一際目立つ、真っ白く鋭い嘴くちばし。両手両足を凶器と彩る、刃やいばの如き鉤かぎ爪づめ。
　ローブを脱いでなおマントのようにはためく背の巨翼。
　神の国を我わが物顔で羽ばたく伝説の怪鳥、グリフォンに相応ふさわしい精せい悍かんさだ。
「私は神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士──グリフォギルディ！　優しさの返礼に、見よ、我が尻を!!」
　本当に一から仕切り直したよ。
　そして本当に尻を見せてきたよ、甲殻みたいにゴツゴツしてる尻を。
　ご丁てい寧ねいに翼を逆Ｖの字に開き、尻を見えやすくしているのが腹立たしい。
「君たちも、こちらへ尻を向けたまえ」
　尻をこちらに向けたまま、上半身だけを捻ひねって語りかけてくる変態。
「尻という、普段見えない部分を互いに向け合うことこそ、真に心を許す所作。握手や抱ほう擁ようなどという上辺の友好表示など、尻合わせの誠実さに比べれば貶けなし合いも同然なのだよ」

俺たちの誰だれも尻を見せようとしないので、グリフォギルディは寂しそうに向き直った。
「神の一剣ゴー・デイア・ソード……ついに最後の軍団のお出ましってわけ」
ブルーは掌てのひらを拳こぶしで叩たたき、戦意を剥むき出しにした。
「やはり、最近出現頻ひん度どが減っていたのは、部隊の補充だったのですわね……」
イエローも、十分に覚悟はできていたようだ。
最強最後の部隊の到来。
この世界を守る俺たちの戦いは――いよいよ大詰めを迎えたのだ。
「あ……あ……」
戦闘態勢を取る俺たちの中で、一人だけ激しく狼ろう狽ばいしている。ブラックは唇くちびるまで真まっ青さおにし、尋常ではないぐらい震ふるえていた。
「ブラック？　どうした」
俺はブラックの肩を掴つかんで揺さぶった。眼め鏡がねの奥の瞳ひとみは、恐怖に泳いでいる。
尻を見せてくる変態に動揺したのかと思ったが、どうも違う。
「何な故ぜ……何故じゃ！　何故神の一剣ゴー・デイア・ソードが！　お前たちが現れるはずがない!!」
確かにブラックは、神の一剣ゴー・デイア・ソードの危険性を訴えていた。それでも、実際に相対してからのこの怯おびえようはただ事じゃない。
「究極のツインテール……テイルレッドよ」
「！」
こいつ、何でそのことを……!?

「何故君が究極のツインテールだと知っているか……か？」
　俺の思考を読んだかのように、グリフォギルディは補足した。
「ティラノギルディの名誉のために言っておくと、彼はこのことを報告してきてはいない。あくまで首領様がお気づきあそばされただけだ」
　──名誉……。イースナから神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士は冷酷非道と聞いていたが、こいつらにも他部隊の戦士の名誉を守ろうとする気概はあるのか……。
「……ブラック、大丈夫だ。お前が考えているような奴やつらじゃないみたいだぞ」
「うう、ううう……」
　しかし、彼女の震ふるえは止まらない。ブラックはとうとう、俺に抱きついてきてしまった。
　自分より背の低いテイルレッドの胸を借りようとするほどの恐怖だなんて……。
　アルティメギルに長い間在籍し、その中枢にいたイースナ。
　彼女にしかわからない、こいつらの恐ろしさがあるというのだろうか。
　もちろん強いのだろうが、これまでのエレメリアンと何かが変わるようには見えない。威圧感なら、ドラグギルディやティラノギルディの方が遥はるかに上だ。
　ブラックの様子を見て、ブルーはきっとグリフォギルディを睨にらみ付けた。
「……レッド、ブラックをお願い。速攻でブッ倒して、こいつだって変態怪人にすぎないってわからせてやるから」
　ブルーはフォースリヴォンに触れ、ウェイブランスを出現させる。
　イエローもヴォルティックブラスターを手にし、銃口をグリフォギルディへと合わせた。

「よせ。戦うつもりはない」
　刃やいばのような爪つめが並んだ五指を突き出し、制止を促うながすグリフォギルディ。
「私は任務のためにこの世界へ来ている。君たちツインテイルズと争う理由はない」
　ブルーはその突き出した掌てのひらにウェイブランスの穂先を向けた。
「煙に巻こうとしてんじゃないわよ。あんたたちエレメリアンは人間の属性力エレメーラを奪う。私たちはそれを阻そ止しする。戦わない理由の方がないっての‼」
「奪わない……と、言ったら？」
「な……⁉」
　予想外の返答に、ブルーが困惑する。
「いやはや、その警戒ぶり……ダークグラスパーがよほど悪あし様ざまに喧伝したものと見える」
　向けられる戦意を一いつ顧こだにせず、グリフォギルディはこれ見よがしに嘆声をもらした。
「大方、神の一剣ゴー・デイア・ソードを悪魔の部隊だ何だと触れ回ったのだろう？　組織にいた頃から彼女は、そうして偏見で私たちを恐怖していたからね……形だけとはいえ、立場は上官だというのに」
　しきりにアルティメギル在籍中のイースナの話を持ち出すこいつが、どうにも癪しやくに障さわる。まるで、それを自覚させるためにわざとそうしているかのようだ。
「言いがかりも甚はなはだしいよ……。私たちほど理性的で知的な部隊は、他にない」
「エレメリアンは無条件で警戒するに決まってんでしょ、みんな変態なんだから‼」

「えっ」
　ブルーの指摘にグリフォギルディは一瞬素を出しかけたが、澄ました態度で続ける。
「とにかく……戦闘員アルテイロイドを伴っていないことから理解できよう。今、基地へ中継はされていない。これは私個人に課せられた極秘任務……侵攻部隊の存意とは別の〝会談〟なのでね」
　ブラックを抱き締めたまま、俺はグリフォギルディに真意を問い質ただした。
「……聞かせてくれ。俺だって、好きでお前らを倒しているわけじゃない。この世界に危害を加えないなら、争うつもりはないからな」
「レッド!!」
「大丈夫だ、油断はしてない。聞くだけだ」
　アルティメギルは、猪ちよ突とつ猛もう進しんな侵略をするだけの組織ではない。
　必要に応じて、休戦協定を宣言する時もあった。
「……四し頂ちよう軍が崩壊したことで、最後の一隊が降伏を宣言しに来たのかもしれない……」
『総そう二じ様、それは……』
　トゥアールが、俺の希望的観測を複雑そうに聞き返す。
　これ以上の被害を組織に出さないために、この世界から撤退する。
　最強軍の戦士がそのメッセンジャーとしてやって来るのは、信用を得るためにも理に適かなっていると思うのだが……。
　俺の淡い期待は━想像だにしない言葉で裏切られた。
「私の任務は━君たちの勧誘だ」
「勧誘だと!?」
「ツインテイルズ諸君。アルティメギルへ来たまえ。それぞれを幹部として遇しよう」

ブルーはランスを地面に物々しく突き立て、乾いた声を投げ放った。イエローも続く。
「………………ごめん。馬ば鹿かすぎて笑えないんだけど……」
「そのようなふざけた要求、わたくしたちが呑のむと本気で思って言っているのですか？」
ブルーはさらに怒気を強めた。
「最初っからあたしたちが受けるわけないって、わかってて言ってるでしょ。馬ば鹿かにするのも大概にしなさいよ」
とんでもない、と首を振るグリフォギルディ。
「もちろん、最大の目標は究極のツインテール──テイルレッド、君だ。しかし、君たちに四し頂ちよう軍をほぼ壊滅させられた今、他のツインテイルズの戦闘力も絶やすには惜しい」
───紳士ぶって交渉をしているが、端はし々ばしに隠しがたい戦闘欲求が滲にじみ出ている。
今、こいつは馬脚を現したのだ。「本来なら、お前たちは倒すのだぞ」と。
「ダークグラスパーも、まさか我われらがやってくるとは思っていなかっただろう。その通り、神の一剣ゴー・デイア・ソードは実働部隊ではない。世界の侵攻や属性力エレメーラの奪取などという些さ末まつな任務は、我らの与あずかり知るところではない」
本来自分たちは出撃してはいけない存在。
壊滅した四頂軍は、早々に立て直さなければならないという。
「つまり──君たち一人一人が新たな四頂軍となるのだ」
「はぁ？」
心底くだらなそうに吐き捨てるブルー。
「テイルブラックはもっとも汎はん用よう的な任務を預かる美の四心ビー・テイフル・ハート。脱いだり脱がなかったりと何やら優等生と問

題児の同居している戦士イエローは、貴の三葉ノー・ブル・クラブ。破壊者であり処刑人と謳うたわれし魔獣テイルブルーは、死の二菱ダー・イノ・ランヴアス。そしてテイルレッドは我ら神の一剣ゴー・デイア・ソードへ──」

　勝手に組織内人事まで語り聞かされ、俺たちの苛いら立だちと困惑は頂点に達しようとしていた。

「君たちは皆個性的だ。新たな四頂軍を統すべるに相応ふさわしい人材だよ」

　失笑すら漏もれそうな下らない提案を続けるグリフォギルディとは対称的に、ブラックは未いまだに俺に抱きついて震ふるえている。

「言いたいことは終わった？」

　ブルーは憤ふん怒ぬを発散させながら、グリフォギルディへと歩み寄る。

「補充するよりもっといい方法があるわよ？　あんたたち一の軍団もブッ潰つぶれて──四頂軍が綺き麗れいさっぱり消えて無くなればいいのよ」

　……ブラック、あのお姉ちゃんの方がよっぽど怖いと思うんだけど……あれを見て元気を出してくれないか。

「フ……」

　グリフォギルディが笑みを漏らした瞬間。その姿が、忽こつ然ぜんとかき消えた。

「ブルー、後ろだ！」

　俺は咄とつ嗟さに声を張り上げる。グリフォギルディは、残像をも置き去りにブルーの背後へ出現していた。

「テイルブルー……素晴らしい尻だ」

「このっ……!?」

　尻を片手で隠し、ブルーは振り向きざまにランスを薙ないだ。

「────だが、だからこそときめきがない」
　いちいち勿もつ体たいぶった言い回しに、ブルーの苛いら立だちが加速度的に増していくのが見て取れる。
「……尻を見るために速度を極めたのか……。うなじ見たさに高速化したクラブギルディそっくりだ……!!」
「ほう。うなじを見るために研けん鑽さんを積んだ戦士か──一度会ってみてあげてもよかったな」
　俺の言葉に耳ざとく反応し、一般戦士のクラブギルディを賞賛するグリフォギルディ。
「我われ々われは少数精鋭──だが、到達した者ならば拒まない。下級戦士であろうと、人間であろうとな」
　しかし、同士を下級戦士と揶や揄ゆするこいつは、どこまで行っても最上級軍の傲ごう慢まん、エリートの奢おごりが見て取れる。
　出方を窺うかがうブルーへ、グリフォギルディは真しん摯しに言い放つ。
「君は、乳が恐ろしく小さいな」
「え、何？　早くも死にたいの？」
　ウェイブランスで空を薙ぎ払うブルー。一秒後にでも襲おそいかかる勢いだ。
「君は乳の小ささをとうに諦あきらめている。だからこそ乳以外の部分を大いに磨くのだ──例えば、下半身をな」
「かはん……!?」
　ふとももや下腹部を咄とつ嗟さに腕で覆おおうブルー。
「すらりと伸びた美脚──その上に鎮座まします気け高だかき尻！　それらは、『胸はどうにもならないが、せめて他は』という、後ろ向きな気持ちで育はぐくんだものであろう！　アンナチュラルな美なのだ!!」
　ブルーの無言の回まわし蹴げりが、グリフォギルディの鼻先を掠かす

める。あの殺人……いや殺エレメリアンキックを、ギリギリのところで回避したのだ。
「むっ……語り合いの最中に蹴りを放ってくるとは、聞きしに勝る乱暴な尻よ」
「蹴るのは尻じゃなくて脚でしょ!!」
「だがその起点となるのは尻──尻さえしっかりと見ていれば、蹴りなどどれだけ速かろうと見切るのは容易たやすい!!」
「見るなアホおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　ペースに呑のまれるブルー。俺はブラックをイエローに託し、踏み出る。
「グリフォギルディ。ブルーのツインテールを見てみろ。何かの代替品なんて後ろ向きな気持ちが育んだものじゃない。ナチュラルで、綺き麗れいじゃないか……!!」
「ふむ……？」
「どんな属性を持っていようと、ツインテールへの敬意は失わない……それがお前たちエレメリアンじゃなかったのか!!」
　自らのツインテールを波風に靡なびかせながら、俺は最強軍の傲ごう慢まんを断罪する。
「……身体からだの奥にずしりと響くような言こと霊だま……君の言は重いな、テイルレッドよ」
「なあ、ブルー？」
　俺が振り返ると、何な故ぜかブルーは顔を真まっ赤かにしてもじもじしていた。
『その蛮族は甘い言葉で戦闘力を大幅に落とすめんどい生物なので、取扱注意です総そう二じ様!!』
　トゥアールの通信でなお疑問を上乗せしていた俺を余よ所そに、グリ

フォギルディは、イエローに肩を支えられているブラックに視線を送った。
　背を見せている……尻を見せているのだが、特に反応する様子はない。
「時にダークグラスパー様。目を通した資料に拠よるところ、貴女あなたはツインテイルズの中でも最速の機動性を誇ると……あの神速の申し子プテラギルディを倒したというではありませんか」
　急に話しかけられ、ブラックはビクリと身体を震ふるわせる。
「身のこなしならばきゃつに及ばぬやも知れぬも、技巧わざの速度はやさならば私も自負がある。余興で小こ競ぜり合うならば……一つ、私と貴女で尻比べといきませぬかな？」
「っ……あ、ああ……!!」
　イエローを突き飛ばすように離れ、後あと退ずさっていくブラック。
「君はそうして、強大な力が迫る度たびに諦てい観かんを受け容いれる……だから首領様に見限られたのだ」
　背を向け逃げだそうとしたブラックの眼前に、グリフォギルディが瞬時に移動する。
「神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士である私に、勝てるはずがないと……敵から逃げるために見せる尻など、何ほどの美しさもない!!」
「……あ、あ……く、来るな……！」
　駄目だ、ブラックは戦える状態じゃない！
　俺が駆け寄ろうとした矢先、グリフォギルディは再び俺の背後に急接近してきた。
　こいつ、隙すきあれば尻を見てくる……!!
「やはり君の尻はいい。できることならば、この命果てるまでずっと君の尻を見ていたい」
「エレメリアンのプロポーズって、どいつもこいつも最低サイツテー

ね……」
　肩で息をしながら、奥歯を噛かむブルー。
「フッ……そんなロマンチックなものではない……尻が見たいだけだよ」
「皮肉で言ってんのよ!!」
　ブルーの激げき昂こうを一いち瞥べつでやり過ごし、グリフォギルディは紳士ぶった所作で続けた。
「どうかな？　テイルレッド。仲間となり……生涯、私の隣で尻を見せてくれないか」
　確かに最低の求婚プロポーズだな……他のエレメリアンと比べてもだ。軽薄で、信念を感じない。
　花嫁を導くかのように己が手を差し出し、グリフォギルディは声高らかに問う。
「さあ、テイルレッド──返答は如い何かに？」
　俺は返礼にブレイザーブレイドで空を薙なぎ、奴やつの求婚を文字通り切って捨てた。
「────お断りだ」
　言葉の軽さから冗談だと思ったが、グリフォギルディは俺の返答を聞くや狼ろう狽ばいし始めた。
「……な!?　ば、馬ば鹿かな……私の勧誘さそいを断る女性がいるとは……!?」
　大袈裟なほどに全身を戦慄わななかせ、たたらを踏むグリフォギルディ。相当のショックを受けているようだ。最高軍というエリートゆえの打たれ弱さが、ありありと感じ取れる。
「つまり……つまり、交渉は決裂ということか、ツインテイルズよ……」
　慚ざん愧きに声を震ふるわせるグリフォギルディ。

俺たちの組織への勧誘ありきの停戦交渉は、ここに破断を迎えたというわけか。
「……無念だが、仕方がない……!!」
戦いは避けられないと、俺、ブルー、イエローは完全に臨戦態勢へ移行した、その時。
衝撃に次ぐ衝撃──その中でも、最大の一言が飛び出した。

「────この世界からの、完全撤退を宣言する」

固かた唾ずを呑のんで聞き入っていた俺たちは、一様に呼吸いきを忘れた。
防波堤に波が砕ける音で、俺は我われに返る。
「ふ……ふざけるなよ、そんなちゃちな冗談で俺たちが惑わされると思ってるのか!!」
「冗談ではない。これ以上、同志を減らしてまでこの世界に固こ執しつする理由がないのだ」
グリフォギルディは投げ捨てたローブを拾い、自分の尻に打ち付けて埃ほこりを払う。
「究極のツインテールを手に入れる代償に、これから先も延々と消耗戦を続けるわけにもいくまい。だからこその折せつ衷ちゆう案が組織への勧誘だったのだが、それが叶かなわぬとなるとね──」
その仕草は妙に堂に入っていて、語る言葉に温度を与えるようだ。
「アルティメギルは巨大な組織だ。最後は合理的な判断を下さねばならぬ。そしてそれができるのは、最高の部隊である我々だけだ」
目線を送ると、さすがにブルーも戸惑っている。
と、グリフォギルディはゆるりと後ろを向き、残念そうに尻を見せてきた。

「───人がやってくる。ここまでだ、ツインテイルズよ」
「何……？」
　こいつらエレメリアンからすれば、危害及ぶ殲せん滅めつ戦でもない限り、周囲に人間がいた方が都合がいいはずだ。こうもあっさり人目を避けようとする……本当に、俺たちと戦う気がない……この世界から撤退するってことなのか？　そう考えていいのか？
「見るまでもない。この周囲によき尻属性ヒツプを持った人間はいない。そのような尻、会うだけ時間の無駄だ」
　背を向けたままの俺の尻から考えを読み取ったのか、グリフォギルディは冷然と語る。
「当然だ。周囲の属性の気配を探るなど、卓越したエレメリアンにとっては呼吸も同然」
「くそ、自信満々に──」

　言いかけて──俺は戦せん慄りつした。呼吸同然に、気配を探る──

「……レッド！」
　放心しかけた俺に、ブルーが声を張り上げる。
　その隙すきに、グリフォギルディはブラックの真横に疾風の速度で迫る。
「…………」
　耳元で何か囁ささやきながらブラックの肩を叩たたくと、グリフォギルディは海目掛けて跳躍。
「まだ交は渉なし足りないからね。信用に足る材料を揃え、いずれまたやって来るとするよ」
　あっという間に水平線の彼方かなたへと飛び去っていった。
「ブラック、もう心配ないみたいだぞ」

　俺が駆け寄ると、ブラックは慌てて頷うなずく。
「……ブラック……」
　側そばにいたイエローは、ブラックを複雑な表情で見つめ続けていた――。

　　　◇

　基地に帰り、コンソールルームに入ると同時、俺は変身を解除。
「よっしゃ――――――――――――――――――――――――――――――――っ!!」
　興奮を抑えきれず、両拳こぶしを天に突き上げて快かい哉さいを叫んだ。
「これで俺たちの戦いは終わるんだ……!!」
　ティラノギルディの今いま際わの際の言葉通り、これから神の一剣ゴー・デイア・ソードとの烈はげしい戦いを覚悟していた俺にとって、撤退宣言は青天の霹へき靂れきだった。まさか、こんな形で戦いの終わりが来るなんて。
　愛あい香かたちも変身解除していくが、テンションはさほど高くない。
「……待って待って、喜ぶのはまだ早いでしょ。本当に撤退するかどうかなんてわかったもんじゃないんだから」
「愛香も、エレメリアンがプライドが高いのは知ってるだろ？　あいつら、作戦として卑ひ怯きようなことをしたことはあっても、宣言したことで嘘うそをついたりは一度もしなかったじゃないか」
　あいつらの実直な誠実さだけは、信じることができると思う。
　トゥアールが、まだ続きそうな愛あい香かの反論を制止するように提言した。

「まだ油断はできないですが……一応戦いは一段落したということでいいでしょう」
　そう、神の一剣ゴー・デイア・ソードについて必要以上にイースナが怯おびえている以上、多少楽観的であってもこのぐらいポジティブに振る舞っていた方がいいんだ。
　いつの間にかイースナが、俺の制服の袖そでを握っていた。すぐ振り解ほどけてしまいそうに、儚はかなく。
　今にも泣き出しそうな目で俺を見上げ……しかし、逡巡するように瞳ひとみを彷徨さまよわせ。
　やがて、その瞳に強い光が灯ったように見えた時……彼女は、小さく唇くちびるを開いた。
「そ、総そう二じさん……。私、今、お願い……言います」
　イースナの宣言に、愛香たちの視線が集まる。
「……最近……夢見が、悪くて……」
「怖い夢を見るのか？」
　こくりと頷うなずくイースナ。
　もしかしてそれは……彼女が今まで危き惧ぐしていた、神の一剣ゴー・デイア・ソードに起因するのだろうか。
「総二さん……今夜、私と一緒に、寝てください……。怖い夢を、見なくなるように……」
　善いい沙すな闇あん子こやブラックの時の不敵な物言いの印象も強くて忘れがちだが、彼女は俺たちの中で一番年下なんだ。そんな彼女の年相応な……子供らしい一面を見せられ、俺は快こころよく了承した。
「ああ、わかった。そういうことならお安い御用さ」
　俺だってついこの間まで、ツインテールを失った恐怖で夜もろくに眠れない日々を過ごしていた。イースナの気持ちはわかる。
　背筋が冷たくなって振り返ると、愛香とトゥアールと慧え理り那なが

瞬まばたきもせずに俺を見ていた。
「あれ？　みんなどうした？」
「お安くちゃ困るの
よーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
「御用！　御用です総二様！　いやイースナの方が!!」
　愛香に右肩を、トゥアールに左肩を掴つかまれ、がくがくと揺さぶられる。
　慧理那は二人の真似をしようとしてか、俺の右腕を掴んで手押しポンプのように上下させた。
「あんた、そんな簡単に女と寝るわけ!?」
　ツインテールを逆立たせ、愛香が噛かみつかんばかりに糾弾してくる。
「な、何か語ご弊へいがないかそれ……」
「いいから！　例えば……も、もう願いごとしちゃった後だけど、例えばね！　あ、あたしが……怖いから、あたしと寝て、って言ったら……そーじは……」
　俺はしばし思案し、
「まあ、愛香が恥ずかしくないっていうなら……寝るかな」
　自分の過ごした眠れぬ夜を思い、やはり真しん摯しにこう答える。
「ほにょえっ!?」
　愛あい香かがバランスを崩して転がり、後頭部をテーブルにぶつける。痛そうにしないばかりかテーブルの縁ふちにヒビが入っているように見えるが、見間違いだろう。
　そのままウアー、と嘶いななないて床を転がり、愛香はコンソールルームを出て行ってしまった。
　トゥアールも、愛香の動きをトレースするように俺に顔を近付ける。
「待ってください総そう二じ様！　ずるいですよ、一番年下のイースナ

や、幼おさな馴な染じみの愛香さんにだけ警戒心を解いて……例えば……誰だれかと同じ願いごとは無しなんですけど、例えばです！　私が怖いから一緒に寝てくださいと頼んだら、総二様は……」
「トゥアールが恥ずかしくないなら、寝るけど……」
「ほにょえっ⁉」
「────何あたしと同じリアクションしてんのよあんたは‼」
　逆再生のように床を転がって戻ってきた愛香が、トゥアールを引っ掴つかむ。
「やばいです！　総二様、めちゃめちゃ簡単に女と寝ることが発覚してしまいました……‼」
「待って！　ちょっと混乱してるから……あんたも転がりなさい‼」
　トゥアールを巻き込んだまま、愛香は回転数を倍加させて床を転がり、再びコンソールルームを出て行った。
「あ、ああ……わたくしも……わたくしも転がりたいですわ……」
　慧え理り那なの憧しよう憬けいは、いつか二人へと届くのだろうか。
　この部屋はいつも綺き麗れいだけど、ツインテールが床を掃くのは、できれば諭さとして止めたい所なんだが……。

◇

「そ、総二さん……き、来ました……」
　その日の真夜中──イースナは約束通り、俺の部屋にやってきた。
　普通に入り口から入ってきたので、思わずクローゼットを二度見してしまったほどだ。
　ノックはなかったが……。
　あらん限りの気遣いで質問を呑のみ込み、俺は就寝準備を始めた。

　一緒に床に就ついて、十数分は経たっただろうか——寝息が聞こえないので、イースナはまだ眠れていないようだ。ちらりと横を見る。
「…………ふ、ふ、ひひ……」
「ぬあっ⁉」
　仄ほの暗ぐらい常夜灯の下、イースナの見開かれた目が爛らん々らんと輝いていた。
　フクロウ目フクロウ科フクロウ属、つまりフクロウを思わせるその闇やみ目めに驚き、思わず俺は声を上げてしまった。
　ベッドの上で飛びすさって窓際の壁に背中をぶつけた俺を見て、イースナは目を見開いたままはにかむ。
「あ、あんまり裸、見ないでください……は、恥ずかしいです……」
「裸眼な」
　眼鏡属性グラスを持つ者は、裸よりも裸眼を見られる方が恥ずかしい。イースナ本人が何度となく語った信念だが——ならばせめて、目を閉じてはどうか。
　無言のまま時間が過ぎる。俺は意を決して尋ねてみた。
「なあ、イースナ。神の一剣ゴー・デイア・ソードと戦うのが怖かったら……無理しなくていいんだぞ」
　俺がイースナの分まで戦えばいい。怖いのに我慢させてまで、戦いに参加させられない。
　イースナは爛らん々らんと輝かせていた目を伏せ、シーツに顔を沈めるように項うな垂だれてしまった。
「……わ、私……。確かに、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦闘力は、恐ろしいです……。でも……本当に、怖いのは……神の一剣ゴー・デイア・ソードが、この世界にやって来た……その、事実なんです……」
　その仕草は彼女の言葉の通り、何かに怯おびえる子供そのものだっ

た。
〝属性力エレメーラを奪われるだけじゃ済まない〟──。俺は、出撃前のイースナの言葉を思い返す。
　それ以上の地じ獄ごくって……どういうことだ？　人間の心の輝きを奪わなければ生存できないあいつらが、まさか命まで奪おうとするはずはないと思うが……。



　いつも言葉足らずでトラブルを起こすイースナだが、神の一剣ゴー・デイア・ソードに関しては詳細を努めて秘め隠しているフシがある。だから、俺たちは誰だれも深く突っ込んで聞けないでいるのだ。

「私、他にもたくさん……不安だったんです」

　イースナはいつの間にか、俺の胸に頭を埋うずめられるほどの距離まで寄り添ってきていた。微かすかに声を震ふるわせる、その表情は窺うかがえない。

「ちゃんと、ツインテイルズに、なれてるかな、って……トゥアールさん、私のこと、許してくれてるかなって……」

「トゥア──」

　すぐにフォローしようとした俺だが、イースナはそれを遮さえぎり、捲まくし立てるように続けた。

「わかってるん、です……。総そう二じさんも、みんなも、優しくしてくれる……。でも、一度は敵だった私が、本当に許されて、いいのか──」

「いいに決まってるだろ」

　今度は逆に、俺がイースナの言葉を遮った。

「敵対したぐらい、何だよ……俺なんて、それどころじゃないぜ。世界に厄やく災さいをもたらす存在とか言われて、それでも開き直って堂々とツインテール好きに戻ったんだ」

　仲間に快こころよく思われていないか悩むなら、俺の方が上じゃなきゃ駄目だよな。

　もちろん、少しも疑っていないけどな。みんな、俺のツインテール馬ば鹿かぶりにギブアップして、好きにやってくれ、って感じだ。それこそが、俺にとってみんなからの最高の信頼だ。

「□□□□□□」

　イースナが息を呑のむ。……説得力がある例えだったってことでいい

のかな。
「そ、総二さん……やっぱり、世界に恨まれたら、嫌ですよね……」
「そりゃあな。守ってきたツインテールから恨まれたら……悲しいな」
「……じゃあ、やっぱり……私は……」
　暗がりの中で見えるイースナの表情は、ひどく思い詰めているようだった。
「どうした？」
「な、何でもありません……。ツインテール、触って……。そ、総二さんのために、解ほどかずに寝ているんですから……」
　強引に話題を逸そらしたのが気になるが、差し出されたからにはツインテールを触る。
「総二さんが、私の武器を合体、させてくれて……嬉うれしかった……」
　イースナはツインテールに触れられてくすぐったいのか、頭を俺の胸に押しつけてきた。
「ええっと……それって、テイルカリバーのことか？」
「はい……」
　ティラノギルディと戦った時、俺は新武器であるテイルカリバーにブラックの武装も合体させた。あの時は無我夢中だったが、今思えばフュージョニックバスターに自分の武器を合体できないことをブラックが悲しんでいたことを覚えていて、無意識にそうしたのだろう。
「仲間、って感じが、しました……」
　毎夜怖い夢を見るというイースナ。
　それは、彼女の懐いだく様々な不安が原因なのかもしれない。
「言葉や態度だけで不安なら、そんなふうに、俺のツインテールを信じてくれると嬉うれしいよ」
「……わかりまし、た……」

　イースナの頭をぽんぽんと叩たたくと、彼女はくすぐったそうにはにかんだ。
「メガ・ネに……もっとみんなと、ちゃんと友達に、なりなさいって、言われた……」
　メガ・ネは本当に優しいお母さんだよな。
「だ、だから私、言った……。総そう二じさんは、友達じゃなく、彼氏……」
　おかんがその時どういうリアクションをしたのか気になる。俺がそれをここで再現したい。
「メガ・ネも、私を心配して……添い寝するって、言ったけど……。メガ・ネはずうっと、起きてようと、するから……」
　イースナがこの間、慧え理り那なを自分の家に誘おうと頑張ったのも、そんなメガ・ネの優しさに応えようという思いもあったんだろうな。
「今夜は、ただ一緒に、寝てくれるだけで……明日からまた、頑張れますから……」
　夜よ闇やみの中、布ぬの擦ずれの音がやけに大きく部屋に響く。
「ん、わかった。今日は怖い夢なんて見ないさ……俺がこうして守ってあげるから」
「……はい」
　イースナの温ぬくもりを胸に感じながら、俺も睡魔に身を任せていった。
　今夜はイースナも、ぐっすり眠れますように──。

◇

〝ここ〟に来るのは随分と久しぶりなので、状況を理解するまで時間が

かかってしまった。
　地平も天地も知覚できない、広大な空間。
　薄暗く、周囲に仄ほのかに点ともる光点だけが標しるしとなる、宇宙にも似た神秘の世界。
　その世界で一番属性力エレメーラの強い人間と夢の中で会話ができる……それは双子合体のツインテール戦士ロロリー……ロエル・リルナだけが持つ不思議な力。
　メルヘンさに違たがわずストレートに、夢通信と呼んでいる。
　しばらく周囲を見渡していると、離れた場所で小さな人影が像を結ぶのが見えた。
　そちらも俺に気づいたようで、こちらへと一気に駆け出してくる。
「────そ、総二……総二!!」
　駆けてくるのは、煌きらびやかな白と薄桃色を基調としたドレスに身を包んだ少女だった。
「総そう二じ～～～～～～～っ!!」
「リルナ!?」
　右に結んだサイドポニーと、白いリボン、ドレスにも白のアクセント……双子姫の妹、リルナだ。
　リルナは足を止めることなく、勢いそのままにぶつかるように俺に抱きついてきた。
「うわあん！　うわああああああああああああああん……」
　そのまま俺の左腕にぎゅっとしがみつくと、火が点ついたように泣き出してしまった。
「ど、どうしたんだリルナ！」
　気がつくともう一人、幼い少女が側そばに歩み寄ってきていた。
「………………お兄ちゃん……」
　サイドポニーの結びは左。リボンや、ドレスのアクセントの色は黒。

こちらは双子姫の姉、ロエルだ。しかし、いつも天てん真しん爛らん漫まんで笑顔を絶やさなかった彼女が、ひどく元気がない。
　妹とは逆に、彷徨さまようような弱々しい足取り。
「っ……」
　嗚咽おえつを噛かみ殺したまま、倒れ込むように俺の腕に身体からだを預けてきた。俺は慌ててロエルを受け止め、双子姫を左右それぞれの腕で抱き寄せる。
「よかった、よかったよ、お兄ちゃん……やっと会えた……」
「総二、総二……ああ……総二だ……！」
　要領を得ない言葉だが、彼女たちが落ち着くまで辛抱強く耳を傾ける。
「……ずっとね、ずっと……繫つながらなかったの……。お兄ちゃんと、繫がれなかったの……」
　やがて徐々に安あん堵どし始めたのか、双子姫は今日この日までの顚てん末まつを説明し始めた。
　確かに……思った以上に長い間、俺たちは会っていなかった。
　そこで俺も、ここ最近の事件を姉妹に語って聞かせることにする。それで初めて、姉妹の狼ろう狽ばいに合が点てんがいった。
　まず、姉妹と最後に夢通信した日に何があったかというと……リルナが、この夢通信の中でおねしょをしてしまった。
　まだ幼いリルナは仕方ないとは思うのだが……女の子は早熟だ。知人の前で恥ずかしいところを見られたことで、気まずくなったのだろう。しばらくの間、夢通信を休んでいた。
　そこまでは、俺も自分で考えていた。最近来なくなったが、恥ずかしくて、冷却期間が必要なのだろう、と。
　ところが日にちを置いて気持ちの整理も付き、姉妹が久々に俺と夢通信をしようとしたその時──運悪く、俺がティラノギルディにツインテー

ル属性を奪われた日と重なったのだ。
　幾夜続けても繋がらなかったため悲しみに暮れていたが、数日空けた今夜、駄目元で挑戦したところ、ついに繋がったというわけだ。
「ロエルが繋つながれるのは、その世界で一番ツインテール属性が強い人間だもんな……」
　しかも一度繋がった以上、その世界の代表者が属性力エレメーラを失ったからといって、繰り上げで次に属性力エレメーラが強い人間と繋がれるかというと、そう都合のいいものでもないという。
　この世界の場合、愛あい香かや慧え理り那なと夢通信で繋がり、事情を聞くこともできなかったわけだ。
　ロエルは声を震ふるわせながら、痛いほど強く俺の右腕に抱きついてくる。
「ツ、ツインテール属性を奪われていたなんて、そんな大変なことになってるなんて、思わなくて……私、お兄ちゃんが怒って、もう会ってくれなくなったのかなって……」
「そんなこと、あるわけないだろ。ごめんな、寂しい思いをさせて」
　身体からだを離し、ロエルを落ち着かせようとすると、逆に頑かたくなさを増して俺の腕に込める力を強めた。
「やだ！　離れない！　ずっとこうしてるの!!」
　普段は甘えてくる中にもどこか努めて子供っぽくあろうとしているようなところがあるロエルまでもが、今日は年相応の純真さで抱ほう擁ようを求めてくる。
　それだけ、俺と繋がれなかった日々が不安だったんだろう。
　アクシデントがあって、気まずさからしばらく連絡を取り合わなかった友人が、意を決してメールを送ったら……それが送信完了せず、弾かれて戻ってくるようなものだ。
　それを思えば、幼い彼女たちが激しく動揺するのは想像に難くない。

「な、何だよ……総そう二じは、強いだろ……世界で一番強いツインテールだろ！　何でツインテール奪られちゃったんだよう!!」
「……ああ。ちゃんと取り返したよ。おかげでまた、ロエルとリルナと会えただろ？」
　俺の腕に頭を押しつけたまま、両手で駄々っ子のように叩たたいてくるリルナ。
「ボク、おもらししたから……総二に嫌われちゃったと思ったよぉ……」
「あのことなら、俺は全然気にしてないから」
「気にしろよお!!」
　一際強く、べしっと音を立てて俺を叩くリルナ。
「どっちだ!?」
「総二お兄ちゃんは優しいから、リルナちゃんのおもらしならごくごく飲んでくれるよ!!」
　優しさという名のカタストロフィが、灯火ともしび淡あわずむ世界を蹂じゆう躙りんする。
　ともあれ、ロエルの方も調子が戻ってきたようで、一安心だ。
　リルナは申し訳なさそうに顔を顰しかめ、俺を見つめる。
「……ボ、ボクたちが力になれればよかったんだけど……ごめん」
「そうだね。総二お兄ちゃんがそんなに大変な時に、私たち、恩返しできなかった……」
　負い目を吐と露ろする姉妹に、こちらの方が逆に申し訳なくなる。
「恩返しならもらってるよ。ツインテール属性が無くなった時、二人のことも考えたんだ」
　絶望に打ちひしがれたその時、俺の脳裏には双子姫が浮かんでいた。ツインテールを守るためにツインテールを放棄し、戦ってきた二人のことを。

　彼女たちが、どんな思いで過ごしてきたのか思いを馳はせ……その強さを尊敬した。
「二人からも、たくさん勇気をもらったから……」
　リルナはようやく俺の腕を離れると、顔を茹ゆで蛸だこのように真まっ赤かにさせた。
「もーーーーーーーーーーーっ！　キミはどうしてそうなんだよう！　もおおおおおおお!!」
「どうした!?」
　先ほどの倍はあろうかという勢いで、両腕を旋回させて俺を叩たたいてくるリルナ。
　幼おさな馴な染じみにワールドクラスのハードパンチャーがいるのもあって、彼女の駄々はどこまでもただ微笑ほほえましい。
「大変だったよ、会えない間、リルナちゃんの寂しさが全部ロエルに向かってきたから……ストーカーさんに磨きがかかって……おトイレまで覗のぞいてくるんだよ、えへへ」
　えへへ、で済ませていい事案だろうか。寂しかったからと言われればそこまでだが……。
　不意に、ロエルが俺の隣、何もない空間へ視線を送った。
「────あ、また隣で寝てる……あの女ひと……ちぇっ……」
　一瞬、ロエルの目が凍気を帯びたかのように鋭く細められたように見えた。
「…………あれ～？　どうしたのお兄ちゃん、そんなにロエル、可愛かわいい？」
　俺の視線に気がついたロエルが、両手の人差し指を頬ほおに当て、愛らしく首を傾かしげた。
　俺の見間違いだったか。
「うん、姉様は世界一可愛いよ！　ああっ……総そう二じのお陰で珍し

い姉様の泣き顔も見られて、眼福だよう……」
　とろけた表情で姉を褒ほめ称えるリルナ。
　不可視の地面に胡座あぐらを掻かいたままだ。そろそろ立ち上がろうかとした時、
「あー、そうだー、やっぱりまだ恩返しし足りないよね、リルナちゃん」
　妹を見てにんまりと笑ったロエルは、唐突にそんなことを言い出した。
「う、うん……まさか、あれ……？」
「そうだよ！　またお兄ちゃんと会えたら、しようって言ってたでしょ？」
「う、ううううううう～、恥ずかしいよう……」
　何やら躊ちゆう躇ちよしている妹に、姉がスパルタな後押しをする。
「大丈夫！　おねしょを浴びせたリルナちゃんに恥ずかしいことなんてもう何もないよ！」
「うわーん！　やる！　やるよう!!」
　ハテナマークを浮かべる俺。姉妹は俺の左右それぞれの肩に、自分たちの両手を重ねた。
　そして──
「せーのっ」
「うぅ……」
　姉は元気よく、妹は恐る恐る。姉妹は、その小さな唇くちびるを、俺の頬ほおへ触れさせた。
　愛情表現と呼ぶには純粋で。親愛を表すには遠慮がなく。
　言葉通り、恩返し……無む垢くなお礼としての温かさが、柔らかな感触を通して伝わってきた。
　俺の頬がかっと熱くなる。唇を通して、彼女たちに伝わってしまった

だろうか。
「ふぁへへ」
　ロエルがもごもごと口くち籠ごもる。唇を頬から離さずに話すので、その度たびにぺたぺたと唇がくっつき、こそばゆい。
　どうやら、このまま髪を撫なでてくれ、ということらしい。
　ツインテール以外を撫でる技巧が稚ち拙せつだと、散々この双子姫に言われてきたのだが……そこはもう、気持ちだ。
　俺は彼女たちの頭を抱き締めるように、サイドポニーをそっと撫でた。
　ひとしきり撫で終わると、姉妹は俺から離れた。
「う、ううううううう……！」
　リルナは自分の頬を両手で挟み、真まっ赤かにした顔を振っている。
「えへへー、最初はほっぺにちゅーくらいが可愛かわいいもんね！」
　そしてロエルは気にした様子もなく、満面の笑顔を見せる。



「あ、ありがとう……二人とも」
　それ以外何と返せばいいかわからず、俺は照れ笑いを浮かべた。
「お……」
　俺たち三人の身体からだが、光に包まれる。夢通信の終わりは、俺たち誰だれかの目覚め。
　朝の到来──夢の終わりを意味するのだ。
「そ、総そう二じ！　いいか、もう絶対、ツインテール属性を奪われるなよ！　お前と会えないと、姉様が泣くんだ!!」
　俺はしっかりと頷うなずいた。
「……って言ってるけど、安心してお兄ちゃん。リルナちゃん、本当はほっぺ以外に……」
「わーーーーーーーーーっ！　それじゃあな、総二！　また、ちょくちょく監視に来る!!」
　最後まで慌ただしく、姉妹は消えていく。そして夢が終わり、朝がやって来る。
　二人が元気になってくれて、本当に良かった──。

◇

「ん……」
　夢通信からの目覚めは、決してシームレスというわけではない。僅わずかに意識が混こん濁だくし、夢と現実の狭はざ間まをしばし味わう。
　そんな中意識に先んじて身体を支配したのは、頬ほおから感じる温かく、柔らかな感触だった。ほんのりと湿っており、より柔らかさを鮮烈にする。
「ーふー、うふー、ふー……」
　そして何より、こそばゆい。温かいというより、生温かい風が頬を撫

なでる。
「ん、ふぅ、ん……」
　加えて、やけに艶なまめかしい声が真横から聞こえるのは何な故ぜだ。
　────あ。
　意識の完全覚醒とともに訪れたのは、自責の念だった。何故俺は、失敗から学ばないのか。
　かつてロエル、リルナと夢通信した時……睡眠中の状態がシミュレートされ、夢通信での出来事も逆に現実に反映されるのだと、思い知ったのに。
　恐る恐る目を開くと──
「ん、ふぅ、ふぁ、ふぅ………………ほふぅ、はふぅ……」
　真横に、全身を弛し緩かんさせ目をとろませた、イースナがいた。
　夢で姉妹がそうしたように……俺の右頬に口付けている。
　しかも、髪を撫でるために頭を抱き寄せたことも再現されてしまっており、俺がイースナの頭を押さえ、口付けを強引に継続させる形になっていた。
　頬ほお撫なでる生温かい風は─行き場を失った、イースナの荒い鼻息だった。
「うおあああああああああああああああああああああああ!!」
　イースナから手を離し、俺はベッドから跳ね起きた。
　吸盤のように密着していた唇くちびるが、きゅぽんと音を立てて俺の頬から外れる。
　一体どれほど長い間そうさせていたのか、頬を雫しずくが滑り落ちる感触が。これってイースナの唾だ液えき……いやいやいや、駄目だ、意識したら駄目だ、イースナに悪い。
「な、何でまた叫ぶ、んですか、総そう二じさんが、キスさせて、き

た、総二さんが、無理矢理、抱き寄せ、て、」
「ごめん、また寝ぼけたみたいだ!!」
　以前も夢通信でリルナを抱き締めた時、現実で隣で寝ていたイースナを抱き締めてしまったことがあったが……俺はあの時から、何も成長しちゃいない！
「シ、シリアスに誤ご魔ま化かそうとしても、駄目、もう私、火が、つい……今さら……」
　しなだれた前髪からぎょろっとのぞく瞳ひとみ。
「……俺が守ってあげるって、言った……。その対価は、私の純潔、なんですね……」
「俺、水飲んでくるから！」
　レパートリーの足りない言い訳を酷使し、俺は逃げるように部屋の出口へと向かった。
　ドアを開けようとした瞬間、斧おのの如き手刀がドアを突き抜けて俺の眼前で止まる。
　斬きり裂さかれた隙すき間まから──少女が狂気に満ちた笑顔を覗のぞかせた。

「……そーじ……？　どこ行くの……？」

「━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━
　Ｈｅｒｅ　ｉｓ　ＡＩＫＡ。
　ああ、これは全部見られていたパターンだ。前にもあったから僕ボクわかるよ。
　ドアもいつも通り破壊を受け容れ、パタンと倒れる。
　廊下には愛あい香かだけではなく、トゥアール、慧え理り那なも同じ笑顔で揃って立っていた。

「「「────さあ、地下基地に行きましょう」」」
　まるで一晩中寝ずにいたように、三人は一様に目の下にくまをこしらえ、その分生っぽい負の感情を周囲に発散させている。慧理那は、また無理をして基地で徹夜を……。
　一切の弁解を認めない。口調まで揃え、俺を地下基地へと誘いざなう統率性は、死刑執行官。
　最後の逃げ場を求め、再び部屋を振り向くと──そこには、四つん這ばいで近付いてくるイースナが。
　抵抗も逃亡も叶かなわず、後はただ破滅を享受するのみ。
　暗転と共に訪れる、救いなきバッドエンドを思わせた。

◇

　放課後の校舎を歩いていて肌寒さを感じ始めた今日この頃。
　部室棟の最奥にあるツインテール部部室は、トゥアールの謎なぞの技術により本日も適温が保たれている。
「……みんな疲れているな……」
　放課後の部室で最初に口を開いたのは、飲み物の準備をしている桜さくら川がわ先生だった。最初は一律でお茶──紅茶だったのだが、最近好みを聞いて一人一人にわざわざ合わせてくれている。
　桜川先生の言う通り、俺も愛あい香かもトゥアールも慧え理り那なも、先日のイースナとの添い寝でのドタバタの疲ひ弊へいが残っているが……当然、疲れの一番の原因はそれではないだろう。
　アルティメギルの撤退宣言──グリフォギルディが一方的に言い残してから一向に音おと沙さ汰たがないせいで、この数日、それが気がかりで仕方がない。奴やつが次にやって来る日を指定しなかったのは、俺たちの精神的疲弊を狙ねらったものでもあるのかもしれない。

　こういう時、俺たちからエレメリアンに連絡する手段がないのはやきもきする。
　あいつらは勝手に現れ、気ままに電波ジャックして全世界に放映したりもするが、俺たちの側からあいつらにコンタクトを取ることはできないのだ。
「お疲れちゃーん……なのじゃ」
　業界挨あい拶さつも弱々しく、転送ロッカーのドアを開けてアイドル衣装の善いい沙すな闇あん子こ──イースナが入室してきた。こちらはあれから数日経たっても、寝不足で辛つらそうだ。
「あれ、今日はいつもの番組の収録だろ？」
　壁に貼ってある「イースナ出勤表」を見ると、今日の一六時三〇分まではレギュラー番組に出演、とある。
　まさかと思い、俺は部室のテレビの電源をＯＮ。数度のザッピングの後、イースナが出演していた番組にチャンネルが合った。
　夕方のバラエティーのレギュラーコーナーで、ツインテイルズを特集している。
　パネラー席に、男性アイドル、評論家、大学教授などに交ざり、眼め鏡がねをかけた鮫さめの着ぐるみが座っていた。
　善沙闇子のおとものゆるキャラ・メガネドンだ。
「お前、またメガ・ネに任せて早退してきたのか？」
「違う。今日はわらわではなくメガネドンだけにオファーが来ておる」
　苦笑しつつ、イースナはテレビに視線を送る。
「ぶっちゃけ、メガネドンの方がトーク番組で使いやすいらしい。しばらくはそれもわらわのアイドル活動の販促となるが、もう少し様子を見て、今後の活動方針を決めねばならんな」
　いよいよ、善沙闇子とメガネドンの人気逆転現象を重く見始めたよう

だ。ただ、彼女自身、こういった逆転現象が一過性のものと分析しており、急激な方針の変更には慎重だという。逆に、それを利用して一時歌手活動に専念し、自身のアイドル性を高めるのも手だ、と。
　相変わらずのセルフプロデュース力だが……画面の中のメガネドンを見る目が、いつもより優しく見えて……逆に、それが気にかかった。考え過ぎだとは思うが……。
「見てください観み束つか君、ブルーやイエローの評価がまた少しよくなっていますわ！」
　慧え理り那なに指差され、再びテレビに注目する。映像が引いてスタジオ全景が映ると、二メートル近くある着ぐるみのメガネドンの目立ちっぷりがすごい。
『これまで脱いできたテイルイエローが最近おとなしいことについて、専門家は「今までは暑かったのではないか」という仮説を発表しており──』
　どこの、何の専門家の意見なんだ……。
『また、これから冬が本番を迎えるに当たり、テイルブルーは冬眠するのか？　という懸念が持たれています』
　愛あい香かがテーブルをべしべしと猛打して抗議する。
「冬眠ってどういうことよ!?　これ評価よくなってるって言える!?　今までよりちょびっとあたしたちに尺取ってるだけで、変人扱いは変わらないじゃない!!」
「落ち着け！　冬眠するか懸念されてるのは、みんなテイルブルーにいて欲しいってことだろ!?」
　冬眠しちゃったら、寂しいなあ。そんな愛情の裏返しじゃないか。
「いえいえ、獣けだものって冬眠邪魔されるとめっちゃ怒って人を襲おそいますから、テイルブルーが冬眠の時期になったら刺激しないようにしようっていう対策だと思いますよウプププププププププププププ

ププー」
　テイルブルーの専門家、トゥアール教授が冷静なコメントをする。
「あんたも胸にたくさん脂肪蓄えて準備万端なんだから、そろそろ冬眠したら？」
「ひいいいいいいいいいいい蓄えが皆無の餓が狼ろうに永眠させられるうううううううううう!!」
　トゥアール対策のスペシャリスト・愛香が情熱的な関節技コメントで応じる。
　そんな二人をいつものように羨うらやんでいるかと思いきや、慧理那はイースナを見ていた。
　最近、慧理那が何気なくイースナへ視線を向けていることがよくある。
「……………………」
　イースナは腕組みしながら自分の二の腕を指でトントン叩たたき、不機嫌を露あらわにしている。
　それはそうだろう、内容はともあれ一応話題にはされているブルーやイエローと違い、ブラックは一言も出ていないのだから。
　すると、司会に話題を振られたメガネドンが、チャンスとばかりにアクションを起こした。
『テイルブラックも可愛かわいいよ』
　メガネドンがそう書いたプレートを掲げると、会場からどっと笑い声が巻き起こる。
　もちろん、当人にとってはウケ狙ねらいの回答ではなく心からの意見だろう。
　…………おかん……。
「おのれー、わらわも早く正しい評価を受けたいのじゃ……」
　先日ニュースのツインテイルズの最新映像で、死の二菱ダー・イノ・

ランヴアスとの総力戦の折のブラックの姿があった。大学構内でブラックが筋肉軍団を召喚したのを捉とらえた、定点カメラの衝撃映像だ。
　無音の映像の中、筋肉の群れがエレメリアンを取り囲むのは、心霊ビデオを見るような不安感を視聴者にもたらす。今朝のニュースで、その映像を見た視聴者から抗議があったとお詫びが出たほどだ。
　愛あい香かもトゥアールとのじゃれ合いを切り上げ、俺たちは再びだらんとし出した。
「ねえトゥアール、そーじへのお願い決めたの？」
　気になるのか、愛香は定期的に尋ねている。トゥアールは今日もバツが悪そうに答えた。
「ま、まだです。今、推すい敲こうの途中です」
　いや、願いごとは小説じゃないんだから……。
　みんなに飲み物を配っていた桜さくら川がわ先生が、愛香とトゥアールの会話を聞いて思案顔になる。
「ううむ……」
　しばらく何かを考えていたようだが、やがて向かいの俺の席まで歩いてきた。
「私もお願いごとはありだよな、観み束つか」
　机に突っ伏す俺の肩を叩たたく桜川先生。
「……え、はい。桜川先生にも随分お世話になりましたから、もちろんです」
　でも、桜川先生は婚こん姻いん届とどけにサインしろって言うのは目に見えているな……。それをどうやって可能なお願いに軌道修正してもらうかが問題だ。
「みんなで旅行に行かないか」
「やっぱり……婚姻届にサイン自体は『できること』に入りますけど、そのサインによって生まれる法律上の変化が俺の願いの上限を超えてい

てですね…………………………………え？」
　ところが、桜川先生は、おそらく俺以外の全員もそう思っていたであろう予想を覆くつがえし、腕組みをしながら提案した。
「旅行……ですの？」
「ええ、お嬢様。それが私の〝お願い〟です」
　愛香とトゥアールは、我わが耳を疑うように桜川先生に詰め寄った。
「何を企んでるんです尊みことさん！　何でも願いが叶かなうんですよ⁉　純粋な慧え理り那なさんならいざ知らず、あなたのように全てに焦るアラサーがそんなごく普通のお願いなど、ありえません！」
　自白を迫るように問い詰めるトゥアールに、桜川先生は涼しい顔で聞き返した。
「国内旅行なら大丈夫だろう？　トゥアール」
「そ、それは、もしエレメリアンが現れたらゲートですぐ戻れますけれど……どうして」
　むしろ、行き先が異世界でもない限り、旅行先からはいつでも基地に戻ってこれる。
　桜さくら川がわ先生はそれを確認してうむ、と頷うなずく。
「何か、みんな疲れているからな……。旅行……例えば温泉にでも行って、心身ともに癒いやそうじゃないか」
　これは俺への願いというより、桜川先生の心遣いじゃないか。
　俺は、どうせ婚こん姻いん届とどけだろうと確信していた自分を恥じた。これは、俺の役目だった。
　俺が、みんなにぱーっとどこかに遊びに行こう、と提案するべきだったのだ。
　お願いされる側でありながら感謝で胸が一杯になり、俺は桜川先生に応えた。
「……ありがとうございます、桜川先生。みんなで行きましょう、旅行

に」
「決まりだな。それじゃあ、この旅行約やつ款かんにサインをしてくれ、観み束つか」
　旅行約款じゃなくて婚姻届だろうけど……サインしてもいいかな、という気になる。
　俺は桜川先生から、手に載せるだけで確信に足るいつものサイズの用紙を受け取った。
「駄目でしょあんたはーーーーーーーーーーーーーーっ雰ふん囲い気きに流されやすすぎるのよ!!」
　血相を変えて旅行約款改め婚姻届をインターセプトする愛あい香か。
「その場の雰囲気で悪い男に引っかかって、一生を棒に振るタイプの女じゃな、総そう二じは」
　イースナが、目の前に確しかと存在する男の俺をたやすく性転換トランスセクシヤルする。

「じゃあ、早速行き先を決めましょうか。早い方がいいです」
　トゥアールがホワイトボードを移動させ、意見を筆記する準備をしていく。
　話し合いもいいけど、発案者の意見が第一に尊重されるべきだ。俺は桜川先生に尋ねる。
「桜川先生、温泉に行きたいって言わなかったっけ？」
「それは願いのついでに提案した、例えの話だぞ。私のような大人ならばともかく、お前たち若者は温泉よりもっとオシャレなところがいいだろう」
「でも、その願いは桜川先生のものなんだから、桜川先生の希望を優先すべきだよ」
　むしろ学生の俺からすると、温泉はすごく洒落しやれた旅先に感じる

な。
　桜川先生は各自の飲み物のお代わりの要不要を確認しつつ、続けた。
「絶対に温泉に行きたくて提案したわけじゃないからな。むしろ家族以外との旅行は、お前たちと何度か行ったほかには、学生の時に修学旅行に行っただけだ。どこに行きたいと言われてもパっと浮かばんのだ。すまんがな」
　そうは言うものの、桜川先生、俺たちに気を使っているんだろうな。
「俺も正直、みんなで行けるならどこでも楽しめると思うからなあ……」
　それに、行きたい場所が咄とつ嗟さに思い浮かばないのも、桜川先生と同じだ。
「旅行か。異世界の他は……みんなで海に行ったっけ」
　ちょうど俺がソーラになってしまっていた時、気分転換にとみんなで出かけたのだ。
「わらわがライブ会場にと見み繕つくろっていた、あの島のことか？」
　まだイースナがアルティメギルに身を置いていた時、その島で俺たちと鉢合わせしたこともあったな。
「ああ。今だから言うけど、あの島、慧え理り那なの家の所有物だったんだよ……」
　人生で初めて、プライベートビーチを体験したのがその時だった。
　自分の名前を出されたからか、慧理那もお出かけの思い出が蘇よみがえったようだ。
「みんなで〝こみけ〟も行きましたわね、尊みこと」
「そういえば……あれもとても賑にぎやかでしたね、お嬢様」
　県も越えているし、夏休みに行った同人誌即売会も微妙に団体旅行には含まれるか。転送ゲートでパパッと行ったから、旅行としては記憶していなかった。

「慰安旅行ですから、今回は静かなところの方がいいかもしれませんわね。……あら、でしたら温泉はちょうどいいかもしれませんわ！」
　さすがだなあ、慧理那。コミケの話を前振りに、行き先が温泉でいいと誘導している。
　慧理那にこう言われれば、桜さくら川がわ先生も遠慮なく決断できるはずだ。
「あたしも温泉でいいと思うわ。最近寒くなってきたし、のんびりもできそうだしね」
　意外にも、こういう時はいつもわんさとアイディアを出す愛あい香かが、今回はあっさりと賛成に手を挙げた。それに真っ先に反応したのは、トゥアールだ。
「行き先に温泉を了承するなんて……血迷ったんですか愛香さん⁉」
　ホワイトボードの前から自分の席の前に移動し、対面から愛香に驚きよう愕がくをぶつける。
　ちなみにトゥアールが愛香の対面に座ることが多いのは、テーブルを挟むことで愛香の攻撃から少しでも回避する時間を稼ごうとの意図があるのだろう。
　二つ並んだ長机を一足飛びで越える愛香からは、よくて一秒二秒しか稼げないだろうが、それでも至近距離からツッコミが始動するよりは回避率が高まる。
「何よ、あたしが温泉に行きたがったらおかしいっての？」
「温泉旅行なんて、裸を競い合う女のワールドカップですよ⁉　おっぱいという名の球技の最高峰ですよ⁉　私がスーパーシードだとしたら、愛香さんなんて予選前に出場停止処分で敗退確実でごあああああああああああああああああああああ‼」
　出場停止処分を食らったはずのチーム愛香が、スーパーシードを自称するチームトゥアールをワンキックで撃破する。

　これがスポーツの華である、大番狂わせジャイアント・キリングというやつか。
　……試合前の場外乱闘で決着が着いただけとも言えるが。
「うぐぐ……まあ、リフレッシュ旅行にはピッタリかもしれませんね。どこかの誰だれかさんは最近、慢性的な筋肉痛みたいですし」
　トゥアールは相変わらず、身に受けた愛香の攻撃から体調を把握できるようだ。
「そんな当て口ができるなら、余計な筋肉使わせないで欲しいわね！」
　軸足の靴くつ跡がリノリウムの床に残るぐらい、鋭い蹴けりなんだが……。愛あい香かが疲れているのは、俺もツインテールを通してよくわかる。癒いやしの時間が必要だろう。
「うむ、温泉か……よいな！　エロゲーのイベントＣＧの定番じゃ」
　イースナも行き先に不満はないらしい。うむ、と慇いん懃ぎんに頷うなずく。
「……それに、わらわはまだ、お前たちと旅行に行ったことがないから……行ってみたいぞ」
　皆、あえて反応せず、世間話の一幕としてイースナの話を聞いていたが……胸中では彼女を案じているはずだ。
　イースナの切なげな横顔を見て、トゥアールが大おお仰ぎように咳せき払いをした。
「かませおっぱいは多い方が私のおっぱいが引き立ちます、イースナも来なさい。今さらやめたと言っても連れて行きますからね」
　トゥアールの不器用な優しさに、俺は苦笑する。

　皆、温泉で異論はないようだ。出発は早い方がいいということで、明後日あさつての土曜から一泊二日を目め処どに旅程を組むことにする。
「それじゃあ、疲労回復効果が高い泉質の温泉を探しましょうか」

　ボタン一つで液晶モニターに変わる部室の備品のホワイトボードに、トゥアールが検索してピックアップした全国の温泉が表示されていく。

　俺たちはその検索結果を注視したが、「満室」と併記されているものがほとんどだ。

「何じゃ、どこもいっぱいではないか」

　イースナが頭の後ろで手を組み、椅い子すの前脚を浮かして溜ため息いきをつく。旅行の計画を友達と立てるのも、初めてのことなのかもしれない。不満げな表情とは裏腹に、どこか楽しそうだ。

　そうか……問題は、宿だな。直近で、しかも宿泊は週末。このスケジュールで、空きがあるかどうか。それなりに有名なところは、数日前に予約なんてそうそう取れないだろうし。

　その時、俺は近付いてくる風雅なツインテールの気配に、ドアの方を向いた。

「……あ、理事長が来る」

「お母様が!?」

　理事長の到来を察知し、俺はつい昔の癖で見られて困るものが出ていないか周囲をチェックしてしまった。今や、理事長もこの部室がツインテイルズの学園での活動拠点であることは知っているというのに。

「ごめんくださいな、皆さん」

　艶あでやかな和服美人、神しん堂どう慧え夢む理事長が、ノックの後に部室内へと歩み入った。

　気配を察知してから二分……随分遠くにいる気配を感じられるようになったんだな、俺。

『当然だ。周囲の属性の気配を探るなど、卓越したエレメリアンにとっては呼吸も同然』

……グリフォギルディの言葉が、脳裏に去来する。
　俺は属性力エレメーラではなくツインテールの気配そのものを探っている。エレメリアンとは違うさ。
「ふむ？」
　理事長の視線がホワイトボードへと向く。考え入るように無言になってしまった理事長を見て、俺ははっとする。
「え、えーっと……すいません、今日は部活動っていうか……ツインテール部で旅行を考えていて……それが温泉なんです」
　学内の活動なのだから本来なら旅行ではなく合宿と言っておくべきだが、ツインテール部の実態を知っている理事長には変に誤ご魔ま化かさない方がいいだろう。学生の本分を忘れないように、と一つ二つ叱しつ責せきもあるかもしれないが、それは仕方のないことだ。
　だが理事長は、それを聞いて雅みやびな微笑ほほえみを浮かべた。
「まあ、行き先が温泉ならば言ってくだされればよろしいですのに。神しん堂どう家所有の温泉地がありますから、ご招待しますわ、婿むこ殿」
　怒るどころか、渡りに船とばかりに驚くべき提案をする理事長。
「えっ……温泉がありましたの⁉」
　海に行く時は、慧え理り那なが「神堂家所有のプライベートビーチがある」と提案してくれた。だが、温泉に関しては知らされていなかったようだ。
「慧理那にはまだ教えていませんでしたわね。神堂家が誇る秘湯、その名も『神堂温泉』のことを」
　直球すぎて軽くビビる。
「神堂温泉は本来、神堂の女が婚こん姻いんを定めた殿方と二人で行く場所。それゆえ未婚の娘には伝えないことが習わしですわ」
　母から娘ではなく、母から母へ。愛まな娘むすめが婚姻を決めたその時、初めて教えるという伝統らしい。相変わらず、神堂家は変わった継

承事が多いんだなあ。
　トゥアールが物もの怖おじせず理事長に指を突きつけ、言い放った。
「生あい憎にくですがこれは私たち全員の旅行です！　慧理那さんと総そう二じ様だけを子宝温泉に攫さらわれるぐらいなら、私がどっか適当にボーリングして温泉を掘り当てますから、お引き取りを！」
　口元に手を添え、優雅に高笑いをする理事長。
「おほほほほほ、相変わらず元気のよいお妾めかけさんですこと。もちろん側室の皆さまも招待しますので、ご安心くださいな」
　理事長は、トゥアールの不調法な物言いをむしろ喜んでいるように見えるな。
　そして、イースナもあっさりとその案に乗った。
「わらわはそちらの方がよいぞ。思う存分総そう二じに悪ふざけができるからな」
　やや不穏な言い回しが気がかりだが、認識攪乱装置イマジンチヤフがあるとはいえ、アイドルのイースナからすれば旅行は人目のない私有地の方が安心できるのだろう。
「ほほう、ツインテイルズの一員であることは知っていましたが、この芸げい妓ぎの娘さんも婿むこ殿のお妾めかけさんと相成ったわけですのね」
　善いい沙すな闇あん子このアイドル活動に関しては知っているのか、理事長はイースナをしげしげと見つめて頷うなずいた。
「アイドルじゃ！　言い回しがおばちゃんじゃのう!!」
「おほほほほ、あなたの口調もなかなかどうしてお年を召していますわよ」
「ぐぬぬぬ……!!」
　大人の余裕でイースナを躱かわし、理事長はさらに続けた。
「何でしたら、皆さんもご家族を連れていらしてくださいな。ただし、

女性限定ですわ。神しん堂どう温泉に入ることが許される男性は、未来の婿ただ一人です」
　古式ゆかしい提案に、反論する者は誰だれもいなかった。
　理事長は俺に矢庭に顔を近付け、多少息を荒らげながら念を押してきた。
「特に婿殿、未み春はる様……お母様を必ずお誘いくださいね。必ずです」
「……え……あ、はい……」
　仕事が残っているとのことで退室していく理事長．そのツインテールを見送る。
　温泉地に、理事長と母さん。
　石油コンビナートでキャンプファイアーをするような不安感に駆られるが、ホストの希望とあっては断るわけにもいかない。帰ったら母さんに言っておこう。
「うーん……じゃあお言葉に甘えて……あたし、お姉ちゃん誘ってみようかな」
「っ……恋れん香かさんを……大丈夫ですか？　愛あい香かさん……」
　愛香は恋香さんを誘いたいようだが、トゥアールには心配事があるようだ。
「ツインテイルズ関連の会話をしなきゃ大丈夫でしょ？　慰安旅行なんだから、むしろそういう話題は避けるべきだし」
　なるほど。唯一事情を知らない恋香さんがメンバーにいることで、意識してツインテイルズ関連の話をしないよう注意するようになるな。
「そうだな。俺たち、ちょっとしたことですぐエレメリアンを気にしたりするからな……。そのぐらい徹底した方がいい」
「いえ、懸念材料はそこではないんですが……まあ、愛香さんがいいのなら……」

　奥歯に物が挟まったような言い方のトゥアールが気にかかったが、納得したようなので特に聞かずにおく。
　そこで、俺ははたと気づく。俺は渋じゆう面めんを崩さないイースナに提案した。
「イースナ、フェニックスギルディ……唯ゆ乃ののアドレスを教えてくれないか？」
　俺は、唯乃のアドレスや電話番号を知らない。以前連絡を取り合った時は、イースナが中継していた。この機会に聞いておこうと思ったのだ。
　だが、イースナの返事より先に愛あい香かが制止してきた。
「これ以上余計なアドレス入れんじゃないの！　そーじのトゥアルフォン砕くわよ‼」
「うわあ、引きますよね総そう二じ様……愛香さんのこの果てしないめんどくささ」
　それを見たトゥアールは、露骨に引いて見せた。
「そんな愛香さんのドン引き行為を記録したアーカイブ映像、その名も『アイカイブ』をそのうち一挙上映しますっほぁあああああああ⁉」
　諸般の事情により、一挙上映は中止となった。愛香の手で、トゥアルフォンというかトゥアールが砕かれているが……唯乃をあまり警戒されるのはよくない。
　別に大した理由はないということは、みんなに説明しなければ。
「いや、理事長が女性なら知り合い連れてきてＯＫって言ってくれているからさ。あいつにも何だかんだで世話になったし、温泉旅行に呼ぼうかなって思って」
「結いわ翼ばね唯乃まで呼ぶ気ですか⁉　敵の乳は借りません！　今回の旅行、私たちの乳だけで成し遂げてみせます‼」
　即座にリカバリーしたトゥアールが、先ほどの愛香に負けず劣らずの

迫力で俺に詰め寄ってきた。イースナがぼそりと指摘する。
「……それ、あとからその敵の乳が駆けつけて、おいしいとこ攫さらってくフラグじゃぞ」
　しかし、ただ一人事情を知らない恋れん香かさんを連れて来る愛香にとっては、穏やかな話題ではないようだ。
「あいつこそ、戦いの話題なしで旅行中過ごすなんて無理でしょ!?　事前に注意しておいたって絶対途中でボロ出すって！」
「そうでもないぞ。唯乃とデートした時、全然そういう話をしなかったからな。むしろ俺の方がついつい口にして、あいつに窘たしなめられたぐらいだ」
　もっとデートを楽しめ、ってな。
「ッ……!?」
　背筋を昇る寒気に、俺は身を竦すくめる。
　うなじをすきま風が吹き込んだかと思ったが、この部室でそれはありえないことだった。
「そっかあ……デート中に……さぞ他の楽しい会話が弾んだでしょうね……」
「おっぱいも弾ませて触らせやがりましたしね、あいつ……」
「わたくし軽快なお喋しやべりが苦手ですから、羨うらやましいですわ……」
「今日から総二に送るメールの量、倍に増やすのじゃ」
　やっぱ寒い。すきま風はどこから来て、どこへゆくのか。
　愛あい香かとトゥアール、慧え理り那な、イースナが順に、穏やかながらも邪気を帯びた視線を一斉に俺に向けていることとは、何の因果関係もないと信じたい。
「だが……残念じゃったな総そう二じ。最近、焼き鳥とは連絡がつかん。あれ以降、別の世界に羽を伸ばしに行ったのかもしれんぞ、焼き鳥

だけに」
　イースナは気を効かせて、俺がツインテール属性を取り戻したことを唯ゆ乃のに伝えようとしてくれていたようだが、連絡がつかないらしい。
　やることはやったから気ままに過ごす、と言っていたし、イースナの言う通り、別の世界に出かけていても不思議はないか……。
　それでも、あいつには直接会って言っておきたかったんだけどな。
　俺はもう大丈夫だ、って。お前と戦う理由はなくなったんだ、って……。

　その上で、もう一度伝えたいんだ。
　お前は必ず、人間として生きられる。
　俺たちと、友達だけじゃなく、仲間になれるって。

　　　◇

　明あくる日の夜。テイルブラックは一人、グリフォギルディと相対した湊みなと場ばを訪れていた。
　波風にツインテールを揺らしながら、手にした携帯電話の画面を見て嘆息する。
「……焼き鳥となら、利害が一致するやもと思ったが……」
　総二の復活報告とは別件で、唯乃へ再び連絡を取ったが━やはり、返事はなかったのだ。
　暗くら闇やみの中から、尻へと一直線に放たれる視線。ブラックは、嫌悪を面に滲にじませ振り返った。
「意外だね……仲間を連れて来るかと思っていた。あの怯おびえようを見てはね」

果たして夜闇の狭はざ間まから姿を見せたのは、グリフォギルディだった。

グリフォギルディは、あの去り際──ブラック一人に交渉を持ちかけていたのだ。

元上官である貴女あなたと、冷静なる話し合いの場を持ちたい──と。

「驕おごるなよ、三さん下した。神の一剣ゴー・デイア・ソードに恐怖しているのは否定せぬが、それは貴様ごとき使い走りにではないわ」

ブラックの本領発揮たる不ふ遜そんな返礼に、グリフォギルディはこめかみをひくつかせる。

「フン……白々しい、何が究極のツインテールの代償に消耗戦はできん、じゃ……!!」

しかし、それも一瞬。ブラックの変わらぬ震ふるえを見て取り、すぐ様余裕を整える。

「仰おつしやる通り。究極のツインテールという唯一無二の存在を手にするためならば、下級戦士などどれだけ消耗しても構わない。アルティメギルはいかほどの打撃も受けはしないよ」

「初めからそうして本音で語ればよいものを。言っておくが、腹の探り合いを仕掛けても無駄じゃぞ。テイルレッドは、貴様の想像を遥はるかに超えたツインテール馬ば鹿かじゃ」

その言葉に、むしろ逆に闘志を燃やすかのように微笑ほほえみを浮かべるグリフォギルディ。

「確かに。その直情径けい行こうさに、決して幼さは感じない……彼女の尻には奥深い魅力がある。だからこそ、貴女あなたと取引をしたいのですよ、ダークグラスパー様───」

不意に大波がさんざめき、グリフォギルディの言葉をかき消す。

「□□□□□□」

しかし、ブラックの耳には、その悪魔の囁ささやきがはっきりと届い

ていた。
　呆ぼう然ぜんと立ち尽くすブラックの元へ、歩みを進めるグリフォギルディ。はっとして武器を抜こうとする彼女をまたも制止し、静々と何かを手渡した。
「──これが何かおわかりですね？　決心がつきましたら、お使いください」
　そして、紳士の仮面を捨てた悪逆の双そう眸ぼうを漲みなぎらせ、諭すように囁く。
「どれだけ光を求めようと──一度闇やみを受け容れた者は、決して抜け出せはしないのです」
「…………!!」
　グリフォギルディはブラックへとその自慢の尻を向け──
「賢明な決断を期待しておりますよ。今の貴女の尻は、組織にいた頃より弛たるんで見える」
　失望と期待の同居した言葉を残し、夜空へ飛び去っていった。
「あの変質者め……。ピチピチの一二才の尻を弛んでいるなどと、喩えでも薄ら寒い」
　その罵ば倒とうが合図だと言わんばかりに、ブラックの上空で光点が輝いた。戦闘機形態メガネウインガーとなって上空で隠れ、警戒していたメガ・ネだ。そのまま人型に変形し、地上へと降り立つ。
「イースナちゃん……こんな、一人で無茶せんと……！　総そう二じ君だって、戦いが終わるって喜んでたの、あれ、半分演技やと思うで……!?　総二君たちを頼らな!!」
　おかんの説得に、苦笑交じりに冗談めかすブラック。それぐらいわかっておる……と。
「本当に嘘うその下へ手たな奴やつじゃからな……愛いとしくて、わらわからちゅーしたいわ」

メガ・ネは、ブラックが震ふるえる手で背に隠したものを気にかけつつ、優しく労いたわる。
「……イースナちゃん……。ほんま、一人で背負い込んだら、あかんからね……？」
ブラックの眼め鏡がねの奥で震える瞳ひとみが、一瞬、夜空に輝く綺き羅ら星の如き光を放って見えた。
「……なあに、本当に戦いが回避できるならと、戯たわむれにあ奴の駄だ弁べりに付き合うただけじゃ。小間使いが調子に乗って、わらわを下に見ているのも腹立たしかったのでな」
無駄骨じゃったな、とあっけらかんと言い放ち、ブラックは踵きびすを返す。
「気を取り直して、ゆっくりと温泉旅行を楽しむとするか……!!」
一人歩き出すブラックの背に、力無く手を伸ばすメガ・ネ。

その手は虚むなしく空を切り──去りゆくブラックへは、ついに届かなかった。

第三章　ツインテール温泉。

　その週の土曜日。
　快晴とまではいかないが、天気が崩れることもなく、旅行日和びよりで朝を迎えた。
　桜さくら川がわ先生が提案してくれたリフレッシュ旅行だ。旅程ものんびりと楽しみたい。そういうわけで、移動は神しん堂どう家が車を出してくれるという提案に甘えることにした。
　着替えをバッグに入れ、さらっと旅支度を済ませる。
　最終的なメンバーは、俺、愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、イースナ、桜川先生というツインテール部のメンバーに、俺の母さん、理事長、メガ・ネ。そして、愛香のお姉さんである恋れん香かさんという保護者組。なかなかの大所帯だ。
　そのうちの神堂家組が、今から車で迎えに来てくれる予定だ。彼女たち以外は全員、集合場所であるうちの喫茶店の前に揃っている。
「…………ひ、人……多い……」
　集まった人数を見て不安なのか、イースナはずっと隅っこで身を縮めている。
　大所帯なのを見て物もの怖おじしているようだ。何かあったら、俺がすぐフォローしよう。
　……それに……何か、イースナのツインテールが無理をしているように感じるしな……。
　程なく、神堂家のリムジンが道路を滑るように走行してきた。普段見かけるものよりもさらに長い、カーブを考慮していないかのような長大さだ。マイクロバスより全長がある。
「目立つわね、あれ……」

　早速愛香が不安を漏もらす。
　リムジンから慧理那、桜川先生、そして理事長が降り、俺たちと顔を合わせる。
「ほほう、総そう二じ君、今日はリムジンでお出かけかい？」
「え……？　あ、はい」
　うちの常連客さんたちが、興味深そうにリムジンを眺めながら俺に声をかけてきた。
　無理もない。喫茶店の店先までレッドカーペットが伸びていないのが不思議なくらい、俺たち一般人にとって浮き世離れした乗り物だ。
「僕も昔、大統領の警護で乗ったことがあるよ……懐かしいな、フッ」
　……このぐらいの話が、一番虚実の判断に困る。
　最近は身分を隠した富豪や要職の人まで常連に加わったりしているようなので、自分は時間移動能力者だ、ぐらいのぶっ飛んだ肩書きの人でないと、本当かもと思ってしまうのだ。
　別のお客さんが、ニヒルに微笑ほほえんで激励をする。
「楽しんできたまえ、若者たち。私たちはこの特異点で〝観測〟を続けるとするよ──」
　何をだ……。何でうちの店は、どんどん奇妙な設定を追加されていくんだ……。
　……そもそも、今日臨時休業じゃないってことは、またお客さんに店を任せて出かけるつもりか、母さん……。
　俺が店の心配をする次元は、とうの昔に越えてしまっているのだが。

「皆さま、準備がよろしければ、早速参りましょうか」
　理事長が、揃った面々に挨あい拶さつをする。一際恐縮しているのは、本来一番目立つはずの鮫さめの着ぐるみだった。
「ウチ、自分で走って後ろから着いてきますから、気ぃ使わんといてく

ださい」
　一般人の恋れん香かさんが同行するということでメガネドンの着ぐるみで変装したメガ・ネが、理事長にぺこぺこと頭を下げている。
　走るとはもちろんバイクへの変形、爆走機形態メガネストライカーだろう。
「いいのですよ、お誘いしたのはわたくしですもの。それに今やわたくしもツインテイルズを応援する者。あなたの活躍もしかと見させていただいていますわよ、テイルメガネさん」
「混ざってはりますけど……ほな、お世話になります」
　一応、喫茶店の常連客や通りがかりの人に聞かれないよう小声気味だが、その理事長の頼もしい言葉に、俺も深く頷うなずく。
「今回は、見事に全員の保護者が同行してるんだな」
　こんな機会は滅多にない。楽しい旅行になりそうだ。
「……ん」
　愛あい香かに肘ひじで脇わき腹ばらを突かれる。目線の先を追うと、トゥアールと目が合った。
　溜ため息いきをつき、愛香をジト目で見返すトゥアール。
「そういう気遣いは無用です、愛香さん。私だって子供じゃないんですから」
　俺はついきょとんとしてしまった。
「……気遣い？　トゥアールの保護者かぞくは、俺の母さんがいるだろ」
　別に気を遣ったわけではない、当然のように口をついて出た言葉だった。
　それに保護者という括くくりでなければ、もちろん俺も家族だ。
　母さんが、感極まったように俺に抱きついてくる。
「んもおおおおおおおおおおおおおおおおお我わが子ながらかっこ

いいわよ総そうちゃんっ!!」
「何だよ、母さんが自分で言ってたことだろ!?」
　トゥアールはもう、立派な家族だ、って。
　おちゃらけながら口にした言葉だけど──長い間、独りで広大な異世界を旅してここへ、俺の家へやってきたトゥアールに、出会ったその日にそう言って受け容いれてくれた。
　そんな母さんを、我わが親ながら俺は尊敬している。
「あ、ありがとうございます総そう二じ様……近い将来観み束つか家の家族を増やすことで、この御恩は必ず返します……あと今晩、家族が増えるかもしれない行為でお返しします……」
　母さんと俺に寄り添うように抱きつこうとしてきたトゥアールが、愛あい香かにインターセプトされる。
「おおーい、みんなそろそろ乗ってくれ。前座席は奥様や未み春はるさんとして、後部座席は向かい合って六人まで乗れるから、観束たちが座るといい」
　運転手も兼ねる桜さくら川がわ先生が、乗車を促うながす。
「あっ……それじゃウチ、前の方に乗せてもらいます」
　恋れん香かさんは朗ほがらかな笑顔で、恐縮しきりのメガネドンに後部座席を勧める。
「メガネドンさんは、総くんたちとどうぞ。私、未春おばさまと一緒に前に乗りますから」
　普段テレビで筆談しているゆるキャラ・メガネドンが肉声で喋しゃべっていること、そして何より俺たちと旅行に同行すること。恋香さんが不思議がると思ったが、イースナの友達と言われて普通に受け容いれてくれているようだった。

　乗車する前、母さんと理事長が和なごやかに話しているのが目に入っ

た。
「未春様……本当に、素晴らしい息子さんをお育てになりましたわね」
「さっきの総ちゃん？　ふふ、お互い様でしょ。慧え理り那なちゃん、見る度たびに素敵になっていくじゃない」
「ツインテールはまだまだ、婿むこ殿に見合うほどのものに至っておりませんけれど」
「はぁー、総ちゃんだけ重婚できるように、日本の法律変わらないかしら」
「未春様のお望みとあらば、神しん堂どう家の総力を上げて尽力しますが……わたくし個人としては、慧理那が正妻、尊みことが第二妻、他の皆さんがそれに続き──となってくれれば一番よいのですが……」
　会話の内容は聞こえなかったが──この二人もこんなに穏やかにお喋りをするのか、と微笑ほほえましくなった。

◇

　目的地の神堂温泉へは休憩も含め、およそ三時間強で到着すると説明を受けた。
　県を一つ二つ越えたぐらいの場所だろうか。
　運転席には桜川先生。前座席は左から理事長、母さん、恋香さん。
　そして向かい席となっている後部座席には、前面左からトゥアール、俺、愛香。
　同じく後面左から、慧理那、イースナ、メガ・ネ。
　愛あい香かが恋れん香かさんと背中合わせになっているのは、万一疑わしい話題が出た時フォローしやすいようにとの考えだろう。
　ぼへーとした風ふう貌ぼうのゆるキャラが、高級車に乗っているシュールな光景に戸惑う。

「メガ・ネ…………ドン、あんま端はしっこに寄らなくても、広いぞ、この車」
　俺が言うことではないが、メガ・ネは普段から遠慮がちなので、気を楽にして欲しい。
「そ、そう……それに、こっち側は、スリムな二人だから……」
　確かにイースナと慧え理り那なは小柄だから、隣にメガネドンが座るには丁ちよう度どいいな。
　着ぐるみの頭が天井に触れているが、二メートル近くあるメガ・ネが難なく座れるのは、理事長と桜さくら川がわ先生に感謝しないと。公共交通機関ではこうはいかなかっただろう。
　スモーク窓だけど、窓際席だから信号待ちで隣の車から見えるかもしれないが。
　このリムジン、車体の長さの割りに登乗人員数が少ないのは、ゆったりとした空間を確保するためのようだ。座席の端には小型冷蔵庫やグラス棚が設置されていて、要人御ご用よう達たしの高級車のイメージそのままだ。
「尊みことさん、疲れたら運転代わるわよ～。私、ちゃんと免許持ってるから」
　母さんが桜川先生を気遣い、運転の交代制を提案する。
「大丈夫です、未み春はるさん。長距離運転は慣れていますし、このリムジンは普通免許では運転できませんから。代わりと言っては何ですが、婚こん姻いん届とどけの保護者同意欄に未春さんのサインをいただければ」
「私はいつでもサインするわよ、その代わり本人欄の方は尊さんが書いてもらってね～」
「お任せください、先日あと一歩でした。観み束つかの心は確実に婚姻に引き寄せられています」

母親に俺の将来を容易たやすく売られた気がするが……確かにせっかくの温泉旅行で桜川先生を疲れさせるのは気が引ける。
帰りはトゥアールに頼んで、無人でどうにかできないだろうか。超科学の完かん璧ぺきな自動運転とか──。
そこまで思案し、すぐに自省する。
（……そっか……）
これが駄目なのか。テレポートができる装置とか、異世界を移動できる戦艦とか……超科学に慣れすぎて、思考がそれに頼りきりなのがいけない。
今日は恋香さんも参加しているように、ツインテイルズとしての活動は忘れて普通の旅行をするんだ。桜川先生が疲れるようなら、自分にできる手助けをしよう。

「それにしても、えむぴーと旅行なんて二〇年ぶりぐらいじゃない？ 何か学生の頃に戻ったみたいねー」
前座席は、学生組に負けないぐらい世間話に華が咲いていた。
いや、頼むからもう二人一緒に学生時代には戻らないでくれ。理事長が完全解放ブレイクレリーズした喫茶店の乱が未いまだにトラウマなのか、俺は二人から「学生」というワードが出るだけで全身から冷や汗が吹き出す。
「ええ！　もうすぐご主……未み春はる様とも家族になるのです、これからは頻しく頻しく二人で旅歩きができるはずですわ……はあはあ」
車はまだ一般道を走っている。標高の変化で酸素濃度が変わったとも思えないが、前座席の理事長の息が荒い。
二人の会話はそれぞれの子やその友達に波及。そして、母さんは小さく振り返り、トゥアールに視線を送った。
「トゥアールちゃんも、出会った頃とは結構変わったわよねえ……最近

は何か、本当に可愛かわいくて……」
　しみじみと呟つぶやく母さん。トゥアールは何な故ぜか、それを褒ほめ言葉と受け取らなかったようだ。
「あ、あの……未春将軍、私のこと見捨てないでくださいね⁉　私、しおらしくなんてなってませんから！　全然乳とか出しますから！　ここでもぽろんと出せますから‼」
　後部座席の隙すき間まから身を乗り出すようにして訴えるトゥアール。
　いくらほぼ女性メンバーだからといっても、男の俺も乗っているのだからそれはまずい。
　そもそも可愛いとの褒め言葉への照れ隠しが、何故脱ぐことなのだろう……。
「ふふ、それでよいのですわ、トゥアールさん。しおらしさを徒いたずらに誇るだけでも、痴ち技ぎをただ競うだけでも、女として二流。あなたはその先へと歩を進め始めたということです。慧え理り那なの引き立て役として不足はなくてよ」
「慧え夢むさんに言われると何かこー、何かなんですけど⁉」
　語ご彙いの豊富さで愛あい香かとやり合ってきたトゥアールが言葉に詰まるほど、理事長の励ましは哲学的だった。

　程なくインターに入ったリムジン。ここからしばらくは、高速道路での移動か。
　以前にも少し乗せてもらったことはあるけど、高級車ってのは驚くほど震動や音がしないものなんだな。乗り物に乗っているということを忘れてしまいそうだ。
「…………」
　しかし、何だな。

　移動戦艦スタートゥアールに乗った時は、コックピットからして部室ぐらいの広さがあったから、乗り物──「密室」という感じはしなかったが……。
　車という密室空間で、肩が触れ合う距離で、たくさんのツインテールに囲まれるこの時間。

　───胸の動どう悸きが治まらない……!!
　五感全てを刺激するコロンのようだ。
　それぞれが濃密に匂においい立ち、しかし一つとして同じ香りのないそれは、交ざり合うこともなく、高潔に自己主張をする。
　重なることなく相乗されていくツインテールの刺激に、俺の全身の細胞が粟あわ立だつのだ。
「……そーじ？　何か震ふるえて具合悪そうだけど……酔った？」
　愛あい香かが横から顔を覗のぞき込んでくる。平静を装えているつもりだったが、気づかれてしまったようだ。
「いや、何でもない。こんなにスムーズに走っているのに、酔ったりしないよ」
　真正面のイースナが、にへらっと笑って顔を寄せてくる。
「お、お、お、おトイレ……ですね……総そう二じさん……」
　…………まあ、車内でぷるぷる震えてたら、そう誤解されても仕方はないけどもだな。
「メガ・ネ……あれ、出そ」
「え、ええんかなあ……」
　メガネドンが器用に背中のチャックを開け、中から何かを取り出す。
　それを受け取ったイースナは、じゃん、と小さなセルフ効果音とともに胸の前で掲げる。
　──真新しいしびんだった。

「ネ、ネプネプシークレットアイテムに……こういう、旅行グッズを、追加しておきました……。私セレクト……」
　メガ・ネプチューン＝Ｍｋ．IIの腰部には、異空間を介して無尽蔵に物を入れておける収納スペースがある。その中で特に秘蔵のアイテムを、ネプネプシークレットアイテムと呼称すると聞いていたが……。
　しびんって、旅行グッズだったのか……？
　だがよく見ると、全てガラス製というわけではなく、注ぎ口や取っ手などが金属で、そこに電子回路のような模様が刻まれている。
「わ、私だって……たまには、発明、します……。総二さん、いつもおトイレ恥ずかしがるから……このしびんは、濾ろ過か装置付き……。一瞬で、真水になる……」
　まるで一人で作った夏休みの工作を自慢する子供のような無邪気さで、俺にしびんを手渡してくるイースナ。
　どうしよう。こんな純粋な厚意で差し出されたら、断りづらいぞ……。
「…………ごめんな、総二君……イースナちゃんも悪気はないんや……」
　娘の善意でしびんを自らの体内に格納していたおかんを見て、俺は決心を固めた。
「あ、ありがとう、イースナ……使わなきゃいけなくなったら使わせてもらうよ……」
　本当に、命果つるほどのどうしてもの時、とはあえて言わないでおく。
「総二様、ここで使うんですか!?　ということは、チャックを開けてまろび出すんですね!?」
　大声で、何な故ぜかしびんを見て目を輝かせるトゥアール。
　頼むから広げないでくれ、この話!!

「……でもまあ、総そう二じ様のためを思って色々準備するのは悪くないんじゃないですか？　イースナにしては」
「え、は、はい……」
　ぶっきらぼうに言い放つトゥアールが微笑ほほえましい。イースナには少しきつめの口調だけど、仲の良さが見て取れるんだよな、この二人の場合。なんだか姉妹みたいだ。
　……って、ほんわかしても誤ご魔ま化かせない……気合いを入れないと駄目だ。具合が悪いというより、むしろよくなりすぎる──ツインテールの過剰摂取状態だからな。
「観み束つか君、やはり具合が悪いように見えるのですが……」
　慧え理り那なも心配そうにしてくる。
　下へ手たに誤魔化し続けてみんなを不安にさせたら、旅行に水を差す。ここは素直に白状しておこう。
「大丈夫、実は、ただのツインテール酔いだから」
「大丈夫じゃないでしょうがとてつもなく!!」
　愛あい香かのスピーディな叱しっ責せきで、はっと我われに返る。
　ツインテールの達人である愛香にとって、その怒りはもっともだ。
　ツインテールに囲まれているだけでたじろぐ──観束総二よ、お前はいつまでそんな未熟を晒さらすのだ、と。究極とは名ばかりか、と。
「ほら、あたしのツインテール触りなさい」
「うう、すまん……」
　愛香が自分のツインテールを両房とも手に取り、俺に手渡してくる。
　五感のうちの触覚にツインテールを集中することで、酔いを覚ましてしまおう。
「愛香さん！　ツインテールを与えすぎても駄目だと、総二様取扱説明書にみんなで書いたじゃないですか！　そうやって毎度毎度抜け駆けをしようとする!!」

　取り扱い……俺は、観光地の鹿か……!?
「だ、だってそーじが辛つらそうだから……」
「ツインテール酔いにツインテールをぶつけるのは愚ぐの骨頂！　毒は本来有害だからこそ、同じ毒で制するという強硬手段が生きるだけです!!」
　トゥアールの力説もごもっともだ。そもそも、ツインテールで酔ってしまうということ自体、ツインテールに対して失礼なのだから。
「ツインテール酔いに効くのは……」
　トゥアールは横から俺の頭頂と顎あごに手を添え──
「おっぱいです!!」
　自分の胸に抱き込んできた。
　包まれた頭がそのまま溶け込んでしまいそうな、柔らかな感触。
　服や下着を間に挟んでなお、素肌のきめ細やかさが伝わってくるかのようだ。
「やると思ったわよ、離れなさい！」
「おおーっと愛あい香かさん、いいんですか!?　この密室でいつものように暴れたら、慧え理り那なさんたちまで怪け我がをしてしまいますよ!!」
　トゥアールから俺を引き剥はがそうようとしていた愛香が、突然の忠告に身を強こわ張ばらせる。
　逃げ場のない車内で愛香がいつも通り暴れれば、変身前はか弱い慧理那やイースナが危ないし、前の座席の家族組も騒々しく感じるだろう。
「トゥアール、言っておくけどあたしの手があんたに触れてさえいれば、いくらでもダメージを与える方法はあるのよ!!」
　本当にいくらでも技を体得してるから困る。
　愛香は俺に視線を移すと、握り締めていた拳こぶしを下ろして愕がく然ぜんとした。

「そ、そーじ……何で抵抗しないの……？」

「え、えっ？」

「今までだったら、女の子に抱き締められたりしたら、恥ずかしがってすぐ離れようとしてたじゃない!!」



　記憶をよーく手た繰ぐってみる。
　…………………………いや、俺が無理に離れるというより、その都つ度ど愛あい香かが引き剥はがしてきた記憶しかないんだが……。
　でも……確かに俺は、トゥアールに抱き寄せられるがままになっていた。
　不意に俺の脳裏を、唯ゆ乃のと砂浜で交わした悲痛な会話が過よぎる。

『総そう二じ……お前は、すでに属性力エレメーラでモノゴトを捉とらえ始めちまってるのさ……。触れた髪の感触や肌の温ぬくもりじゃなく、心で感じてる。ツインテールという髪の毛じゃなく、ツインテール属性でだ。そのせいで、女の胸には無反応で、ツインテールに喜びを感じる……』

　そうか、俺──ちゃんと、女の子の胸に反応できるようになってたのか……。
　唯乃。お前が馬ば鹿かみたいに全力でぶつかってきてくれたおかげで、俺は人として軌道修正できたみたいだよ──。
　呼吸をするように、気配を探る。自身と重なった、グリフォギルディの習性を見てから感じていた言い知れぬ不安が──風化し、音を立てて消えていくのを感じる。
　安あん堵どからか、俺は無意識にトゥアールの胸に自分から深く頭を預けてしまった。
「……そ、総二様？」
　トゥアールがビクリと身体からだを震ふるわせ、俺はようやく自分が何をしていたかを自覚する。
「あ、ごめん、俺──」

俺が慌てて飛び退のくと、トゥアールは顔を真まっ赤かにして手を振ってきた。
「あー！　いえいえ、全然大丈夫ですから！　到着するまでクッションにしてください！　この中でクッションになるのは私だけですから!!」
「メ、メガネドンの着ぐるみも、もふもふして気持ちいい……!!」
　イースナが対抗意識を燃やす。確かに、メガネドンの着ぐるみは絶妙の肌触りだ。
　そして、愛香とトゥアールはまたも口論を始めてしまった。
「あんた途中で照れるなら、最初からやらなきゃいいでしょ!!」
「て、照れてないですぅー！　服を脱いで直じかおっぱいにくっついてもらおうかなって考えてたところですぅー!!」
　さすがにそれは俺も困る。
　しばらく無言だった桜さくら川がわ先生が、後部座席の俺たちにも聞こえるよう声をかけてきた。
「そうか観み束つか、女に抱き締められるのが癖になったんだろう。ようし、旅館に着いたらまた私がしてやるか」
「べ、別に癖になってるわけじゃ……」
　理事長が、心底驚いたように聞く。
「尊みこと……婿むこ殿を抱き締めたのですか？」
「え、あ、はい……奥様……。観み束つかを慰なぐさめようと……」
「……そうですか……ふふ」
　その声はまるで、娘を誉ほめる母のように優しかった。
　理事長は、桜さくら川がわ先生を本当の家族のように大切に思っているんだな……。
　──と感慨に耽ふけっていると、理事長は先ほどと打って変わって厳しい声こわ音ねに変化した。
「慧え理り那な、トゥアールさんを見習いなさい」

「はい？　ええ、トゥアールさんはわたくしの師匠ですわ」
「ほう。母に言われる前に彼女に指導を賜たまわっていたとは、成長しましたね、慧理那」
　賞賛も一瞬、すぐに厳格な母へと戻る理事長。
「それではあなたも、トゥアールさんのようにおっぱいと容易たやすく口にしなさい」
「え、えええぇっ⁉」
「わたくし、婿殿が『慧理那のおっぱい』と言っているのを是非聞きたくなりましたの。まずあなたが先陣を切り、婿殿を導くのです」
　どうやら理事長は、以前部室で聞いたあのへんてこアラートが大層お気に召してしまったようだ。
「えっ……えっ……わたくし、どうすれば……⁉」
　前座席から投とう擲てきされる理不尽に、身をよじって困惑を訴える慧理那。
　親子の団らんとはいえ、少し気の毒にも思えたので、俺が話を逸そらそうとすると──
「さんはい！」
　無情にも理事長は、合図とばかりに手て拍びよう子しをする。
「……お、ぱい……」
「聞こえませんよ、慧理那！」
「おっ……ぱい……」
「これから始まるめくるめく旅の景気づけに、元気よく‼」
「～～～～～～っ、おぉ……っぱい！」
　顔を真まっ赤かにして、自棄気味に口くち端はを吊つり上げて叫ぶ慧理那。
　ノリ的には家族旅行って感じでいいんだけど、内容を今少し軌道修正してくれれば……。

「そう、その意気です！」
「うう、恥ずかしいですわ……」
「母は何も、見ず知らずの殿方の前で叫べと言っているのではありません！　それでは雅みやび無きただの痴ち女じよ！　婿殿の前で言うからこそ意味があるのです！　はい、おっぱい!!」
「おっぱい！　ですわ!!」
　幼き娘に舞ぶ踊ようを教えるかのように、無情な手拍子は続く。
　理事長、あまり真ま面じ目めな慧え理り那なを追いつめると、振り切った反動が恐ろしいから勘弁してあげて欲しい。
　いや、あるいは──そのはっちゃけこそが理事長の狙ねらいなのかもしれないが……。
「神しん堂どうさんのお母さん、スパルタなのねえ」
　のどかに感心する恋れん香かさんの声が後ろから聞こえる。
「愛あい香かは、おっぱいって言わないの？」
　そして愛香に、茶化すように話を振る。しかし……。
「────言い飽きたわ……」
「そ、そう……」
　愛香の恨み節は、肉眼で確認できるガンマ線と表現できそうなほど濃厚に周囲へと放射されている。肉親の恋香さんも思わずひるんでしまう。
「あたし、今年に入ってから下へ手たすれば一生分、乳とか胸とかおっぱいとか口にしてる……何だったら世のおっぱいへの怒りで去年の倍くらい強くなった気がする……」
　当然、変身前の素すの状態でだ。
　これ以上愛香が強くなると、生身で地球上の全生物の頂点になりかねない。百獣の王や海の殺し屋も、立つ瀬が無くなってしまうだろう。
　知と武器を得たからこそ地球でもっとも繁栄した人類が、フィジカル

においても他の動物たちのステイタスを奪うなど、あってよいのだろうか……。

　途中から胸の話ばかりになってしまったが、女の子がたくさんいると、こういう話題になるのはこれまでで学習済みだ。ここは、男の俺が恥ずかしさを我慢しなくちゃな。
　車は爽さわやかな高原を望む細い道に差しかかり──清流穏やかな山の麓ふもとへ停車。
　賑にぎ々にぎしく道程を楽しんだ末に、俺たちは神堂温泉に到着したのだった。

◇

　麓の駐車場で車を降り、俺たちは山道へと歩み入った。
「ぜは、ぜは……」
　──イースナが、速攻でバテた。まさか、変身しないと数分の登山も厳しいとは……。
「ほら、おんぶしてやるから」
「……は、はい……！」
　俺が屈かがんで背中を差し出すと、イースナは嬉うれしそうにおぶさってきた。
「もー！　そーじはイースナばっかり甘やかすんだから!!」
「なんでおっぱい無い子ばっかりいつも総そう二じ様の背中に密着するんですか!?」
　愛あい香かとトゥアールに何な故ぜか文句を言われながら、俺はイースナをおぶって山道を歩く。
　甘やかしすぎ、か……。確かにイースナは妹みたいに接してしまうけ

ど……最近彼女は、こうして触れ合っていないと──突然いなくなってしまうような儚はかなさがあって、不安なんだ。

　コート越しに背中へ伝わる温ぬくもりと、早鐘を打つ彼女の鼓動が、俺に安あん堵どを与えてくれる。

　そこからさらに、談笑交じりになだらかな坂道を歩くこと、数分。

　初冬の寒風で風情豊かに茶けた木々に囲まれ、その宿はあった。

　瓦かわら屋根の木造建築でありながら、古さを感じさせない瀟しよう洒しやな外観。

　神しん堂どう家所有の島のコテージは、異国情緒溢あふれるものだったが──こちらは打って変わって純和風。老舗しにせ旅館という言葉がぴったりだ。

　二階建て、敷地は中型のスーパーマーケットほどもあろうか。これが数ある別荘の一つにすぎないのだから、神堂家のスケールにはいつも圧倒される。

　エントランスに至るまでの舗装道を見るだけでも、清掃が徹底されているのがわかる。外でこれならば、館内は況いわんやをや。

　しかし中に入った俺を待っていたのは、予想を超えた華美なる空間だった。

「おお……」

　上がり口の天井から提さげられた、「ツインテール」の掛け軸。

　玄関に生けてある花も、しなだれる茎や葉を合わせてツインテールを表現した物だ。

　そして襖ふすまには、水墨画で大きくツインテールが描かれている。

　ツインテールを尊とうとぶ神堂家。その秘蔵の地にして集大成と呼べる館内に、俺はただただ目を奪われていた。

「うふふ……やはり気に入ってくださったようですわね。婿むこ殿が今すぐ本当に婿殿になってくだされば、毎週にでもここに来れますのよ」

「えっ」
　魅惑の言葉に思わず振り返ると、理事長が俺を抜け目なく観察していた。
「もっとも、この旅館は本宅のツインテールから見れば赤子も同然。いわば、神堂のツインテールの産うぶ毛げですわ」
　何、これで序の口だと⁉　ツインテールの底が見えないぜ、神堂家……‼
　ということは……またもや俺は理事長に試されているのだろう。
　かつて自分に啖たん呵かを切った青二才が、この程度で心騒がすことはないだろうな、と。
　すでに俺は、旅中の車内でツインテールの濃密な気にあてられるという無様を晒さらしてしまった。慧え理り那ながトゥアールを師と仰ぐなら、俺にとって理事長もツインテールの師匠の一人だ。その期待には応えなければならない。
　ツインテール溢れるこの温泉で、しかと自分を保ち、汚名返上してみせようじゃないか。
　俺が玄関でイースナを下ろした瞬間、隣にいた愛香の身体からだが、ぐらりと揺れた。
「っああ～、ど、どうしよ……周りがツインテールすぎて目め眩まいが～……⁉」
　額ひたいを押さえてたたらを踏む愛あい香か。俺は、咄とつ嗟さにその背を抱き支える。
「しっかりしろ、愛香！」
「え、えーっと……ごめん、おんぶ……して欲しいかも」
「うん？　いや……もう館内だし、肩を貸すから」
　軽い立ちくらみ程度かと思っていたが、いざ肩を貸すと愛香は身体からだ全体で寄りかかってきた。そこまで力が抜けてしまっていたのか。

ツインテールの達人である愛香をして、目眩をもたらす濃厚なツインテール空間。俺も、襟えりを正して臨まねばなるまい。
　おや、トゥアールが白目を剥むいている……彼女も目眩を起こしたのだろうか。
「やっべえ宇宙級の大根演技にビビって初動が遅れました……！　騙だまされてはいけません総そう二じ様！　優しくすればするだけ愛香さんのパンツの替えが足りなくなっていくだけです‼」
「何な故ぜパンツを替える……⁉」
「っていうか愛香さん、最近とろけ過ぎですよ！　蛮族の本分を忘れないでください‼」
　愛香はトゥアールの言葉に反応せず、むしろ一層身体の力を抜いて俺にもたれかかってくる。
「……ん……もうちょっと……くっつくわね……」
　愛香は軽いが、ここまで力を抜かれるとかなり力を入れないと支えきれない。自然密着度は増し、左肩にかかる愛香のツインテールの感触に、思わず俺は動どう悸きを高鳴らせてしまう。
　ああ駄目だ、こういうところを理事長は見ているはずだ。人助けの最中にツインテールに惑うとは何事か、と。
「ちょっ……いつまで総二様に〝戸板〟を抱えさせておくつもりですか！　かかってきなさい、私は逃げも隠れもしませんよ‼」
　己おのが両りよう掌しようを胸へと勢いよく振って挑発するトゥアール。戸板にかかってこいと誘うのはとんちじみた光景だが、愛香はまだ無反応だ。
「貧乳！　アンノウンバスト！　フォトプリント用紙みたいな胸！　涅ね槃はん寂じやく静じようおっぱい‼」
「ねはん……？」
　未知の領域に突入したトゥアールの罵ば倒とうに首を傾かしげる俺。

　後ろからひょいっと進み出た母さんは、凜り々りしい薄笑みと共に解説してくれた。
「涅槃寂静とは無量大数の対を為す、マイナス方向で最高の単位よ。百万分の一を表すナノを千兆倍しても足りなくて、さらにそこから百倍以上するぐらい小さいの」
　百万×千兆×百倍……!?
　さすがに暗算しても〇が何個かわからない……。
　千兆倍とか桁けた違いな数が大好きそうな母さんは、余裕で未知の単位を諳そらんじてみせた。多分学生時代に覚えて、嬉き々きとして使っていたのだろう。
　ここまで言われて反応しないのだから、愛香はかなり疲れているに違いない。
　愛あい香かの頭上に枠をブチ抜いて上昇し続けるゲージを幻視したが、決して怒りを限界以上にチャージしているわけではないはずだ。
「おのれそうやって殿方を寝室に連れ込む黄金パターンですね……させません!!」
　トゥアールは決死の形ぎよう相そうで愛香の腰にしがみつく。
　いつもならばシマウマじみた後うしろ蹴げりでトゥアールを天高く飛ばしているであろう愛香が、腰をよじるだけで反撃しない。やはり疲れているのか。
「ひっ……やめてよ胸が当たる!!」
「私だって愛香さんのお尻になんて胸押しつけたくありませんよ！　慧え理り那なさん、イースナ！　来てください！　みんなで愛香さんを引っぺがすんです!!」
「よくわかりませんけれどわかりましたわ!!」
　ファジーな決断も声高に、慧理那がトゥアールの右足に組み付く。
「……トゥアールさん、ふとももちょっとぷにってしてる……」

　続いてアイドルが、スキャンダラスな暴言とともにトゥアールの左足に組み付く。
「ブン殴りますよイースナ！　これが殿方が喜ぶベストな肉付きなんです！　あなたのひょろっちい足なんて、小ちっちゃい子好きしか喜びません!!」
　それに対するトゥアールの反撃は、割りとブーメランな気がした。
「ぐぐ……！」
　ラグビーのスクラムのように連なる少女四人。
「は、離れなさいよ、そーじが痛そうでしょ!?」
「ええ、どこにもクッションがない人がそれだけ密着していればそうでしょう！　さあお離れなさい、永遠に硬き者ノークツシヨン!!」
　神話じみた二つ名を授けられながらも愛香は渾こん身しんの力を込めてしがみつき、俺の骨が軋きしむ。
　ここまでの膂りよ力りよくが残っていながら、何な故ぜ愛香は普通に立つことはできないのか。人体の不思議に俺は翻ほん弄ろうされる。
　女の子とはいえ四人分の体重が俺の左肩と腕に集中し、さすがにバランスを崩しかけた。
「メ、メガネ……体重ちからを貸して……!!」
　鮫さめのゆるキャラ・メガネドンが、困惑したようにヒレで後頭部を掻かく。
「ウチ、五〇〇キロ近くあるけど、総そう二じ君大丈夫かな……？」
　大丈夫やないで。肩から先が千ち切ぎれるで。
「うふふ、愛香ったら、見せつけてくれちゃって」
　恋れん香かさんがほえほえと柔和な笑いを浮かべている。おっとりしていても、さすがは愛香のお姉さんだ。人体が破壊される瀬戸際を目撃しながら、いささかも狼狽うろたえない。
　自分の腕が取り外し式に進化する限界で戦いながら、俺は桜さくら川

がわ先生の先導で、部屋へと案内された。
　四枚開きの襖ふすまには荘そう厳ごんなツインテール状の枝し垂だれ花が描かれており、特別な部屋であることを窺うかがわせる。
「ここは男子部屋と女子部屋のどっちですか？」
　桜さくら川がわ先生と一緒に先行した理事長へ質問する。
　理事長は着物の裾すそで口元を隠し、目元の綻ほころびだけを俺に見せた。
「もちろん、男女各一部屋ではありません。婿むこ殿とわたくしたち全員で一部屋ですわ」
　体調が回復したらしい愛あい香かが説明に敏感に反応し、理事長へと滑り寄った。
「それって、そーじも一緒の部屋ってことですか⁉　さ、さすがにまずいんじゃ……」
　愛香は後ろの女性陣に視線を送り、再び理事長へと振り返る。そしてそれを二度三度と繰り返す。妙に肩をくねらせているのが、愛香らしくない。
　そんな愛香の控え目な抗議を見て、トゥアールは虚こ空くう目掛けて唾だ棄きした。
「さあ慧え理り那なさん、恒例のレッスンです。ああしてとりあえずいい子ぶって、一回止めたというポーズだけはしておく、いやらしい女のやり口です」
「津つ辺べさん、まずいと仰おつしやりつつ笑ってらっしゃいましたわ……」
　トゥアールは度たび々たび愛香の言動を教材に慧理那へと何かを伝授しているようだが、よくわからない。
「理事長、女子は男との相部屋は嫌だと思うんで、すみませんが俺だけ別の部屋を用意してもらえませんか？」

　俺がそう意見した瞬間。
「嫌じゃない！」
「嫌じゃないです!!」
「嫌じゃありませんわ!!」
「嫌じゃ、ない……です」
　語尾やテンポや声量がてんでばらばらだが、愛香とトゥアールと慧理那とイースナは揃って身を乗り出し、気遣いの言葉をかけてきた。
　愛香はついさっき、理事長にまずいと言っていたのでは……⁉
「総そう二じ様！　家族旅行で別部屋は寂しいじゃないですか。……出発の時、私を家族と言ってくれたのは……嘘うそなんですか？」
「！　そ、そうだな……その通りだ。ごめん、トゥアール」
　トゥアールの切せつ々せつ偲し々しの訴えに、考えを改める。
　そもそも、保護者同伴なんだ。男女で寝室が同じでも問題ないさ。

「フッ……格の違いを思い知りましたか蛮族。これが女のテクニックというものです」
「格の違う浅はかさねあんたは！　そうやって家族を強調すんのはそーじに女って意識されなくなる諸もろ刃はの剣つるぎだってわかんないの⁉」

　愛あい香かとトゥアールが小声で言い合っているので、俺が先に部屋に入らせてもらった。
　部屋内の輝きがまた、際立っていた。
　長年受け継がれた温泉宿でありながら、敷き詰められた畳たたみは新緑を思わせる真新しさ。
　ここにもツインテールの掛け軸と、上げ間には兜かぶと飾りのようにツインテールを象かたどった木彫りが飾られている。

　窓からは山々が一望でき、展望区画もゆとりがある。
「仕切りの襖ふすまを全て開ければ、最大五〇畳までは広げられるそうだ」
　桜さくら川がわ先生は皆の荷物をてきぱきとまとめながら、部屋の解説をする。
「けれど、広げずに皆さんと近くにいる方が楽しいですわ！　修学旅行みたいで!!」
　テンションが高くなっている慧え理り那なを見ると、微笑ほほえましくなる。何だったら今夜、枕投げでもしてみたいな。
　………………あ、駄目か、女性陣に一人だけ突出した豪腕投手がいるから……。
　修学旅行の話題に、トゥアールが興味を示した。
「陽よう月げつ学園の修学旅行は、二年生の時に行くんですか？」
「いいえ、うちは三年の春ですわ」
　答える生徒会長。高校の修学旅行は二年が多いが、うちはエスカレーター校なこともあってか小中高等部全てで、修学旅行の時期は最高学年の春で固定だ。
　何となく俺は察した。トゥアールは、自分の世界で修学旅行に行ったことがないのではないかと。
「三年になったら一緒に行こうな、トゥアール」
　トゥアールは俺の提案に慌てふためき、
「どうしたんですか総そう二じ様⁉　今日はいちいちかっこよすぎて、私のパンツの替えが足りなくなりそうなんですけど⁉」
「だから何な故ぜパンツを替える……⁉」
「…………わたくしも、観み束つか君たちと修学旅行に行きたかったですわ……」
「慧理那は来年なんだな」

　しょんぼりする慧理那を、苦笑しつつ慰なぐさめる。
「そ、それを言ったら、私……総二さんと同じ学校ですら、ない……」
「イースナは、一人だけ三つも年が違うからなあ……年齢を誤ご魔ま化かして編入しない限りは、小等部になっちゃうし、仕方ないよ」
　俺がそう言うと、イースナがちらりとトゥアールに視線を送る。やはり、同郷でありながら俺たちと同い年のトゥアールが羨うらやましいのだろうか。
「ま、慧え理り那なもイースナも、こうしてみんなで旅行に来たりすることは、これからもできるんだしさ」
　イースナのツインテールに触れて慰なぐさめの言葉をかける。イースナの髪、また伸びたな。
　嬉うれしそうに頷うなずくと、イースナはだらしないくらい口元を緩ませ、自分のスカートに手をかけた。
「……ぱんつ、あげます……」
「お前に至っては何な故ぜパンツを渡してくる⁉」
　そこではたと気づく。部屋に入り、コートを脱いだイースナには、違和感にも似た新鮮さがあった。
「今日はジャージじゃないんだな」
　白黒ギンガムチェックのアウターに、少しだけフリルがあしらわれたミドル丈のスカート。
　アイドル衣装をおとなしくしたような私服だ。
「ほんとだ。あんた、あたしたちと一緒にそーじを尾行……もとい、一緒に出かけた時も、ジャージだったのに」
　腕組みをする愛あい香かは、ホットパンツにニーソックスの、慣れ親しんだコーディネート。喫茶店でのお嬢様スタイルは、一日限りの例外だったようだ。
「い、一応……はねむーん、だから……おめかししました」

「頑張ったなあ、イースナちゃん……」

　和風の部屋で一際異彩を放つ鮫さめの着ぐるみが、ヒレで目元を拭ぬぐう。

　見た目のインパクトに騙だまされてはいけない。彼女は、この場の誰だれよりもおかんだ。

　そしてうちの母さんは、俺たちのやりとりを見て嬉しそうに頷いている。

「よしよし、総そうちゃんったら迫り来る女の子たちを的確に捌さばいているわね、ハーレム適性バッチリ。母さん嬉しいわ!!」

　捌く……!?

　妙な企みを感じないでもないが、母さんたちが楽しんでくれているなら何よりだ。

　女子が荷物を解ほどいている間に、俺は窓辺に移動した。

　部屋の窓から山々を一望し、俺はしばし物思いに耽ふける。

　修学旅行は一年半後か。今話題に出るまで、考えもしなかった。

　最近、先のことを考えることをしなくなったのは……日々が忙しく、楽しいからなのか。

　それとも—。

　俺たちは一年半後、高校三年生の春……一体何をしているだろうか。

◇

　夕食前、早速俺たちは温泉を堪能させてもらうことになった。

　男の俺がいるとしづらい準備があるだろうと、先に出て浴場へと向かう。

　脱衣場の入り口の前に立つと、ちゃんと二つ並んだ「男」「女」の暖の簾れん。俺はほっと胸を撫なで下ろした。
　部屋が一緒だったのでどうなることかと思ったが、温泉はちゃんと男女別のようだ。
　中に入り、棚に置かれた編み籠かごの中に脱いだ衣服を入れていく。
　いい香りの白木戸を開き、温泉を視界に収めると、思わず感嘆が零こぼれた。
「おお……」
　透明な湯面が、地上に抜けるような空を映す。
　雄大な温泉は、訪れる者を歩みながらにして青空への旅へと誘いざなうようだ。
　立て札を見つけ、効能を確認する。
　筋肉痛。関節痛。疲労回復。体力増進。精力増大。催さい淫いん作用。ツインテール美化。
　首を傾かしげるような項目もあるが、この中で俺に必要なのは、ツインテール美化だな。
　生身のツインテールは俺にはないが、心のツインテールを磨くにはうってつけだ。
　漂う湯気に包まれるだけで、早くも身体からだがぽかぽかしてくる。これは効きそうだな。
　かけ湯をした後、湯に足を差し入れる。程よい熱さだ。
　湯面に波紋を起こして、青空のアートを崩してしまうのがもったいなく思える。
　身体に染みる熱を堪能しながら湯を分け入り、端はしの積み石に背中を預けて身を沈める。
　そこで俺は、目を疑った。
　俺が出てきた脱衣場の出入り口の横に──もう一つ、シンメトリーを為

なす出入り口がある。
　胸騒ぎに襲おそわれ、俺が立ち上がろうとした瞬間。
　勢いよく、もう一つの扉が開かれる。
「わーーーーーーーーーーい混浴
わーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーい!!」
　一いつ糸し纏まとわぬトゥアールの艶つややかな裸身が、視界いっぱいに飛び込んできた。
「うおあああ!!」
　今日この日まで鍛きたえられてきた俺の全肺活力で、絶叫が放たれる。それは昇竜となって、秘湯を望む大空へと衝つき昇っていった。
「うわわわわ……」
　慌てて背を向け、石垣とにらめっこする。
　やばい、完全に不意打ちだった、全部見ちまった……!!
「こ、混浴だなんて知らなかった！　タオル！　タオル巻いてくれ!!」
　トゥアールは恥ずかしがることもなく、陽気に答えた。
「すみません、ここに来る途中で寒そうにしていた地蔵たちに被かぶせる笠かさが足りなくて、私のバスタオルを被せてきました」
　俺の知る限り、トゥアールが入浴する時バスタオルで身体からだを隠したことなんて、一度もないんだが……元からないバスタオルを被せて、地蔵は恩返しに来てくれるのだろうか……。
「他にお客さんがいるならともかく、ここにいるのは私たちだけ。問題ありません!!」
「俺がいるだろうが俺が！　男が!!」
「総そう二じ様！　家族旅行で別風呂は寂しいじゃないですか。……出

発の時、私を家族と言ってくれたのは……嘘うそなんです──」
「家族でもこの年なら風呂は別々だろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
あまりに狼ろう狽ばいしていた俺は、トゥアールの天丼を聞き終わる前にツッコむという悪手を見せてしまった。
どんな理不尽でも、相手の言い分を聞いてからツッコむ──。
日々心がけてきた信条が……くっ……。
「かけ湯ー、かけ湯ー。はい、お湯がトゥアールちゃんの鎖骨から胸の膨ふくらみを滑り落ちてお腹を濡ぬらし、そしてもっと下へ──」
後ろを向いた俺に実況中継するトゥアール。聞こえよがしな飛び沫まつ音に、俺は身を竦すくませる。
「いけません、いけませんよ！　規則は守っていただかなければ」
そこへ、今しがた入ってきたらしき理事長の厳しい声が聞こえた。トゥアールを叱しつ責せきしているのだろう。ここぞという時頼りになるのはやはり、大人の常識だな。
俺はトゥアールを目にしないよう半身をひねり、理事長へ声をかけようとする。
「バスタオルを巻くのはルール違反ですわ、津つ辺べさん」
また理事長が全裸だああああああああああああああああああああああああああああ!!
「あ、あたし混浴なんて聞いてません……タオル無しじゃ無理です……！」
叱責はトゥアールに向けてのものではなかった。むしろ、隣でバスタオルを巻いて胸下から膝ひざ上までを隠している愛あい香かを、校則違反の生徒を咎とがめるような厳しさで戒いましめている。
「理事長まで！　隠して！　隠してください!!」
眼前に加積されてゆく裸体。あまりの心細さに、俺は背後の石に抱き

ついてしまった。
「わたくしはすでに一度婿むこ殿に裸を強引に見られてしまっていますもの……うふふ、今さら隠し合う仲ではありませんわよね？」
「強引に見られた、って言った⁉　理事長の中で歴史が大きく改変されてませんか⁉」
　あのね、いくら理事長が美人でもね、友達の母親の裸を見るって言葉にできない気まずさがあるよ。それが二度目だよ。ニューロンがバタバタと死んでいくよ。
「婿むこ殿、神しん堂どう温泉は婚前婚後の男女が訪れる秘ひ湯とう。混浴は当然ですわ」
　ただ背中を向けていても、知らぬ間に状況が悪化しそうだ。俺は目を手の平で覆おおって振り返る。そしてなるべくツインテールだけが見えるように指に隙すき間まを作り、理事長に談判した。
「せめてバスタオルを！　水着とか、湯浴み着でもいいですから‼」
　混浴が不可避なら、男女ともに少しずつ気を使い合うことが大事なはずだ。
　だが、俺の妥協案は毅然といっつ蹴しゆうされた。
「なりません。バスタオルや水着をこの神聖なる神堂温泉の湯につけることは、神堂家六〇〇〇年の歴史において絶対の禁きん忌きとされていますわ」
「そうなんですの⁉」
　慧え理り那なはやってきて早々、理事長の告白に驚きよう愕がくしていた。裸だが一応、上も下も手で隠そうとはしているようだ。六〇〇〇年はだいぶ盛ったなあ……。
　未成熟な裸身を守ろうとしてか、慧理那のツインテールが揺れている。
　その後ろには、口を固く引き結んだ桜さくら川がわ先生。やはり裸

だ。
　しかも桜川先生の方が恥ずかしがっているようだ。いつもの逆で、慧理那の背中で自身の身体からだを隠すように身を縮めている。
　それでもそのツインテールから下の肩口、腰のくびれ、脚──桜川先生の全てが俺の目に飛び込んできてしまった。
　ああああああもう、どうすればいいんだ、明日からどんな目で桜川先生を見ればいいんだ!!
　その前の慧理那に至っては、俺の困惑を感じ取ってか、身体を隠している自分の手をどけ、健けな気げに微笑ほほえみかけてきた。真っ白な肌が、湯に浸つかる前からすでに紅潮している。
「下着を見られるまでなら、何とか平気になってきましたので……今日は、もう少し頑張ってみますわ！」
「いや頑張らなくていいんだ！　その羞恥心おもいは色いろ褪あせず大切にしてくれ!!」
　早くも喉のどがからからに渇き、俺の訴えはどんどん声量を失っていく。
　見なさいあれが自慢の娘ですとばかりに慧理那を指差し、理事長は愛あい香かに捲まくし立てる。
「温泉に浸かるならば、一いつ糸し纏まとわぬ姿。身につけるのが許されるのは、ツインテールを結ぶためのもののみ。それはこの神堂温泉において決して揺るがぬ定めなのですわ!!」
「さ、定め……ルールなら、仕方ないのかな。何だろう……湯気で身体がぽかぽかして……」
　俺と同様に愛香も、湯気を身に受けるうちにぼーっとしだしている。理事長の熱弁と、このやけにぽかぽかする湯気の合わせ技で、正常な思考が塗り込められていくんだ。
「諦あきらめるな愛香！　だったらめっちゃくちゃ長い包帯とかでツイ

ンテールを結んで、そのまま身体もぐるぐる巻きにすれば……!!」
　苦悩する愛香を余よ所そにのんびり歩み出た、イースナとメガネドン。イースナはやはり裸だ。
「わあ、ひ、広いよ、メガ・ネ……」
「せやなあ、しかもいーい天気や」
　よ、よし……この組み合わせなら、銭湯で親に連れられている小さい女の子を見るようなものだ。彼女は、おかんが放つ微笑ほほえましさという名の結界フイールドに守られている。
　そんなイースナに視線を向ければ、他の女の子よりは後ろめたくないはずだ。
　じゃあ、今からは集中的にイースナの裸を見るか。
「……………………って何をしてんだ俺は後ろめたいだろうがああああああああああああ!!」
　セルフツッコミも猛たけ々だけしく、俺は頭を掻かき抱いだいて身み悶もだえ、水みず飛沫しぶきを巻き上げる。
　せめてメガネドンだろう、何で流れるようにイースナの裸に目線を合わせようとした!!
　俺は些細なツッコミ所を見つけて話しかけることで、罪悪感から逃れようとした。
「イースナは、眼め鏡がねかけたまま入るのか……？」
「眼鏡の曇りは、心の曇り……。私の眼鏡は、決して曇りません……。ラーメンを食べる時も、お風呂に入る、時も……。そ、それより、総そう二じさん……私も、メガネドンも、裸です……」
　イースナに裸だと強調され、俺はギクリとする。
「うちいつも通りやで⁉　やめてや、普段から裸みたいやん⁉」
「そ、総二さん……私の裸、見たことを問い詰めた時は、『レッドに変身してたからノーカンにできないか』って言った……その時々で、都合

の、いいように解釈するのは、ずるい……」
　俺の正体を知った時はあれほど「自分の裸を見た男」と恨んできた……羞しゆう恥ち心が普通だったはずのイースナも、今や堂々と裸だ。
　こうなったら、今回もイースナ言うところのノーカン戦法だ。どうしても混浴が避けられないなら、テイルレッドに変身して俺が女の姿になれば、少しはみんな気が楽になるだろう。
　いや、愛あい香かと桜川先生以外、すでに全員気を楽にしている気がするが、とにかく俺が困る。
　俺が最終手段に及ぼうとした矢先、恋れん香かさんの声が聞こえた。
「やっほ、総くん」
　手を振りながら遅れてやってきた彼女は、当たり前のように一いつ糸し纏まとわぬ姿だった。
「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ!?」
　レッドの正体が男だと目撃したティラノギルディのような甲かん高だかい悲鳴を上げてしまう俺。
　小さい頃から見てきた隣のお姉さんの柔肌が、俺の動どう悸きを急激に高める。
　うおおおおおおおおおお恋香さんがいるから変身して逃げることもできねえええええええ!!
　そもそもこの温泉……やっぱり何か変だぞ。浸つかれば浸かるほど、出ようという意志が薄らいでいく。ツインテール美化成分が、俺に効き過ぎているのか!?
「ああっ……未み春はる様!?　何なに故ゆえにバスタオルを!?　お取りくださいまし……はあはあ」
　理事長の悲痛な声に反応し様子を窺うかがうと……母さんは、何とか

タオルを巻いてくれていた。
「私は裸で構わないけど、総ちゃんが母親の裸見て素に返ったら困るから、ね？」
　理事長は諦あきらめず、母さんのバスタオルを取ろうとしている。頑張ってくれ、母さん……。
「……ト、トゥアールさん……やはり、何も隠さず裸は、恥ずかしいのでは……」
　普段あまり面識のない恋れん香かさんの裸を見て一気に現実に引き戻されたのか、慧え理り那ながか細い抵抗を試みる。それを返す刀で切って落とすトゥアール。
「慧理那さん、こう考えるんです。裸の女九人が横一列に勢揃いしたこの光景。あたかも、ヒーロー大集合映画で正義の味方が勢揃いする見せ場のようではないですか!!」
「はっ……クライマックスですわ！　一番いい場面の一つですわ!!」
「全員裸のヒーロー映画があるかああああああああああああああああああああああああ!!」
　振り返ることもできず、俺は囲いの竹の柵さくに向かって絶叫した。すまん、竹。
　あと、ちゃんとカウントしているのは優しいが、勢揃いしたうちの一人は着ぐるみだぞ。
「お、お姉ちゃんまで……恥ずかしくないの!?」
　一片の理性を振り絞って問う愛あい香か。大人の余裕たっぷりの恋香さんは、やんわりと窘たしなめた。
「みんなと同じよ。総そうくんは家族みたいなものだし、恥ずかしくないわ」
　恋香さんがあまりにも自然にそう言うものだから、俺もいよいよ自分のこだわりの方が間違っているように思えてきた。

　みんな、家族だし普通だと思っている。俺が頑かたくなに嫌だ、隠せ、と喚わめき立てるのは、旅行を楽しんでいるみんなに冷や水をかけているようなものではないか。
　というか、年頃の女の子含めて女性陣がみんなこうなのだから、俺が間違っている……いや、古いのではないだろうか。今時の女の子は混浴ぐらい平気なのに、前時代的な倫理観の俺が白けさせてしまっていると──。
「いや、やっぱり裸で混浴は駄目だ！　こうなったら、竹でパーティーションでも作っ──」
「さあさ、風か邪ぜ引いちゃうわ、みんな早く温泉をいただきましょ」
　俺の提案も虚むなしく、母さんの音頭で、皆かけ湯をして温泉に入り始める。無情。ただ無情。
「脱衣所を出た直後から、効能を含んだ湯気で蒸らすようにムラムラさせて、蟻あり地じ獄ごくのように湯に引き込み、逃さない……。発情システムが完成されたいい温泉ね、えむぴー」
「即座にこの温泉の恐ろしさを看破されるなんて……さすがは未み春はる様ですわ！」
　今、蟻地獄とか温泉の恐ろしさとか言わなかったか、マザーズ。
　異世界でロエルのお城の浴場で慧理那と混浴した時は、湯が乳白色だったので温泉に浸つかりさえすれば身体を見ずに済んだが、今回は無色透明。みんなの肌がばっちり見えてしまう。
　けど、母さんの言う通りだ。トゥアールなんて湯をかぶった状態でしばらくみんなと会話して、寒かっただろうに……。罪悪感が僅わずかに羞しゅう恥ちを中和し、トゥアールへ視線を向ける。
「あはぁ……いいですねぇ、総そう二じ様のその赤面顔！　私も身体の奥から温泉が湧わき出ます!!」
　挫くじけそうな時、君の笑顔が俺を強くしてくれたのに。

ねえ、どうして？　今君は、全裸で邪悪に笑っているの？
――弱り切った俺の心の独白は、バラードじみたセンチメンタルを帯び始める。
「私と慧え理り那なさんとイースナはすでに総そう二じ様に全裸を見られたトリオですので、愛あい香かさんのようなザコには関わっていられません。さあ、総二様を囲みますよ！　全裸で!!」
「んなっ……！」
一人だけバスタオルをしたまま不動の愛香に、トゥアールが露骨な挑発を仕掛ける。
「よおっし！　今日はみんなで総二様のＭＡＸを引き出しますよ!!」
「ＭＡＸ!?　観み束つか君のＭＡＸがとうとう判明しますのね!!」
すまん、愛香。もういいかな、いいよな、恋れん香かさんの前で変身しても。
……いやいや、とにかく、愛香が裸が嫌なら、それは尊重されるべきだ。指の隙すき間まから覗のぞく目線で、俺は愛香にアイコンタクト……もとい、ツインテールコンタクトを試みる。
幼おさな馴な染じみの俺たちだからこそ可能な意志疎通だ。
もっとも見知った愛香のツインテールへ、俺は念を送る。
恥ずかしいのが普通だ。周りに合わせなくていい。気にせずそのまま入れ。……と。
「……！」
愛香は大きく目を見開く。そのツインテールが、敏感に反応してくれたのを感じるぞ。
頼もしさに胸を熱くする俺へ……愛香は悩ましげな視線を送り、しなを作り始めた。
「そ、そーじ……そ、そんなに……私の裸……見たいの……？」
……………………全ツインテールの頂点に立つ、究極のツインテール

とは何だったのか。
　ツインテールへのコンタクトに失敗し、無力を噛かみしめる俺。
　愛香は深呼吸し、
「いいわよ……？　む、昔はよく一緒にお風呂に入っちゃちゃない」
　吹っ切るように快活に発せられた言葉は、半ばで頓とん挫ざした。
「ゃーーーーーーーーーーーーーーーーー噛んだーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
　愛香は突如として両手で顔を覆おおい、石の床の上を豪快に転がる。
　そのままローリング入水を果たした愛香の顔は、見る見る赤らんでいった。
「……う、うう……お湯に入るともう、一気にぽわぽわしてくる……」
　愛香は目をとろんとさせて、あれほど縋すがっていたバスタオルをあっさり取ってしまった。
　失敗に鞭むち打たんと、バタフライで愛香の元へと急襲し煽あおるトゥアール。
「愛香さん愛香さん愛香さん！　ねえ！　今の台詞せりふ練習してたでしょう！　ずっとお部屋で練習してたでしょう！　昔はよく一緒にお風呂!?　ホへへへその後に『あの頃と胸の大きさ変わってないからいいわよね』とでも入れたらどうでうべあああああああああああああ!!」
　愛香のアッパーで、トゥアールが間欠泉のように多量のお湯とともに巻き上げられる。
　全裸で、空中で、でんぐり返し──ものすごい見えてはいけない体勢になっている。
「してたわね、練習」
　今、恋香さんがさらっと肯定をしたような……。当の愛香もトゥアールも、気づいていないようだが……。
「ああ、吸う……着ぐるみが激しく水を吸うで、イースナちゃん……」

メガネドンと温泉との戦いの火ひ蓋ぶたが切って落とされていた。ぶくぶくとコミカルに沈んでいく姿は、唯一の癒いやしだ。

そうこうしているうちにとうとう、女性陣全員が俺の周りを取り囲むように迫ってきていた。

襲おそい来る全裸。俺は、羞しゆう恥ちの果てに意識が異次元の彼方かなたへと霧散してくのを感じる。

あれ──そもそも、全裸って何だっけ？　全裸は全裸で全裸が全裸な──────

……やばいやばい。ゲシュタルト崩壊しかけていた。

俺は何とかみんなのツインテールに意識を集中し、恥ずかしさを薄れさせようと努める。

母さんとトゥアール、恋れん香かさんは髪をアップにしてまとめているが、他のメンバーは皆ツインテールを湯につけている。これは理事長の推薦する入浴方法だ。

桜さくら川がわ先生が皆に温泉の効能を説明する。

「神しん堂どう温泉はツインテールのパサつきを防止し、キューティクルを形成、ハリのあるさらさらの髪質にする。そしてツインテールを通して地肌を健康に保つのだ」

ツインテールが肩上でまとまっている桜川先生は、深めに湯に浸つかって毛先をつけるようにして温泉の成分を浸透させているようだ。

「えむぴーのお肌とかツインテールが今でも綺き麗れいなのは、この温泉のおかげだったのね」

母さんが隣の理事長を肩で軽く突く。理事長は普段のキリッとした面おも持もちからは考えられない嬉うれしそうな顔をしている。

続きを説明しようとしていた桜川先生は、俺と目が合うと顔を逸そらしてしまった。

「あ、あまり裸を見ないでくれ……恥ずかしい……」

　唯一テンションが俺と同じ桜川先生に、安心感を覚える。
「何で今日に限って殊勝な態度なんですか！　海では年とし甲が斐いもなくあんなに大胆な水着で誇らしげにしていたのに!!」
　水みず飛沫しぶきを立てて立ち上がろうとするトゥアール。
「うっかり立ち上がったようなフリしてそーじに裸見せんじゃないわよ!!」
「私スタンダップ総そう二じ様の総二様もスタンダップォポポポポポポ……」
　愛あい香かに腕を引き掴つかまれ、自作のラップも半ばに口まで湯に浸からせられていた。
「いや、水着はともかく裸はな……若い連中と違って、自信満々で見せられんよ……」
　俺の視線から逃れるように身をよじり、肩越しにしょんぼりとした目で見てくる桜川先生。
　毛先から水を滴したたらせるツインテールが色っぽくて、俺はどきりとしてしまった。
「尊みこと！　何を弱気な！　あなたはこの地上で慧え理り那なの次に美しい女性なのですよ！　堂々と胸を張りなさい！　そして見せなさい!!」
　理事長は堂々としすぎだと思うが、励ますことはいいことだ。
　愛あい香か、慧え理り那な、トゥアール、イースナはどんどん俺に近付いてくる。見ないようにするにも限界があるというのに。
「総そう二じ様ぁ、ほらほら、私の胸、ぽよんぽよん浮いてますよ～」
　重力から解放されたトゥアールの胸が、水面に浮かぶ。光を受けて煌きらめくトゥアールの肌は、本当に綺き麗れいだった。綺麗だけど……だからこそ、直視しちゃ駄目なんだ!!
「……女の子の身体からだを見て、どきどきしますか？」

　囁ささやくように問いかけてくるトゥアール。
「そりゃあ、するよ……!!」
　いくら家族でも……仲間でも、トゥアールたちは皆、学園でも上から並ぶほどの美少女だ。意識して、緊張しない方がおかしい。
「よかった……わたしも、総二様の役に立てて」
　そんな俺の態度に、トゥアールは胸を撫なで下ろした。というか丹念に、見せつけるように、胸の形を誇示するように、自身の胸を撫でた。
「私はツインテールを見せて総二様を喜ばせることはできませんが、こうして女の子を意識させることができるなら、お役には立てているんですよね」
　こんな悲しい顔をさせていいのか。
　やっぱりトゥアールは、俺のためを思って……俺がツインテールを暴走させないように、恥ずかしいのを我慢して裸の付き合いをしようとしてくれているんじゃないか。
「そんな……俺が悪いんだ。わかった見る！　裸を見るよ!!」
　瞬間、トゥアールの双そう眸ぼうが邪悪に発光した。
「ぐへへへへへへへこの日のためにシナリオを用意したんです……一人でプロットを作り、一人で編集会議を行い、一人で執筆して一人で校閲し、一人で再校を出し、そして今ようやく総二様の前でリリースしました！　完かん璧ぺきです!!」
「回収処分ね」
「ぎゃおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお邪悪な権力が出版の自由を奪う!!」
　頼む愛香、じゃれ合うのはいいがトゥアールの上体を反そらすような関節技はやめてくれ、眼前にモロなんだ!!
「騙だまされちゃ駄目よそーじ！　ほんっっっっっとあんたはすぐ雰ふん囲い気きに流されるわね!!」

白い肢し体たいを惜しげもなく駆動させ、愛香がトゥアールを遮さえぎる。
「あっ……だ、駄目！　見ちゃ駄目!!」
そしてすぐ、自分の身体を隠す。そんな愛香の葛かつ藤とうに、トゥアールが愉ゆ悦えつの表情を浮かべる。
「見ちゃ駄目も何も見る物が何も無いでしょ愛香さんは！　まあギリギリ下だけは──」
「だから立つなっつってんでしょ!!」
水みず飛沫しぶきを上げて揉もみ合う二人に触発されてか、慧理那もぎゅっと目を閉じて立ち上がった。
「わ、わたくしも……お見せできるものはありませんけれど……せ、せめてお尻なら……」
「うわああ、ま、待て慧え理り那な！」
慧理那は回れ右をして、俺にお尻を見せてきた。
よくも悪くも直近に戦闘したエレメリアンの属性の影響を受けすぎるんだ、慧理那は……!!
「じゃあ、私は……お尻の前を、見せます。……ドＭさんと、お揃いだけど、綺き麗れいだか──」
「総そう二じ様はそっちの方向に目覚めさせはしません!!」
イースナに抱きつくように覆おおい被かぶさって食い止めるトゥアール。
湯に沈む直前、イースナは本当に嬉うれしそうだった。そしてこれだけ飛沫しぶきを上げていても、理事長もむしろ歓迎とばかりに見守っている。
確かに、みんな裸なのは恥ずかしい！　それは、揺るがない事実だ。
でも、みんな本当に楽しそうだ。家族旅行だから、これぐらい賑にぎやかな方がいいのか……!?

「……ってか愛あい香かさん……効いてます？　これ……」
「効いてきてるわよ……だ、だんだん全裸に抵抗無くなりかけて、やばい……かも」
「世間で言う媚び薬やく……なんて、演技ですからね……プレイの一環での効いたフリです……なのに、なんで本当に効く温泉掘り当ててるんですか神しん堂どう家は……ああもうムラムラする……!!」
　ひそひそ会話するトゥアールと愛香の目が、こころなしか血走っているような……。
　いや、二人だけじゃない。みんな、思い思いにそわそわしている気がする。
「そ、総二様も……何かこう、身体からだの一部分が制御不能になったりしてませんか……？」
　……一部分が制御不能？
　トゥアールの質問に首を傾かしげていると……突然、左手首が灼やけるように熱くなった。
「なっ……」
　驚いて持ち上げそうになった左腕を、慌てて湯に沈め直す。
　そこには──ツインテイルブレスが実体化していた。
　ソーラの願いで進化した、俺自身のツインテール属性そのもの……テイルレッドに、新たなる力をもたらす第二のブレスが。
　右腕のテイルブレスは可視化されていない。制御できなくなっているのは、こちらだけだ。
　湯面に光が漏もれてしまっている。このままでは恋れん香かさんに気づかれてしまうだろう。
「っあああああああああああああああっと足が滑ったー!!」
　いち早くそれに気づいた愛香が、俺に覆い被さるように左腕に抱きついてきた。

平坦……いや失礼だろう、なだらか……いや失礼だろう、パーフェクトフラット……いや失礼だろう、とにかく愛香の身体の感触が……じ、直じかに、左腕に伝わる。
「あら、愛香ったら大胆♪」
　囃はやすような恋香さんの声。だが俺たちは混乱していてそれどころではない。
「な、何やってんのよ馬ば鹿か！　早くしまいなさい！」
「そ、それが俺にも何が何だか……」
「ええっ⁉」
　小声で会話する俺たちの元へ、トゥアール、慧え理り那な、イースナも飛沫しぶきを上げて迫ってきた。
「わたくしも足が滑りましたわ、こてん、ですわ」
「ちょっと待て慧理那あのポーズは駄目だぞ！　裸であのポーズは絶対駄目だぞ‼」
　こてん、という擬音がもたらすポーズがあのW字開脚で固定されてしまっているので、俺は困惑をなお上回る焦燥で慧理那に注意を促うながす。
　幸い……でもないが、慧理那は俺の右腕に抱きつき、イースナは俺の真正面に座るように腰を下ろした。
「待て待て待て待てイースナ！　離れろ！　裸でこの体勢はまずい‼」
「だ、大丈夫、です……こ、これ、『三大エロゲーで多いポーズ』……見慣れてます」
　見慣れてるからって実践するなよ‼
「ああっ……どこも空いてないじゃないですか！　わかりました！　じゃあ私はシュノーケル着けて潜水します！　イースナのさらに下、総そう二じ様の股またを隠すのは私に任せてください‼」
　愛あい香かの遠投で存在もろともお隠れあそばしたトゥアール。

　みんなが必死になって隠してくれているのに、俺のイレギュラーは収まらない。どれだけ念じても、ツインテイルブレスが消えないのだ。何で……戦闘中ならともかく、今⁉

『ばかっ！　総二のうわきものー‼』

　脳内に響く、可愛かわいらしく拗すねた声。ツインテールの精神世界で会った、ソーラの声そのものだ。……げ、幻聴だよな……。
　ツインテイルブレスが不意に実体化したから、ソーラを連想してしまったんだろう。
「尊みこと！　あなたも彼女たちのように抱きつくのです、まだ婿むこ殿のお顔が空いていますわ！」
「そ、そんな……間近で裸を見られてしまいます……」
「どの道これから毎日見られますわ！　さあ、慣れるのです！」
　桜さくら川がわ先生が理事長と何か言い合っているが……だんだん、声が遠くなってきた。
　長湯に加え、裸の女子たちに密着され、頭がぼうっとしてきたのだ。
「収まれ、収まってくれ……‼」
　念じるように懇願し、下を向いて腰に添えた左手首を見やる。駄目だ、ツインテイルブレスが収まる気配は一向にない。
「……うふふ、やっぱり総くんも男の子ね。愛香、ちゃんと収めてあげなくちゃ」
「あたしもさっきから収めようとしてるんだって‼」
「もっと色々しないと、収まらないんじゃない？」
　俺の苦く悶もんの声を聞いた恋れん香かさんが、何か誤解しているような気がする。
　それからずっと愛あい香かたちに密着され、のぼせかけて意識が飛ん

だところで、ようやくツインテイルブレスは消えた。本当、不思議な温泉だ——。

◇

　温泉は、疲れを癒いやす場所のはずだ。しかし、心ゆくまで温泉に浸つかったはずの俺は、なぜエレメリアンと延々戦い続けた後よりも疲ひ弊へいしきってしまっているのか。

　浴衣ゆかたに着替えるのも苦心し、よろけながら部屋に戻った俺を見て、理事長がほくそ笑む。

「あらあら、うふふふ。婿むこ殿、女性とあの程度触れ合っただけでやつれてしまわれて。夜はもっと、もっともっと頑張っていただくのですから、神しん堂どう料理で精をつけてくださいね」

　俺はこれ以上、何を頑張ればいいの。生きることで精一杯なんですけど……。

　夕食用に机を並べた部屋で、鍋や懐石料理、はたまた洋食のフルコースと個人の嗜し好こうに合わせた豪華な夕食が振る舞われる。これが神堂料理か。

　もはや何にでも神堂とつけるのは、トゥアールの発明品に近いフィーリングを感じるが……見た目違たがわぬ美び味みさに、舌した鼓つづみを打つ。

　料理を皆がだいたい食べ終えたところで、桜さくら川がわ先生が理事長や母さんにお酒を飲むか聞いている。それを見たトゥアールはポン、と手を叩たたく。

「料理をいただくお礼に、私にも皆さんにご馳ち走そうさせてください！」

　トゥアールが白衣のポケットからにゅるんと巨大な箱を取り出すのを

目撃し、恋香さんがきょとんとしていた。あれぐらいなら、手品ってことにしてギリギリ誤ご魔ま化かせるだろうか……。
　トゥアールは箱を広げ、セルフファンファーレを口ずさむ。
「じゃーん！　美お味いしくて性欲……もとい滋養強壮効果のあるトゥアールちゃん特製ドリンク、トゥアールジュース！　今の総そう二じ様には特におすすめです!!」
「その最悪なネーミング、何とかならなかったの!?」
　愛香は呆あきれながらも、グラスに注がれたトゥアールジュースを受け取る。待て、そのツッコミはちょっとだけ神堂料理にもブーメランだ……。
「親しみやすさを追究した結果です！　学生組の飲み物は、こちらにしましょう!!」
「……………………学生組……ですね、トゥアール、さん……」
　たまにイースナがトゥアールと話していてやけに嬉うれしそうになる時があるんだよな。何か、自分だけの秘密を知っているような、微笑ほほえましい優越感というか。
　そのうち、共通点を探し出してみるか。
「私も、トゥアールさんジュースをいただいていいかしら？」
　その落ち着き具合からついつい成人しているように思えてしまうが、恋香さんはまだギリギリお酒を飲める年ではないのだ。恋れん香かさんにも笑顔で注いでいくトゥアール。
「じゃあ、遅めの乾杯しましょ！　総そうちゃん、よろしく～」
　母さんが無茶振りをしてくる。
「え、えーっと……」
　乾杯のスピーチか……当然だけど、生まれて初めてだな。
　いや、気取る必要はないさ。気心の知れた友達や家族の集まりなんだから。

「…………」
　あ、やばい、何も思いつかない。度々悩まされてきたアドリブの弱さが今日も―

「―――乾杯ツインテール!!」

　俺はグラスを高々と掲げ、皆への精一杯の感謝をその一言に込めた。
　乾杯、それは困惑をリセットする魔法の言葉。
　どれだけスピーチで失敗しようが滑ろうが、この二文字が新たなる宇宙を開かい闢びゃくする。
「さ、さ、飲んでください総そう二じ様っ！　トゥアールちゃん愛のジュースを！」
　俺は注がれた液体をしげしげと見つめ、意を決して、グラスに口をつける。
「――――これは⁉」
　不思議な味だ。ミネラルウォーターにも似た口当たりの良さの後に、炭酸水のような刺激。ブラック珈琲コーヒーのような僅わずかな苦みを感じたかと思えば、ミルクのような甘さが口内に広がる。しかも、喉のど越しが爽そう快かいだ。
「お、なるほど……なかなか美う味まいな、トゥアール」
　桜さくら川がわ先生や母さんたち大人組も、お酒ではなくトゥアールジュースを飲んでいる。感想は上々だ。
　腹を中心に、じわじわと体温が上がっていく。温泉に浸つかっている時とはまた別の感じだな。確かに、疲ひ弊へいしきっていた身体からだに活力が湧わいてくる感覚がある。
　さすがはトゥアールの作ったジュースだ。
「うへへへへ……後は総二様の下半身の前で顔をスタンバイさせていれ

ば、自動的に……」
　トゥアールが何な故ぜか俺の座卓の下に潜り込もうとし、愛あい香かに止められていた。
「ひっく」
　あれ、慧え理り那なが可愛かわいらしくしゃっくりをし始めたぞ。どうしたんだろう。
「くーーーー」
　横を見ると、イースナが寝てしまっていた。メガネドンがもふもふの着ぐるみを活いかして膝ひざ枕をしている。よかった、今日は健すこやかに眠りにつけたみたいだ。
　ヒレでイースナの頭を撫なでるメガネドン。
　親おや娘このふれあいを微笑ほほえましく思っていると、耳をつんざくような嬌きよう声せいが間近で響いた。
「げはははははははははたーのしー！　ですわーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
　ああ、お嬢様がおそらく今までの生涯で一度も上げたことがないであろう奇声をお発しになって……。……まさかこの豹ひよう変へんは、トゥアールジュースを飲んだせいなのか……!?
「うおおおおおおおおおお脱ぎてええええええええええええええええええええええええええ!!」
　海の男じみた雄お叫たけびを上げ、浴衣ゆかたをぽいぽいと脱いでいく慧え理り那な。
　あまつさえ、下着まで一気に投げ捨ててしまった。
　イエローの完全脱衣形態フルブラストモードでさえ、申し訳程度のアンダースーツは残るというのに……。
「おいトゥアール、滋養強壮に効き過ぎて隠された別人格呼び覚ましてないかこれ!?」

「ふむ……体内に残った催さい淫いん効果とジュースが、化学反応を起こした結果かもしれません！」
　予期せぬ効果に目を輝かせるトゥアール。ああ、こういうところは、科学者だ……。
「え、慧理那、色気無き脱衣を見せても婿むこ殿は喜びませんよ⁉」
　理事長もトゥアールジュースの効果が出てきたのか、娘を叱しかる声に迫力がない。
　むしろ、目が据わった慧理那の逆襲に遭っていた。
「うるせああああああああああああああ脱ぎたくて脱いでんですわ邪魔すんなおふくろ‼」
「おお……慧理那、成長しましたね……！　貴女あなた一人を脱がせはしません、この母も続きますわおふふふふふふふ……」
「なぜ続く⁉」
　娘さんを見習ってハイになり始めた理事長に気を取られた一瞬。
「はむ……」
「うおわあああああああああああああびっくりしたあ‼」
　慧理那が突然、俺の髪の毛を口に咥くわえた。
「そ、そーじに何してるのよ会長！　セクハラ⁉」
「ちげーますわ！　毛を舐なめることで効率よくビタミンを摂取してるのですわ！　観み束つか！　オメーもっと光合成して栄養素作れですわデハハハハハハ‼」
　…………猫かな？
　インテリジェンスなバーサーカーだ……。
「駄目だってば服着ないと！　それに、ご飯食べるところで暴れたら──」
　愛あい香かがやんわりと慧理那を止めに入る。
「うっせーーーーーーーーー貧乳！　ですわ！　あのでか乳とばっかり仲

良くしやがって、わたくしにももっとかまえですわ！　この涅ね槃はん寂じやく静じようおっぱい!!」
「そ、そんなふうに思ってたんだ……会長……」
　貧乳と口にした者はたとえ神であろうと複雑骨折させる、でお馴な染じみの愛香。
　慧理那にも例外なく凄すごむかと思いきや、暴走に任せて寂しさを訴える慧理那に絆ほだされたのか、無罪放免となった。
　あと、暴走しても出るぐらい、師匠トウアールの生み出した名罵ば倒とうをしかと覚えていたようだ。
「○△●□▲×■……」
　さらに特撮ヒーローの変身アイテムが発する電子音声じみた妙な呟つぶやきをこぼす慧え理り那な。
「電池切れ寸前の変身アイテムおもちゃのモノマネですわ！」
　お嬢様の宴会芸が炸さく裂れつする。やべえ、慧理那に眠っていた才能が次々に開花していくぞ。
「新しい電池が必要ですわ！　観み束つか、わたくしに電池を入れろですわ!!」
「電池!?」
「持ってんだろですわ！　早く出せですわゲハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」
「落ち着け慧理那ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　俺の叫びを聞いて主あるじの危機を察したのか、桜さくら川がわ先生がこちらに膝ひざ立ちでずずいっと寄ってきた。メイド服ではなく浴衣ゆかたなので、新鮮な感じがする。
「観束ぁ……」
　しかし桜川先生は、妙に弱々しい声で、俺の肩に頭を乗せてきた。

シャンプーのいい香りが鼻び腔くうをくすぐる。
「うわっ、何で泣いてるんですか桜川先生!!」
「したいよぉ……結婚したいよぉ……」



桜さくら川がわ先生は完全にふにゃっとしている……まあ、長時間運転して疲れただろうしな。
「できます！　絶対いつか結婚できますから‼」
俺は子供を慰なぐさめるように桜川先生をあやした。屋上で元気づけられた時と逆だな……。
「……じゃあ……して？」
肩に頭を乗せたまま、上目遣いで甘えてくる桜川先生。
「今して」
普段のきりっとした態度からは想像もできないとろけぶりに、俺は見てはいけないものを見てしまったような背徳的な気持ちになる。
「………………早く、結婚して……お姉ちゃんを、安心させてあげたいんだぁ……」
桜川先生、お姉さんがいたのか？　……いや、そんな素そ振ぶりは一度も見せていない。
じゃあ、お姉ちゃん、って――。
聞いてしまってよかったんだろうか。いつもはひた隠しにしているとても大切な本心を、夢うつつのままに零こぼしてしまったような印象を受けた……。
「みーつか」
心安く囁ささやき、頬ほおを寄せてくる桜川先生。主人の慧え理り那なとは別ベクトルでの猫っぷりだ。
「ひゃむひゃむ」
そして主人はまた、俺の髪の毛け繕づくろいを始めている。普段は犬っぽいのに、不可思議な。
どんどんカオスになっていく周囲に、愛あい香かは焦りを見せ始めた。
トゥアールジュースをおかわりして飲んでいくが、慧理那たちのよう

に変貌はしない。
「ちょっと……何であたしはそのまんまなのよ、可愛かわいい人格が出てこないんだけど!?」
「可愛い別人格が秘められてないからじゃないですか？　愛香さんには……」
　顔を赤らめたトゥアールが、愛香の胸を指でつんっと突つく。
　愛香はその手をはたき落とし、
「トゥアールもそのまんまなの？」
「………………着乱れた浴衣ゆかたの総そう二じ様、めっちゃセクシーですねえ……はだけた胸元がほんのり上気してて……やべえめっちゃ襲おそいてえ」
「変貌してんじゃない！　でもいつも通りじゃない!!」
　リズミカルな困惑をぶつけるも、トゥアールはそのまま愛香にしなだれかかった。
「ひいっ!?」
　悲鳴を上げる愛香。
「……ねぇ～え？　愛香さん……」
「な、な、何よ……」
「さっき総二様にくっついた時……どうでしたぁ？　興奮しましたぁ？」
　簡単に押しのけられるだろうに、愛香はあ、あ、と惑うだけだ。
「なぁんか、いい感じでしたよね、あの時の愛あい香かさん……幸せそうな顔しちゃって……私はどうでしたぁ？」
「あ、あんたもみんなも、すごく幸せそうだった！　うん、平等!!」
　トゥアールは愛香に覆おおい被かぶさるように押し倒した。
「は、離れなさい！　これ以上くっついたら、入念に痛めつけるからね!!」

「いいですよぉ～。痛いの我慢して……襲おそっちゃいますから……」
「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい正気に戻ってトゥアール!!」
　珍しい光景だな、愛香がトゥアールに押されてる。
「いやあああああああああああ助けてそーじ！　襲われるうううううううううううううう!!」
「えっ……攻守が逆転してるだけで、いつも通りじゃないか？　いつもトゥアールが愛香に襲われてたし……」
「あたしたちをそーいう目で見てたの!?」
　そーいう目って……弱肉強食の体現だと思ってたが……？
「あははは、やあっぱりぃ～。愛香さんって、襲われ願望があるでしょ？」
「なっ!?」
「強い女の性さがですよねぇ……それ以上に強い力に屈伏したいっていう願望……それを総そう二じ様に……」
　トゥアールの肩を力強く掴つかんだのは、浴衣ゆかたから肩口をはだけさせた恋れん香かさんだった。
「てめーヨォ……アタシの可愛かわいい妹に何してくれてンだ？　ア？」
　そして覚醒した恋香さんは、アクセントが完全にヤンキーになってしまっていた。
　トゥアビールをラッパ飲みし、空からになった瓶びんを片手に持つ様が絵になりすぎている。
「あら、恋香ちゃんって元ヤンだったのかしら……？　とぅうおわっ!?」
　恋香さんに気を取られている一瞬で、理事長が母さんにのし掛かった。

何だ。
　何だ、この空間。
「妹を襲っていいのは総二とアタシだけなんだよ……総二に妹襲わせる算段立ててんのに、邪魔すんじゃねーゾ」
「え～、からかってるだけですよぉ。お姉さん、その本性、普段も見せたらどうですぅ？」
　恋香さん、凄すごむような低い声で何かを言っている。トゥアールは飄ひょう々ひょうと躱かわしているが。
　さらに俺の母さんと理事長も、何やらもつれ合っている。
「はあ、はあ……ご主人様……も、もう我慢できませんわ……再会したあの日から、わたくし、わたくし……」
「あーははははえむぴー、待って、子供たちが見てるから！　っていうかえむぴーの旦だん那なさんに悪いから!!」
「いやっ夫のことは忘れさせて!!」
「私は今でも夫一筋だからなーあはは……やっべーどーしよ」
　母さんも俺と同じくそのままのようだが、覚醒した理事長に迫られて困っている。
　……まあ、親おや父じのことを今でも好きだっていう言葉は、聞いていて嬉うれしいものだけど。
　ほのぼのしている隙すきに、後ろから俺の首に誰だれかの腕が回された。肩に、豊かな胸の感触が。
「――――一緒に愛あい香かを剥むこうぜ……ふぅ」
「……は、はい？」
　ヤンキーと化した恋れん香かさんだった。耳に息を吹きかけられ、俺は身を震ふるわせた。
「へーん残念でしたあ、愛香さんはあたしがもう剥いてますぅ～」
　恋香さんを煽あおるように、トゥアールが愛香にマウントポジション

を仕掛けている。すげー珍しい光景だ……ある意味永久保存版じゃないか、これ。
「助けてそーじ、トゥアールマジやばい！　パンツの中に手入れてくるー!!」
　愛香の声がかなり切迫しているので、俺は様子を窺うかがおうとする。
　立ち上がろうとした俺の手を……赤ん坊のように、無む垢くに握る小さな手があった。
「……イースナ……」
　イースナが、眠ったままに起こした行動だった。行かないで、と訴えるように。
　……まだ、怖い夢を見るのか、イースナ。
　大丈夫さ、俺が……みんながここにいるからな。どんな恐いやつが来たって、平気だ。
　俺は浮きかけた腰を下ろし──イースナの手を固く握り返した。
　隣でぺこりとお辞儀をしてくる、枕代わりの着ぐるみさんに、笑って首肯する。
「なぁんですの、もう眠っちゃってー。あなたの方が、お子様、ですわ……」
　俺の毛け繕づくろいをやめた慧え理り那ながイースナの隣に倒れ込み、すやすやと寝息を立て始めた。
「……そんな風に、イースナにどんどん言ってみればいいと思うぞ。慧理那の気持ち」
「……おーう。やってやりますわー。イースナさんは……わたくしが……」
　俺の声が聞こえてか聞こえないでか……慧理那は、寝言で頼もしい決意表明をする。

色々あったけど……いい旅行になって、よかった……。

◇

昼夜変われば、絵も変わる。
皆が疲れ果て、寝静まった深夜──月を映す夜の温泉へ、トゥアールはやってきていた。
昼に皆で入った『本泉』の離れにある小さな露ろ天てん風ぶ呂ろで、こちらに怪しい効能はない。
月下に惜しげもなく晒さらされる裸身は、月の女神をも嫉しつ妬とさせる美しさを輝かせている。
「……なんだ、来て損しました。総そう二じ様が入ってると思ってたのに」
だが、夜の温泉にはすでに先客がいた。
「嘘うそが下へ手たすぎるわよ。同じ部屋なのに気づかないはずないでしょ」
ほとんど波紋も立てず湯に浸つかっていた愛あい香かが、ぶっきらぼうに返した。
部屋は今、死し屍し累るい々るいの様相を呈ていしている。せっかくのお泊まりなのに、色気の欠片かけらもない。
「入念に入ったって、こっちの温泉にも豊胸効果はありませんよ？」
「眠れないのよ……あっちの温泉の効能で、まだ身体からだが火ほ照てってるし……」
「愛香さんの潜在的な性欲が一番強いから、効能が強力に作用したんです。その証拠に、結婚願望だけ先行して性欲が無さそうな尊みことさんは、ほとんどムラムラしてなかったでしょう？」
「じゃあ、ほぼ素だったあんたは、潜在的な性欲はスッカラカンってわ

け」
「獣レベルの愛香さんと違って、私は殿方にとって魅力的な範囲で最大級の性欲なんです」
「つーか、さっきはよくも襲おそってくれたわね。ただでさえ、イースナとかが誤解してるのに」
　いたく気け怠だるげな言い合いを切り上げ、トゥアールは愛香から少し離れた場所へ身を沈める。
　無言のまま、二人は月を見上げていた。
「ねえ。あたし、最低だよね……」
　ぼそりと零こぼれた愛香の懺ざん悔げに、トゥアールが目を瞬しばたたかせる。
「……はい？」
「そーじが普通になり始めてるのに、喜ばなきゃいけないのに……」
　手の平で湯を掬すくい、そして溢こぼす。
「女の子の胸に……あんたの胸に反応してるそーじを見て、嫌な気持ちになっちゃった……」
　どれだけツインテール馬ば鹿かが進行しようと、裸を見れば赤面するし、女の子にくっつかれればどぎまぎもする。総そう二じは男として普通になり始めている。正しい反応を示しているのだ。
　それなのに……愛香は、複雑な気持ちになってしまった。
「自分だって、温泉のせいとはいえムラムラしてたくせにさ……。もう、情けなくて……」
　トゥアールは聞こえよがしに鼻を鳴らした。
「あのですね、愛香さん。それを言ったら、普段愛香さんが総二様をツインテールで興奮させてるのを見て、私がどれだけ嫉しつ妬としてると思ってるんですか？」
　むっとする愛香を見ながら、トゥアールは気の抜けた溜ため息いきを

漏もらした。
「……私だって……ここのところ、何か、気が抜けてしまったようで……」
「……ティラノギルディの言ってた、あれ？」
　抽象的な言葉から、すぐに原因を察する愛香。トゥアールは多少驚いたように肯定した。
　トゥアールは、自分の世界を滅ぼされた原因が、自分が属性を捨てきれなかった心の弱さにある──そう信じて、復ふく讐しゆうの道に邁まい進しんしてきた。しかし、ティラノギルディから語られた真実で、故郷が滅んだのは単に自分の戦闘力が弱かったからだと露ろ呈ていされてしまった。
「本当は、色々なことを調べなければいけないんです。フェニックスギルディから渡された資料も、深部を解析しなければなりませんし……」
　気が抜けた状態で作ったトゥアールジュースが、あのざまだったと自じ嘲ちようする。
「けど、私……これ以上、皆さんのお役に立てないかもしれません……。ティラノギルディの言う通り、私は属性力エレメーラをまるで理解できていなかった……今の総そう二じ様たちは、私の科学を遥はるかに超えているんですから……」
　切ない思いを吐と露ろするトゥアールに、愛あい香かは何の心配も滲にじませずあっさりと返した。
「……それでもあんたは、ちゃんとこの世界にいてくれるんでしょ？」
「当たり前です。科学のネタが尽きたら、後は女として総二様の役に立つだけです」
　トゥアールも、当然とばかりに答える。
「……イースナも、このぐらい吹っ切れればいいんだけどね……」
「おや、愛香さんがイースナを心配するなんて珍しい」

　しかし、そう返したトゥアールもまた、同じことを思っていたようだった。
「そんなに信用ないのかな……あたしたちの力」
　この数日のイースナの怯おびえように、さすがに愛香も堪こたえているようだ。
「あの子は、私たちには見えていない未来を見てしまって、それに怯えているのかもしれません……。どれだけ信頼していようと、共有できないものはあります」
「どうしたもんかしらね……。あたしやあんたじゃ何言っても駄目だと思うのよ」
　悩みは、同じ境遇を経えた人間だからこそ分かち合える。同じ悩みに涙した人間の言葉だから、心に響く。
　イースナの寂しさや疎外感を、愛香やトゥアールは分かち合ってあげられない。
　孤独に世界を旅したトゥアールですら、今は満たされているのだから。
　今は健すこやかに眠る誰だれかに向けるように、トゥアールは優しく眼を細めた。
「……その心の痛みを知る人が、本音でぶつかってあげられればいいですね」
　トゥアールは立ち上がり、愛香に見せつけるように裸身を晒さらした。
「……さて。今日は本当に楽しくて……夜よ這ばいって空気じゃなくなっちゃいましたけど」
　弾ける雫しずくが、月の光を受けて輝いている。
「総二様がまた女体に反応を示してくれるようになって、安心しました」

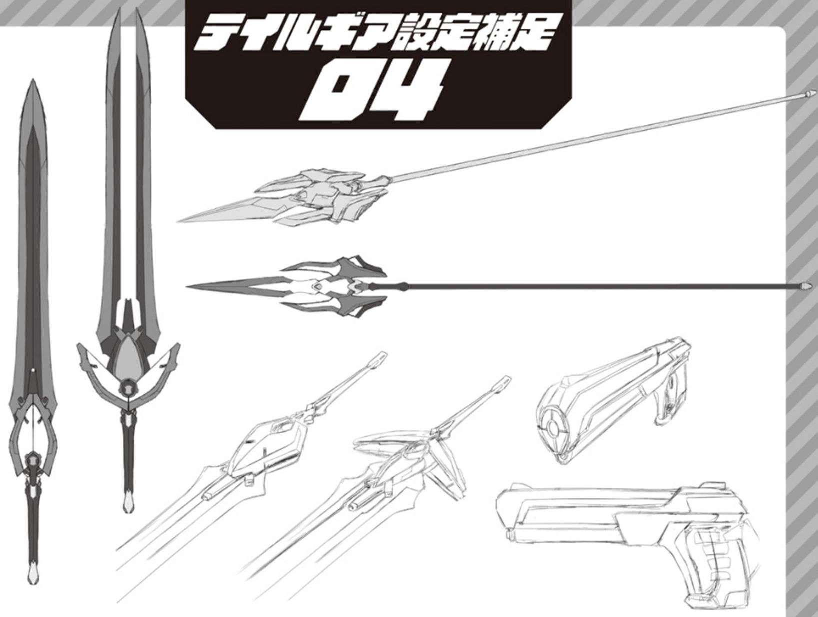
女の愛香でも見とれ、憧あこがれる、完成された美しさ。
愛香はコンプレックスにいじけることなく、思い切って立ち上がった。
起き伏ふくのない身体からだ。しかし天上の美の女神も、そのツインテールには降伏せざるを得まい。
トゥアールは愛香のツインテールを双そう眸ぼうに納め、少し寂しそうに微笑ほほえんだ。
「ツインテールへの愛と女体への興味は両立できます。絶対に……もうすぐ、総二様の童貞は私がもらいますから」
「こんなに〝月が綺き麗れい〟な夜に、よくも欲まみれの宣言ができるわね……」
「やめてください、告白みたいです」
「誰だれがあんたなんかに！　するとしたら、そーじによ!!」
湯冷めする前に、二人は同時に湯に身体からだを沈めた。
それから先、二人とも無言のままだったが──不思議と穏やかな時間が流れていた。

脱衣場の入り口の前で、ささやかな乾かん盃ぱいを交わす未み春はると慧え夢む。
「──青春っていいわねえ……私とえむぴーも、一回ぐらい大おお喧げん嘩かしておけばよかったかも」
「絆きずなには様々な形がありますわ。わたくしと未春様は、あの主従関係こそ幸せでしたもの」
未春の首元や鎖骨のあたりには熱烈なキスマークがついており、死闘を窺うかがわせた。
今度こそ適度にほろ酔いながら、慧夢は頬ほおに手を当てた。
「それにしても、慧え理り那なは……ちゃんと皆さんと喧嘩できている

のでしょうか」
「慧理那ちゃんが？　随分とくだけてきてるわよ？」
　くだけすぎて今夜は色々ぶっちゃけていたが、むしろいい傾向だ。
「あれで、言いたいことを裡うちに溜ためる子でしたから。皆さんと触れ合うことで……ちゃんと、友達と本音で衝突できるような子になっていればよいのですけれど……」

　楽しい旅の終わり──穏やかな母の微笑ほほえみが、静かな夜を彩った。

テイルギア設定補足 04



テイルギア・各種武器

TAILGEAR-WEAPON

テイルギアのフォースリヴォンに触れることにより、強力な武器が形成される。武器は装着者の心を反映し生み出されるため、同じテイルギアでもテイルブルー（ウェイブランス）とアナザーテイルブルー（ウェイブメイス）のように、装着者によって発現する武器は異なる。トゥアールも現役時代は全く違う武器だったという。総二（そうじ）は真っ先に思い浮かべた武器が剣だった。総二を守りたいという思いで変身した愛香（あいか）はその信念が色濃く反映され、近距離超重武器ではなく剣よりリーチの長い槍が発現。逆に後方支援型のギアを与えられつつも、ヒーローらしいインファイトが好みの慧理那（えりな）は、銃火器の中でも近接戦闘用の短銃が発現したようだ。完全解放（ブレイクリリーズ）で変形することで攻撃力を限界まで上昇させ、とどめの一撃を放つ。なお、テイルギアと同じく少しの破損は自己修復するが、完全に破壊されるとトゥアールのメンテナンスが必須のため、戦闘継続中には危機を招く。当然、武器の破損が最も多いのは愛香のテイルブルーである。

第四章　曇る眼鏡。

　美少女（？）科学者の来訪で活気づいた、アルティメギル基地。
　マーメイドギルディの提案で、ツインテイルズに対抗する策が生まれるまで出撃を控えていたのだが──今日もまた、大ホールで彼ら一般兵たちに無理難題が提案されていた。
　モニターを指示棒で指すマーメイドギルディ。今は、ホールに集まった戦士たちに対してプレゼンの真っ最中だ。
「……が、合体……と申したか、マーメイドギルディ……ちゃん」
「そう、合体よ」
　参謀のスパロウギルディが困惑する。未いまだに不慣れな呼び名もそうだが、それよりもマーメイドギルディが提案し、今ホールの大モニターに映し出されている打倒ツインテイルズのプランが凄すさまじかった。
〝力を合わせよう！　愛の合体大作戦〟
　女子じみた丸っこいフォントの文字が、パステル調の装飾たっぷりでそう記載されている。
「ツインテイルズが強化アイテムで戦闘力を底上げしている以上、対する私たちも修行による身体能力向上以外の方法を用いてもいいと思うのよ」
　うんうんと頷うなずく一同。
「二体のエレメリアンが合体することで、戦闘力が飛躍的に向上するわ。その手助けを、私の発明でできればと思って」
　またうんうんと頷く一同。いや、そこまではいいのだ。合体もやぶさかではない。
　だが何な故ぜ、合体の前に〝愛〟の一文字が必要なのか。断じて略さ

せんとばかりに、最も大きなフォントで書かれているのか。
　その一文字、たった一語が、無限大の不安をこのむくつけき剛戦士たちにもたらすのだ。
「この混成部隊の戦闘データは余さず見せてもらったけど、すでに前例もあるわよ。リヴァイアギルディとクラーケギルディ両隊長は打倒された後に合体し、レッドを追いつめている」
　マーメイドギルディはモニターにリヴァイアギルディとクラーケギルディの合体……レッド命名するところのリヴァイアクラーケギルディを表示し、うっとりと眺める。
「────愛ね。愛が二人を合体させ、そして強くしたのよ」
　この部隊には未だにリヴァイアギルディやクラーケギルディの部隊の残存兵もいる。そんな彼らの心中は複雑だろう。己が大将を賞賛されると同時に、仲を勘かん繰ぐるような余計なものまで付属してしまっているからだ。
「もう少しで私が合体システムを完成させるから、それまでに合体パートナーを見つけて、愛を育はぐくんでおいてね！」
　無理に無理を重ねられ、ホール内に集まった戦士たちからは次々に紛糾が飛び出す。
「今日まで苦楽とテイルレッドへの想いを共有してきた仲間、義は感じても、愛までは!!」
　何より、この大人数でとりあえずペアを見つけておけという要請が厳しい。
「ペアを組めぬ者は！　余ったらどうすればよいのです!!」
　体育の授業で味わう最大の苦痛、「余り」を危き惧ぐする戦士たち。
「……んー……その子は、私と合体する？」
　妖よう艶えんな声こわ音ねで誘惑するマーメイドギルディ。
　しん、と静まるホール。

　童貞パワー溢あふれる戦士たちは、姫の言葉で心を乱され、一様に黙りこくった。
　こうして和わ気き藹あい々あいとしていた大学のサークルは、たった一人の姫の介入によって崩壊していくのだろう。
　課題を伝えるだけ伝え、現代の傾国の姫・マーメイドギルディは、ホールを後にした。

　スキップでもしそうな浮かれ気分で自室の前に戻ったマーメイドギルディを待っていたのは、神妙な表情のグリフォギルディだった。
「……相変わらず好き放題しているようだな」
「あら、また来たの？」
　ドアの前で待っている辺り、今日は以前よりは紳士的な来訪だ。
　ツインテイルズの前で脱ぎ捨てた白いローブを再びまとっているのを見ると、背負った紋章の重さ、自軍への誇りがありありと見て取れる。
「私たちが楽しそうにしてるのが羨うらやましくて、交ざりたくなった？」
「戯ざれ言を。君も下級戦士と戯たわむれるのはほどほどにしておくべきだ。才能を腐くさらすぞ」
「生あい憎にくと、男子愛属性ボーイズラブを持つ私にとって、腐ることは終わりではなく始まりよ」
　才能は腐らせてこそ開花する。
　腐女子ゆえの揺るぎなき自負心を展開するマーメイドギルディ。
「──あなた、神の一剣ゴー・デイア・ソードの誰だれにも、首領が出撃許可を出したことを伝えていないでしょう」
　虚を突くような指摘に、グリフォギルディのローブの中の表情が凍こおり付く。
「□□□□□□!!」

「首領様は神の一剣ゴー・デイア・ソード全戦士への出撃を許可したはずなのにね……？　直じき々じきの大命を……手柄を、一人占めしたかったから？」
　グリフォギルディに向けられたマーメイドギルディの視線は、冷ややかなまでに無色だった。まるで、その行く末が見えたかのように。
「違う、誇り高き神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士全てが動くなど、あってはならないと判断しただけだ!!」
「…………交渉おしごと、思惑通りにいっていないんでしょう？」
　自室のドアに背をもたれながら、マーメイドギルディは余裕たっぷりに腕を組んだ。
「究極のツインテール……女神テイルレッドをアルティメギルに迎え入れよ、だっけ？」
　自分に下った勅命を一言一句違たがわず諳そらんじられ、動揺するグリフォギルディ。
「ここまで抗戦を続けた戦士を、話し合いで組織に引き入れるなんて不可能に決まっているじゃない。首領様に遊ばれてるのよ、君」
　刎ふん頸けいにも値する暴言を繰り返しながら、マーメイドギルディはいささかの罪悪感も滲にじませない。グリフォギルディは明らかにその奔ほん放ぽうに圧倒されていた。
「無茶を押しつけて、もがく様を想像して喜ぶのよ、首領様は。絶対に倒せない不死の反逆者の抹殺をダークグラスパーちゃんに命じたのも、きっと同じね」
　沸ふつ騰とうしかけた思考を冷やそうとしてか、グリフォギルディは大おお仰ぎようにローブを翻ひるがえした。
「私の善戦を期待し喜んでいただけるならば僥ぎよう倖こう。いかなる無理難題であろうと、成し遂げるが交渉人の本懐だからね」
　軟弱なエリートが見せる強がりは、実に可愛かわいらしい。

　マーメイドギルディが部屋のドアを開けると、その中心に大量のＢＬアイテムを霞かすませる凄すさまじい存在感を放つものが鎮座している。以前グリフォギルディが訪れた時にはなかったものだ。
「……なんだ、これは……⁉」
　巨大なベッドを直立させたような平たい身体からだに、それぞれがその身体と同等の長さを持つ九つの首がある。
「どうしても下級戦士とは組みたくない──だったら、それ相応の水準の戦士ならいいんでしょ？　サポートしてあげるわよ」
　オブジェではない、生命体……いや、エレメリアンだ。
「──私の自信作、ヒドラギルディ。──人造エレメリアン、とでも言えば理解してもらえるかしら？　合体のシステムはさっき、この部隊の子たちに説明したのだけれど」
　二体合体どころではない。このエレメリアンからグリフォギルディが感じ取った気配は、実に九体分のエレメリアンの反応だ。
「九体のエレメリアンの力を合わせれば、各四し頂ちよう軍の幹部戦士に比肩する力を引き出すこともできる。その代わり……ちょっと、ね」
　マーメイドギルディが言葉を濁にごした理由は、すぐに判明する。
「ウウ……ジャージ……好キ……」
　零こぼれた言葉は、核のエレメリアンの属性だろうか。エレメリアンの誇りである心が、気け高だかき精神が、この合成エレメリアンからはおぼろになっている。
「何ということを……。平気で禁きん忌きを踏み越えたな、マッドサイエンテイストめ」
「いえーい」
　断罪にＶサインで応じるマーメイドギルディに、グリフォギルディはぞっと背を凍こおらせた。
「でも、無理矢理じゃないわ。ヒドラギルディは元々、別世界の侵攻で

瀕ひん死しのダメージを負っていたエレメリアンたちを、強化改造しただけ。延命措置よ」
「……やはり君に好き勝手をさせておくわけにはいかん。この任務、次で必ず完かん遂すいしよう。せいぜい研究ごっこが徒労に終わるといいさ」
「大丈夫？　交渉は破談したんでしょ？」
「いいや、種は撒まいてある。将を射んと欲すれば──根回しは交渉の基本だ」
　交渉人の面目躍如とばかりに、グリフォギルディは成果を確信した笑みを浮かべる。ヒドラギルディの帯同を認めるのも、その余裕ゆえか。
「ああ、それと……この基地の映像系統には今、ダミーを流してあるから……部隊の子たちに気づかれずに人間世界の電波を使うなら、チャンスよ」
「……ふん……」
　自身の行動を先読みしたかのようなマーメイドギルディの根回しに歯は噛がみし。グリフォギルディはローブを翻ひるがえし、部屋を後にする。
　既視感。マーメイドギルディはその背中に、またも爆弾発言を送った。
「ヒドラギルディは合体エレメリアンだから……パートナーの属性にも理解を示そうとするの。一目見た時から、あなたのお尻を狙ねらっているわよ」
「待て」
「まさにお尻に火が点ついた状態ね、グリフォギルディ君」
「本当に禁忌を踏み越えていないか」
　何があろうと二度とここへは来るまいという固い決意が、交渉人の背中に溢あふれていた──。

◇

　無事に旅行も終わり、心身ともに回復した俺たち。

　当面気がかりなことは、やはり神の一剣ゴー・デイア・ソード・グリフォギルディの存在だ。

　あの撤退宣言から丸十日……グリフォギルディは一度も姿を現さなかった。

　それでも焦りや苛いら立だちに悩まされずに過ごせているのは、トゥアールの分析のおかげだ。

　グリフォギルディは交渉人を自称していた。約束の時間にあえて遅れたり、思わせぶりな言葉を重ねて困惑させ、思考力を鈍らせるのは、交渉術の常じよう套とう手段。

　気にせず、次に現れたその時に対処法を決めればいい──と。

　今日も放課後にツインテール部部室に集まった俺と愛あい香か、トゥアール、慧え理り那な、桜さくら川がわ先生は、むしろ旅行の思い出話に花を咲かせているほどだった。

　一方イースナは、収録の直前に立ち寄ったということで、善いい沙すな闇あん子この状態だ。

　しかし、どことなく気を張り詰めているように見える。帯同しているメガ・ネも心配げだ。

「ごあああああああああああああああああああああああああ!!」

　トゥアールの叫びで思考が中断される。俺が物思いに耽ふけっている間に、愛あい香かとの間ですでに何がしかの攻防が始まっていたらしい。

「温泉でも治せない病ですね愛香さんの蛮性は!!」

「蛮性を痴ち女じよ性に変えてそっくりそのままお返しするわよ!!」

　互いの不治の病を慮おもんぱかり、二人の言い争いは激化する。
　慧え理り那なは微笑ほほえましげに見つめているが、やはりイースナは元気がない。旅行であれだけ楽しげだったのに、帰ってきたらまた不安がぶり返してしまったのだろうか……。
　トゥアールは例によって白衣のポケットから、牛乳パックのようなものを取り出した。
「そこで愛香さんに試して欲しいのが、ついに完成したＡＡＳアンチアイカシステム兼ＬＡＰロリアイカプロジエクト試作型一号！　アンチアイカシステム十一号・アイカオサナクスールです」
　……何度リリースしてもことごとく粉砕撃滅されたことで、アンチアイカシステムは新たなステージに突入したようだ。
「あんた、まだあたしを幼くすること諦あきらめてなかったの!?　何よそれ、トゥアールジュースみたいな自作の飲み物……？」
　パックのラベルには、コミカルなイラストで女の子が巨乳を突き出すようなポーズを取っている。「巨乳になる薬」と言って渡せば愛香は問答無用で飲み干しただろうが、効果を偽いつわることは科学者のプライドが許さないのだろう。
「それを飲むとナノマシンが全身の細胞のテロメアを書き換えたり書き換えなかったりして愛香さんの身体からだが小さくなるはずです。データ上は完かん璧ぺきですから遠慮なくお試しあれ」
「わかった、遠慮なくトゥアールの胸にかけるわね」
「冗談じゃありませんよ何で愛香さんに胸むね射しやされなきゃいけないんですかやめーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
　今までに何度も発明を奪われて逆襲された経験がありながら、何な故ぜトゥアールは自分以外には使えないようになどの安全策を講じないのだろうか。
　今日はトゥアールも引かない。飲料パックを愛香に力任せに押し返そ

うとする。
　そして、力尽くでかかってこられると喜ぶのが愛香だ。さらに力で押し返す、バイオレンスの連鎖だった。
「ぬおおおおおおおいいから黙って幼くなりなさい！　そして私はロリ愛香さんの頭をおっぱいとブラの間に格納して楽しむんです‼」
　雄お々おしき現在いまの愛香の拳こぶしで、天国と地じ獄ごくの狭はざ間まに格納されるトゥアール。
　カエルのように床に這はいつくばりながらも、トゥアールは闘気を揺らめかせながら立ち上がる。
「私は愛あい香かさんを必ず幼くします……必ずです」
　さしもの愛香も、幼くするというトゥアールの執念に気け圧おされているようだ。
「……トゥアールは、貧乳のためにしか発明品を作らんのか？」
　唐突にそう質問してくるイースナに、トゥアールは怪け訝げんな表情を浮かべる。
「何です、あなたのグラスギアとかメンテナンスしてあげてるじゃないですか」
「そうじゃなくてじゃな……」
「いつもは私と愛香さんにくっつけとか世よ迷まい言を言っているくせに、羨うらやましくなったんですか？　愛香さんならあげますからどうぞお好きにしてください」
「なんであたしがあんたの所有物みたくなってんのよ！」
　もういい、と早々に話を打ち切るイースナ。
「そ、そういえば、イースナさんは、どんなお家に住んでらっしゃるんですの？」
　物もの憂うげなイースナを気遣うように、慧え理り那なが不意にそんな質問をした。

「普通のマンションじゃが」
「そうですか……。え、ええと……では、住所……あ、違いますわ、その……」
　事情を察した上で傍そばで聞いていると、何てもどかしいんだ、二人の会話は。
　前にイースナの自宅に誘われかけたことは、やっぱり慧理那も後から気づいたんだ。
「わ、わたくし、最近また、えろげに興味があって……よろしければ──」
　きょとんとするイースナを見て、尻込みしてしまう慧理那。慌てて手を振って会話を有う耶や無む耶やにすると、質問の相手をトゥアールに変えてしまった。
「……いえ…………トゥアールさんは、観み束つか君にもう何かお願いされたのですか？」
　あと少しだったのに……。絶対、イースナも喜ぶはずなんだけどなあ。
　けど確かに、トゥアールからだけ、まだ何もお願いされていないな。
　トゥアールは面めん目ぼくなさげに、白衣のポケットからにゅるんとノートの束を取り出す。
「ノートが……アイディアノートがもう五冊を超えてしまいました……」
　愛香が呆あきれ交じりに進言する。
「どんだけ入念に考えてんのよ、ちゃっちゃと決めなさいよ!!」
「イースナの願いが広義の意味で私の全ての願いの着地点とかぶってるんですよ!!」
　俺と添い寝するっていう願いが……？
「せっかくなら、グリフォギルディのことが一段落して後顧の憂いが消

えてから、ゆっくりとお願いしたいですね」
　腕組みで頷うなずくトゥアール。いや、だからノリで決めて欲しいんだが……。
　桜さくら川がわ先生は、机の上に置かれたノートをパラパラと捲めくった。
「細かく設定とか書いてあるぞ……？　『俺、観み束つか総そう二じ、一五歳高校一年生。ある日空から降ってきた美少女サキュバスのトゥアールとの同棲生活が始まった』……何だこれ」
　トゥアールは血相を変えてノートを取り返し、
「出逢いとキャラを最初からやり直そうっていう願いも候補にあったんです！　別のキャラで皆さんと会っていたら、私も今頃とうに純潔を失っていたはずですから!!」
　トゥアールの弁明を横で聞いていたイースナがビクリと身体からだを震ふるわせ、うわごとのように呟つぶやく。
「……最初から……出逢いを……」
　俺は心配になり、イースナを覗のぞき込む。
「イースナ、大丈夫か……顔色がよくないけど……」
「……もし……出逢いが敵同士でなかったら……わらわは総二と……お前たちと、もっと仲良くできていたか……？」
　それは、無意識の吐と露ろだったのだろうか。言い終えてからイースナは頭を振り、俺から視線を逸そらしてしまった。

　その時──テレビの画面に唐突に映像が表示された。
　既視感がありすぎて、部室内の全員が反射的にテレビ画面へとかじりつく。
『この世界の人間諸君──初めまして』
　ローブを脱いだ神鳥グリフォンが、不敵な容貌を画面狭しと映してい

た。
「……グリフォギルディ⁉」
　予想できたこととはいえ、目の前の光景は衝撃的だった。
　これまで幾度とあったエレメリアンの全世界同時電波ジャック──それはついに、最強軍である神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士を映すに至ったのだ。
　乾いた音が響き、俺たちの注意が向く。イースナが、椅い子すを蹴け倒たおして立ち上がっていた。
「……あ……や、やめ……やめ、ろ……」
　またもその小さな身体を震わせ、いやいやをするように首を振る。
　画面のグリフォギルディは、気き障ざったらしくかしこまって弁舌を始めた。
『語りたいことは山のようにある……この世界の戦士の健闘。この世界の君たちの心の輝き……しかし、あえて要望のみを手短に言わせていただこう』
　また世界に向けて趣しゆ味み嗜し好こうを延々と語るのかと辟へき易えきしかけた俺は──次の言葉で、脳天に稲妻を落とされた心ここ地ちとなった。

『ツインテイルズを……テイルレッドを、我われらアルティメギルに差し出していただきたい。そうすれば我々はこの世界から撤退し、二度と君たちに不利益をもたらさないことを約束する』
　かつてドラグギルディが世界に向けた征服宣言の真逆──撤退宣言。
　待望のはずのその言葉には、悪魔の取引が添えられていた。
『私たちの最大の目的は、テイルレッドのツインテールだ……。彼女を諦あきらめることで、この世界には恒久の平和が約束されることであろう』

「あいつ、やりやがった……!!」
　俺は歯を食いしばり、拳こぶしを握り締める。
『……だが、私たちと争い続けるのならば……災さい禍かはこれまでと比較にならないものとなることは、確約しよう。テイルレッドのために……この世界が、地じ獄ごくとなると──』
「～～～～～～～～～～ッ……!!」
　そしてイースナは言葉にならない呻うめきを漏もらし、部室の床に膝ひざをついてしまった。
　賢明なる選択を期待する、と。
　相も変わらずの上から目線で締め括くくり、電波ジャックは幕引きを迎えた。
　再び電源が落ちた状態に戻り、テレビの黒画面には俺たちの困惑だけが映し出される。
　慧え理り那なも、悔しさをまざまざと自分のツインテールに顕あらわした。
「ひどい……これでは、人類全員による裁判ではないですか……!!」
　それも、人類全員が裁判官だ。傍聴人じゃない……。
　愛あい香かは相当頭にきているようで、まだそこにグリフォギルディが映っているかのようにテレビ画面を睨にらみつけている。
「でもまあ……あいつらが真ま面じ目めに放送して、まともに受け取られた例しがないしな」
　厄やつ介かいなことになったとは思うが……ここで俺が凹へこんでも、みんなの不安を煽あおるだけだ。
「そうそう。あの尻フェチブッ倒せば、あんな放送ただの笑い話で終わるじゃないの!!」
　愛香も同じように思ったのだろうか……いつも通りの明るさで、頼もしく語る。

「――戦う、のか……。あれを聞いて……神の一剣ゴー・デイア・ソードと……」
　か細く呟つぶやき、幽鬼のように力無く立ち上がるイースナ。
　もはや、彼女を気遣って追及を控えていてはかえって傷付けるばかりだと決意したのだろう。慧理那は不安をかき立てないよう優しく微笑ほほえみ、イースナの手を握った。
「お願いします、貴女あなたが知っていることを教えてください……イースナさん。わたくしたち、どんな恐ろしいことでも受け止めます。だから、一人で抱え込まないでください……」
　その手を、無む碍げに振り払うイースナ。慧理那の優しさが……逆に、イースナが今までギリギリで塞せき止めていたものを、決壊させてしまったのだ。
「……そんなに知りたければ教えてやる……神の一剣ゴー・デイア・ソードの恐ろしさを！　後悔するがいい!!」
　ひた隠しにしてきた、その全容。
「神の一剣ゴー・デイア・ソードは―すなわち頂点の一。奴やつらが出撃する理由は、たった一つ……」
　イースナは、血を吐くような語調で俺たちに明かし始めた。
「その世界を―アルティメギルの故郷へと塗り替えるための征服じゃ……!!」
　震ふるえる声で、憎々しげに綴つづるイースナ。
「いずこかの世界から補充されるのではない……ここが！　この世界が！　アルティメギルの拠点となる！　神の一剣ゴー・デイア・ソードの侵攻した世界は―エレメリアンの星となってしまう!!」
　そして、次第次第にその声は震えを帯びていく。
「目的を終えても、アルティメギルは二度と撤退せぬ！　属性力エレメーラを奪われ尽くしたその後もなお、この世界には終わらぬ惨劇が

待っている!!」
　にわかにはその意味を理解できず、俺たちはただ呆ぼう然ぜんと聞き続ける。
「わかるか、この世界は、エレメリアン生誕の地へと造り替えられてしまうということじゃ……！　未来永えい劫ごう、幾星霜の果てまで、この星は怪人がはびこる地じ獄ごくと化す!!」
　エレメリアンは異世界のいずこかで生まれ、アルティメギルという組織へと組み込まれる。
　その〝いずこか〟が……この、俺たちの世界になってしまう、ということなのか……。
「貧乳！　そんなに戦いが好きなら気の済むまで戦えばいい！　じゃがそれはいつまで続く!?　死ぬまで戦えるか、おばあちゃんになって、そのツインテールが白髪になっても!!」
　愛あい香かははっとして、無意識にだろう、自分のツインテールに手を伸ばした。
「エレメリアンは無限に生まれ続けるぞ、この星で……。あの変態どもと、永遠に戦わねばならぬ……そんな恐ろしいことが、他にあるか!?」
　土ど石せき流りゆうの如く溢あふれ出る激情。俺たちはイースナに気け圧おされ、ただ押し黙り続ける。
「もしわらわが最初からこの事実を告げても、貴様たちは信じなかっただろう！　考え過ぎだと！　騎士道を重んじるアルティメギルに限って、と！　違うか!!」
　返す言葉もない。グリフォギルディの悪あく辣らつな宣言を目にするまで、俺たちはやはりどこか、ポジティブに過ぎた。
「だから言ったのじゃ！　神の一剣ゴー・デイア・ソードを刺激するなと！　抗戦意志を誇示するなと！　お前たち、誰だれもわらわの言うことなど聞いてくれなかったではないか!!」

孤独の吐と露ろ。信念を協調できない不安。

──他のどの告白よりも……その言葉が、一番俺の胸を抉えぐった。

拳こぶしを握り締め、聞きに徹していた愛香は……何とかイースナを励まそうと、希望を紡つむいだ。

「でも、こうなった以上、戦うより他にないでしょ？　あたしたちが頑張れば……さ」

「ッ……お前と……いうやつは……‼」

未いまだに戦闘による解決だけを提示する愛香に業ごうを煮やしたのか──イースナは、魂たましいを抜かれたように虚ろな目になり、脱力とともに項うな垂だれた。

「そうですよ。第一、この世界の人々は──」

机の上にあるテレビのリモコンに手を伸ばしたトゥアールは、大おお仰ぎようなイースナの嘆息によりその動きを止めた。

「やめじゃやめじゃ！　もう付き合いきれん‼」

嘲あざけるような笑いを零こぼすイースナ。

「これはもう……潮時じゃな」

イースナは眼め鏡がねのブリッジを指で押し上げ、肩を笑わせた。

「──わらわは、今日限りツインテイルズをやめる」

真っ先に異を唱えたのは、トゥアールだった。

「な……何言ってるんです、イースナ……本気ですか⁉」

「ああ、グリフォギルディの言うとおりじゃ！　お前が悪いのじゃぞ、総そう二じ！　お前が究極のツインテールなどになってしまうから！　この世界が、アルティメギルの拠点と狙ねらわれる‼」

「ッ……イースナあああああ‼」

トゥアールが逆上し、イースナの胸倉を掴つかみ上げる。

そこで──何かに気づいたようにはっとし、ゆっくりと手を離した。代わりに、慧え理り那なが歩み寄る。
「……イースナさん……観み束つか君がいなければ、この世界はとっくにアルティメギルに滅ぼされています。人々を守るために強くなった観束君を、あなたは批難するのですか!!」
「批難するのはわらわではない、この世界の人間じゃ……。ツインテイルズは程なく、世界崩壊の元凶として忌いみ嫌われよう……。沈む船に乗り続ける道理はあるまい？」
まるでその未来を幾度と見たかのような、深い諦観を滲にじませるイースナ。
お前たちのせいで怪物が現れると。お前たちのせいで、世界が滅びるのだと。
ツインテイルズは、守ってきた人々から石を投げられると。
その果てに───世界は、地じ獄ごくへと再誕すると……。
「だから……潮時だというのじゃ。ツインテイルズはな……」
立ち上がりざま、メガ・ネに視線を送るイースナ。メガ・ネは動こうとしない。
「いよいよ世界が駄目になったら、またアルティメギルに取り入るのも一興じゃな。わらわの忠告を無視した挙句滅んでいくツインテイルズを、特等席で見るのじゃ!!」
彼女の暴言に食ってかかる者は、もう誰だれもいない。
「さあて、収録の時間じゃ！　今日はわらわだけでよいぞ、メガ・ネ!!」
足早に転送ロッカーへと入っていくイースナを、俺たちはただ呆ぼう然ぜんと見送る。
沈黙のまま、数分が過ぎ……俺たちは、誰からともなく大きく溜ため息いきをついた。

「ああもう、どうしてこうなっちゃうかな……！　言うこと聞いてくれない、って……そりゃないでしょ！　恨うらまれてもいいから、もっと殴なぐり合って、わかり合えばよかった……!!」
　たとえ嫌われ役になったとしても……と。愛あい香かが、頭を掻かきながら悔かい恨こんに暮れる。
「……殴なぐり合って……わかり合う……」
　ツインテールを消沈させたまま、うわごとのように呟つぶやく慧え理り那な。
　わかり合おうとした矢先に突き放されたことが、無念だったのだろう。
　悔やんでも、悔やみきれない。この数日……イースナが、みんなに歩み寄ろうとする局面は、俺でさえ幾度と気づけた。見守るだけでなく、もっと後押ししてあげられたら……。
「あの子、悪い方悪い方にばかり考えてしまうんですから……。さすがに、私たちもポジティブに言いすぎましたが……この世界の人々を、甘く見すぎですよ……」
　リモコンを手にし、再びテレビの電源をＯＮにするトゥアール。
　皮肉にも、イースナを勇気づける材料は──グリフォギルディの魔の宣言から数分後、テレビを通して早速流れていた。
『レッドたんを守れー!!』
『レッドたんがいない平和なんて、もうこの世界にありえないんだよ!!』
『……このように、人々が集まって抗議を声明し──』
　ニュースで流れる、学校、職場、公園……様々な場所に集まって、いずこか見ぬグリフォギルディへと向けて抗議する人々。そこには、悪に屈する弱さなど微み塵じんも見て取れない。
「俺はイースナがどれだけ強い心を持っているか知ってる。前ぜん非ぴ

を悔いて、戦士として正しい道を踏み出す瞬間を、この目で見ているからな」
　イースナは、優しいから……あの画面の中で、人々がツインテイルズを誹そしる様を、見たくなかったんだ……。大切な居場所を批難される想像に、耐えられなかったんだ。
「ウチのせいや……」
　メガ・ネは力無く項うな垂だれ、バイザー状の瞳ひとみが放つ光も弱々しくなっている。
「旅行の時にな、思たんや。慧理那ちゃんのお母さん、あんな真ま面じ目めなのに、時々えらいはっちゃけるやんか。車の中でおっぱいおっぱい言うてたし」
「は、はい……」
　恐縮気味に頷うなずく慧理那。
「ウチがイースナちゃんにしてあげなきゃならんのは、ああいうことだったんや。ウチ、小言ばっかりで……えっちなゲームしたらあかんとか、部屋の中で全裸で過ごしたらあかんとか……イースナちゃんが友達と仲良うなれるようなこと、全然してあげられへん」
　いや、その辺は注意して何の問題もないと思うが。
「真面目なばっかりで、全然面白いこと言われへん……ウチ、自分が情けないわ」
　俺はメガ・ネの肩をそっと叩たたき、そんな卑ひ下げは間違っていると否定する。
「……イースナは、メガ・ネが一時的に心を失っていた時、同じようなことを言ってたよ」
　自分はメガ・ネの心をわかってあげられなかった。胸一杯の感謝を伝えたかったのだと。
　だからこそ奇跡は起こり、メガ・ネは復活したのだ。

「大丈夫。メガ・ネの気持ちは、ちゃんとイースナに届いてるから」
　俺が保証する。イースナはメガ・ネの心配をわかっているさ。
　その硬質の様相に、花の咲いたような喜色を浮かべるメガ・ネ。
「……みんな、ありがとうなぁ。イースナちゃん、幸せもんや。こんなにいい友達が、たくさんできたんやもん……」
　メガ・ネは俺たちに頭を下げ、イースナの後を追うように転送ロッカーを潜くぐっていった。
　辛つらかったろうな、メガ・ネ……。よく、ずっと黙っていたよ……。
　深く息を吐くと、慧え理り那なは音も無く立ち上がる。
「……あの、すみません……わたくしも、気分が優れなくて……今日は、お暇いとまします……」
　桜さくら川がわ先生に気遣われながら、慧理那は部室を後にした。
　気分が優れない割りには、ツインテールは凜りん然ぜんとしていたが……方便なのかもしれない。
「ショックだったでしょうね、会長も……」
　頬ほお杖づえをつきながら零こぼす愛あい香か。……慧理那も、イースナに歩み寄っていたからな……。
　いい友達……か。俺たちはこれから……どうすればいいだろう。
　ツインテイルズが結成されてから、初めての分裂だもんな……。

　イースナが悲痛な言葉とともにこの部室を後にしてから、一時間。
　テレビをつけると、彼女はいつも通り、煌きらめくアイドルとして振る舞っていた。
　画面越しに見るいつも以上に完かん璧ぺきな笑顔から、無理をしているのだとありありとわかる。
　愛香も、トゥアールも、イースナの言葉を引き摺ずっているように

ずっと無言のままだ。
　俺が言い知れぬ不安に身を苛さいなまれ始めたその時、いつもの珍妙なアラートが部室に響いた。
「……これは……グリフォギルディの反応です」
　ノートＰＣで確認したトゥアールが眉まゆを顰ひそめる。
「テレビ放送で脅迫してから、間かん髪はつ容いれず──か。さすがにわかりやすいな」
　俺たちの動揺を突こうという腹だろう。悔しいが、そのとおりだ。
「それと、もう一体……こちらは隠すつもりもなく、幹部クラスの強大な属性力エレメーラです」
　もう一体仲間を連れてきた……？　もう交渉じゃない、完全に戦闘態勢じゃないか。
　今や、くどいほどに重ねられた奴やつの撤退宣言が空寒い。
「……全世界にあんな放送をぶちまけておいて、御自ら急せかしに来たってわけ？」
　付き合いきれない、とばかりに肩を竦すくめる愛香。
「しゃーない、あたしとそーじだけで出撃ね」
「そうだな……。イースナにはもう、連絡できないし……。今は、慧理那にもね……」
　部室には三人、出撃は俺と愛香か……。ツインテイルズ結成の頃に、戻ったみたいだ……。

◇

　夕方の生放送の収録を終え──善いい沙すな闇あん子こは、楽屋で俯うつむいていた。
　時計の長針が一回転した頃、眦まなじりを決して立ち上がる。

「メガ・ネ。わらわはこれからツインテール部の部室に戻るが……一六時以降に通販の段ボールが家に届く予定なのじゃ。先に帰って待っていてくれ」
　着ぐるみの頭の部分だけを外したメガ・ネ。コミカルな見た目とは裏腹に、その瞳ひとみは悲壮感に満ち溢あふれていた。
「……宅配ボックスに入れといてもらおか」
　紡つむがれた声こわ音ねのあまりの優しさに、僅わずかに肩を震ふるわせるイースナ。
「…………気づいておったのか」
「何年イースナちゃんの相棒やってると思っとるねん」
「二年じゃろ」
　おどけるメガ・ネに苦笑するイースナ。
「ちゅうか、ウチが宅配便受け取ったら配達人さんビックリするやろ。もっとうまい言い訳考えな、騙だまされてあげへんよ」
「そこは、騙されておいて欲しかったのじゃがな……」
　メガネドンの着ぐるみの頭を抱き締めながら、イースナは観念したように告白した。
「メガネドンはもう十分、善沙闇子の代わりが務まる。せめて、わらわがこの世界でしてきたことを、お前に受け継いでもらいたかった……」
　イースナは自身のアイドル衣装を見つめた。二度と着ることはないであろう、愛着のある衣装を。
「やっぱりなぁ。メガネドン単独で番組に出演オファー来たとか、変やと思うとったんや」
　それも、イースナが早くから根回ししていたのだろう。
　善沙闇子がメディアから姿を消しても、メガネドンさえいれば……。
　人々が、眼め鏡がねへの愛を忘れないようにと。
「……ウチを置いて行こうったって、そうはいかんで」

着ぐるみを脱ぐと、メガ・ネは大事そうに腰の収納箱へと格納する。
そして俯くイースナの正面に歩み、努めて明るい声で言った。
「ウチは、イースナちゃんとずっと一緒や。アルティメギルにいる時も、ツインテイルズになっても……そして──」
その先は言わせまいと。イースナは、寄り添うように静かに……メガ・ネに抱きついた。
「……ありがとう、メガ・ネ」
鋼鉄の手が、彼女のきめ細やかな黒髪を優しく撫なで擦さする。
「引退しますって、ファンの人たちに言わんでも……ええか？」
「うん」
「総そう二じ君たちに……ばいばいせんでも…………ええか？」
「……うん」
時の許す限り、抱ほう擁ようを続け。
二人は、並んでスタジオを後にした。

戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネが、空に光の斬線を残して飛翔する。
「メガ・ネ。あの山で下りてくれ」
眼下に山を臨のぞみ、イースナはメガ・ネに着陸を指示。
人型に変形したメガ・ネは、辺りを見渡して言った。
「……ここ……こないだ来た温泉の山やな……」
「最後じゃ。僅わずかばかり思い出に浸るのもよかろう」
人ひと気けのない場所ならば、どこでもよかったのだろう。
決断の地に神しん堂どう温泉の山を選んだのは──拭ぬぐいきれぬノスタルジーゆえか。
最後に、総二たちと温泉に行けてよかった。温泉では、ボロを出さずにみんなと一緒に楽しめたはずだ。

抱えていたものが大きすぎて、最後まで平静を装えず、泣き別れになってしまったことが心残りだが……。

イースナの手には、ディスク状のデバイスが握られていた。

「イースナちゃん、それ……」

「基地への直通ゲートじゃろう。組織を放ほう逐ちくされ、わらわはもうアルティメギル基地へと赴おもむく手段がなかったが──」

数日前の邂かい逅こうの折。グリフォギルディに、去り際に手渡されたディスク。

それは、簡易転送装置だった。起動すれば、アルティメギル基地への扉が開く。

イースナは、アルティメギルの基地へと赴ける。

テイルブラックは再びダークグラスパーとなり──人類の敵へと戻るのだ。

目を伏せ、日常を回顧する。優しい日々に縋すがることはなく、彼女は決断したのだ。

だが、その決断に立ちはだかる者がいた。

「……ずっと尾つけてきたというわけか」

厳しく見開かれたその目は──怒りを込め、背後の何もない空間へと向けられた。

僅かな紫し電でんが宙空に走り、人型に空間が歪ゆがむ。

「ステルス機能を使って出待ちとは、マナーのなっていないファンじゃ」

邪険属性クルールの属性玉エレメーラオーブの発動効果、気配遮断機能。

擬似的な光学迷彩が解除され、姿を現したのは──テイルイエローだっ

た。

◇

　グリフォギルディの出現場所は、有名な運動強豪高校のグラウンドだった。
　放課後なことも相まって、部活動中の生徒が狙ねらわれている。
「お尻――フッ……お尻―――尻ッッ」
　腕組みをしたまま次々と女生徒の背後に回り、お尻を注視していくグリフォギルディ。
　今日は初めから白ローブを脱ぎ、背の翼も動きに合わせて雄お々おしく揺れている。
　嫌悪感にきゃーきゃーと声を上げていた生徒たちが、俺たちの存在を視認するや一層甲かん高だかい声になった。
「みんな、逃げるんだ！」
「何が属性奪わないよ、スカしておいて、結局やってることはあんたの言う下級エレメリアンと変わらないじゃない」
　俺が避難誘導をしている間に、ブルーは侮ぶ蔑べつの眼まな差ざしをグリフォギルディへと送る。
「もう一体いるはずだ、どこにいる⁉」
「……ジャージ……見セロ……」
　周囲を探っていた俺は―背後の壁が動き出したのを見てぎょっとする。
「オ、俺……ヒドラギルディ。ジャージ、好キ」
　カタコトで話す怪人が、逃げていく生徒たちを見て無念そうにする。
　壁は蠢うごめき、展開し、真の姿を現していった。
　膨ふくれた胴体から、九本の触手が伸びている。九頭の神話の怪物、

ヒドラに間違いない。
　聞き取りにくいが、ジャージを好きだと言ったのか……？
　普段のイースナがこの場所にいたら、狙われていたかもしれない……。
「上下ノジャージ、イイ……。上ダケデモ、下ダケデモ、イイ……」
　己の欲望を語りながら、うねうねと九本の首を動かすヒドラギルディ。
　ストレートに心に訴えかけてくるような、エレメリアンの属性に対する熱さがない。淡々と好みを呟つぶやくだけの姿は、これまでにない不気味さだ。
「ひっ……!!」
　ブルーの苦手な、触手系の敵だ。この時点でもう、戦闘配分は決まった。
「交渉人が聞いて呆あきれるぜ……！　全世界の人を味方につけなきゃ満足に仕事もできないぐらい、俺たちが怖いのか!?」
　先の放送を思い出し、俺はグリフォギルディへと怒りをぶつける。
「交渉とは、面と向かって言葉を重ねるだけではない。今日は最初で最後の余よ興きように、この世界の雑多な尻を見ておこうと思っただけだよ」
　なんて上から目線な奴やつだ。
　強さ云うん々ぬんの前に、こいつは今までにない生理的な受けつけなさがある。
「テイルレッド……君は今日、私たちの仲間になる。君が組織に入れば……私たちはこの世界から撤退するという約束を守るのだ。こんなに美しく完成する交渉があるかね？」
　お粗末な言葉遊びで、約束を反ほ故ごにするグリフォギルディ。
　すると、まだ避難し終えていない生徒たちが踵きびすを返し、戻って

きた。
「ふざけんな、レッドちゃんは渡さないぞ！」
「とっとと帰りなさいよ、トリオバケ!!」
　それが世界の意志だとばかりに、高潔な信念が飛び交う。
　ブルーは避難を促うながしながらも、それを聞いてどこか嬉うれしそうだ。
　もちろん、俺も━
『……安心してください、総そう二じ様。この世界の人間のレッドたん大好きっぷりは不動のものです。エレメリアンのちんけな恫どう喝かつで揺らぐものじゃありません』
　基地で見守っているトゥアールもだ。
「この世界の人々の心は強い。お前たちが撤退しないってんなら上等だ。俺はこれまで通り、この世界のツインテールを守る!!」
　最後にわあ、と歓声が上がる。
　グリフォギルディは避難していく生徒たちを見送ると、勿もつ体たいぶって俺たちを観察した。
「ところで今日は人数が足りないようだが……テイルブラックはどうしたね？」
「何……!?」
「なるほど、私の提案を受け容いれ、四し頂ちよう軍の幹部となる決意を固めてくれたのかな」
　冗談……にしては、妙に表情が確信めいているのが気にかかる。イエローもいないのにそちらには触れていないのが、余計にだ。
　俺は前回、別れ際にこいつがブラックに小声で何かを話しかけていたことを思い出した。
『……イースナにだけ、取引を持ちかけていたのかもしれませんね……』

トゥアールも同じことに思い至ったようだ。
「…………ブラックを利用しようとしたのか……！　許さないぞ!!」
そう考えれば、今までのイースナの不安定な態度にも合が点てんがいく……!!
「円満に解決できる方法を提示しただけだ。あれほど怯おびえる子供の尻になお鞭むち打つことこそ、外げ道どうの所しよ業ぎようではないか!!」
「やっぱエレメリアンね……最初っからそうして怪物らしくしてりゃいいのよ!!」
ブルーがランスを手にグリフォギルディに向かっていく。
「ではお望み通り怪物の面を見せてあげようか……？　尻に支配された我わが深しん淵えんを!!」
俺もヒドラギルディと戦おうと背を向けると、グリフォギルディはその隙すきに俺の尻に向かって手を突き出してきた。
「……あっぶねえ！　お前今何しようとした!?」
咄とつ嗟さに突進チヤージを躱かわす。知的な光を帯びたグリフォギルディの双そう眸ぼうが、今は欲望に爛らん々らんと輝いている。
「テイルレッド……！　君のお尻を触らせてくれ!!」
「何!?　尻を触るだと!?」
馬ば鹿かな、人間の心を尊重するエレメリアンにとって、肉体への接触は禁きん忌きだったはず……。
「私はある日気づいてしまったのだ……。見るだけでは足りない……！　人間の尻をとても触りたいことに!!」
グリフォギルディは高らかに宣言する。──自分もまた、変態だと。
『エレメリアンは精神生命体……それゆえに肉体との直接接触よりも感性に重きを置くのは当然のこと……その摂理をグリフォギルディは破っているんです。……いえ、あるいは──』

あるいは、摂理を超越した存在。神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士は、戦闘力だけじゃない。

その在り方においても、これまでのエレメリアンとは次元が違う存在だというのか……!!



「だから私は交渉人ネゴシエーターとなった！　対等であろうと！　尻への愛を奪いはしない、とりあえず尻を触らせてくれと！　私の何が間違っているのかね!?」
「全部よ」
「尻ッッ!!」
　ブルーの蹴けりがグリフォギルディに尻の命中し、快音が空高く響く。しかし困ったことにさすがは神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士、無防備な尻に打ち込まれたキックがまるで効いていない。
「紳士であろうとしているだけで変態なのか……。それがエレメリアンの限界なのか!?」
「いいや、私はエレメリアンの限界を超える！　紳士たれ！　変態たれ！　両立させてみせるとも、左右均等のツインテールのように!!」
「くっ……志こころざしだけは崇高だ……!!」
　エリートの仮面を捨て去った魂たましいの叫びに、俺は怯ひるみかける。
「理論武装した変態ってだけでしょタチ悪いわよ!!」
　プライドと欲望の狭はざ間まで咆ほう哮こうするグリフォギルディ。
「テイルレッド！　君の尻を触らせてくれ！　一時間……いや、三〇分でいい!!」
「長えよ!!」
　一触れすらも嫌なのに、どんだけ図ずう々ずうしいんだこいつは!!
　すまないイースナ、君の言う通り、神の一剣ゴー・デイア・ソードは本当に厄やつ介かいな相手みたいだ……!!
　グリフォギルディはなおも譲らず、それどころか更なる攻勢に出た。
「お願いします！　お尻を！　お尻を見せてください！　お願いします!!」
「な……ど……土下座!?」

　ついに、土下座という交渉ネゴシエートの最終形態を敢行するグリフォギルディ。
「ジャージ、着テクダサイ……オ願イシマス」
　ヒドラギルディも一緒になり、欲望の土下座が相乗される。
　グリフォギルディはちらりと面を上げ、俺の視線に自じ嘲ちようする。
「フ……なんだ、その変態を見るような目は!!」
　ご指摘の通りなんですが……。
「お前は人々の信頼を得ている……世界に溢あふれるツインテールを好きなだけ見て、好きなだけ触れるであろう！　交渉などせずとも!!」
　交渉人としての矜きよう恃じをかなぐり捨て、血を吐くように叫ぶグリフォギルディ。
　どっちかというと、俺のツインテールが、御ご利り益やくがあるとかで触られるんだが……。
「だからどうしたってんだ」
「ズ、ズル……イ……」
　ヒドラギルディが無念そうに呟つぶやく。要領を得ない訴えに、ブルーも困惑している。
「エレメリアンには人体接触へのリミッターがかかっているようなもの……。接触は視認以上に人々の心に波風を立て、心の成長を阻そ害がいするからだ。だが、それを超越し、新次元へと到達した頂点のエレメリアンたちがいる……それが我われらだ!!」
　誇るというよりは、告白してしまった、という慚ざん愧きとともに明かされる真実。
　俺とブルーは背中を合わせて互いの尻を隠し、戦せん慄りつを以もってその告白に耳を傾ける。
「神の一剣ゴー・デイア・ソードを何と聞かされた？　ダークグラス

パーの持っている情報では、我々の恐怖の一端しか伝えられていません!!」
　聞かされた。神の一剣ゴー・デイア・ソードの恐怖は、戦士ではなく、部隊そのものの結実だと。
　だがグリフォギルディは高らかに謳うたう。我をこそ恐れよ、と。
「エレメリアンの常識を覆くつがえすことにより、エレメリアンの、さらにその先へと向かおうとする者たち──神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士は、まさしく神に等しき存在なのだ!!」

◇

　変身を解除した慧え理り那なは、俯うつむきながらイースナへと歩み寄った。
「そもそも、今はまだ授業中であろう。生徒会長自らサボりか？」
　決然と顔を上げ、意を決して口を開く。
「眼め鏡がねの曇りは心の曇り……だから自分の眼鏡は曇らない。お風呂に入っていても……」
　イースナが以前口にした信念を、重く復唱する慧理那。
「今日はすごく、曇って見えますわ……。イースナさんの眼鏡……」
　強い意志を秘めた瞳ひとみを目まの当たりにし、イースナは一瞬ひるんだが、変わらず高圧的な口調で続けた。
「気づいていたとは意外じゃったな……それで今日まで普通に振る舞えたのじゃから、お前もいい役者じゃ。わらわが太鼓判を押してやる」
　イースナが密かにグリフォギルディと交渉していたことを胸に秘め隠している一方、慧理那もまた、皆と一緒に温泉を楽しんだのだ。
「トゥアールたちには相談せなんだか」
「すれば、津つ辺べさんは怒るでしょうから……」

「あいつは話し合いをすっ飛ばすからのう……」
　世界から切り離されたような、穏やかな木々の只ただ中なか。
　木こ漏もれ日の下で、二人は見つめ合う。
「やはりあの時、グリフォギルディに提案されていたのですわね……」
「一番近くにいたお前は、見てしまっていたというわけか……。そうじゃ、奴やつはわらわに基地への片道切符を手渡してきた。まずはお前だけでも──となな」
「……基地に……」
　したたかなネゴシエーターだ。グリフォギルディはあの僅わずかなやりとりの中、与くみしやすい相手を見極め、行動に移していたのだ。
　それは、自分たちの恐怖を知るダークグラスパー……イースナだったというわけだ。
「ドＭよ。熱血ツインテール馬ば鹿かの総そう二じや戦闘馬鹿の貧乳と違い、お前ならば多少はものを考えられよう。どちらの選択が正しいかを──」
　イースナの声が熱を帯びていく。
「奴やつらはこの世界の属性力エレメーラにさして価値を見いだしておらぬ……！　戦い始めれば、壮絶な殲せん滅めつ戦となることは火を見るよりも明らかじゃ!!」
　完全絶滅という大義の下襲おそってくるエレメリアンが、どれほど恐ろしいか、と。
「じゃが──今ならばまだ間に合う。あやつらは究極のツインテールである総二の力を欲しがっている。わらわが協力すれば、この世界に手を出すまい」
　恭順という名の防御。かつて犯した過あやまちを──イースナは、再び繰り返そうとしている。
「…………どちらが正しいか……もちろん、観み束つか君とともに戦う

ことですわ」
「ほう……それほどヒーローという勇名が愛いとしいか、特撮トクオタめ」
　固かた唾ずを呑のんで二人のやりとりを見守るメガ・ネ。
「ところでドM□□貴様、何をしにここまでついて来た。わらわはもう、貴様と何の関係もないのじゃぞ」
　後追を警戒していたイースナは周囲を調べ、慧え理り那な一人だけなことを確認し終えた。
「よもや、わらわを邪魔するとは言うまいな？」
　かつて敵だった頃の、剥むき身の刃物を向けてくるかのような攻撃的な声こわ音ね。
　慧理那は物もの怖おじすることなく、真まっ直すぐに眼め鏡がねの奥の瞳ひとみを見据えた。
「あなたが仰おつしやった通り、わたくしは生徒会長です。生徒の非行は咎とがめねばなりません」
「笑止な。公序良俗を乱す脱ぎ魔が生徒指導など、片腹痛いわ!!」
　イースナは慧理那の右手首に視線を向ける。テイルブレスは可視化されたままだ。
　慧理那の覚悟を悟り、イースナの口調にも感情がこもる。
「総二ならばいざ知らず、貴様ごときがわらわを止められると思うてか」
「自分の弱さに負けて━━今から敵に屈しようという方が、随分と強い言葉をお使いになるのですね」
　普段、敵に対してさえ怒りの視線を向けることなど希まれな慧理那が、今のイースナに対しては明確な怒気を込めて言葉を紡つむいでいる。
「そういう貴様は、ドMらしからぬサディスティックな言葉を吐きよる

ではないか。それも身の丈たけに合っておればよいがな」
　不安げに歩み寄ろうとしたメガ・ネを、イースナは首を振って止める。
「イースナちゃん……」
「悪ガキが年上の生徒会長様にご指導を受けるだけじゃ。親の出る幕ではない」
　メガ・ネを下がらせたイースナは、最後通つう牒ちようとばかりに慧え理り那なへと殺気を叩たたきつけた。
　それでも踵きびすを返さない慧理那を見て──覚悟は決まった。
「ならば止めてみよ、ドM。わらわは自分で決断した。貴様の生なま半なかな説得など、もろともに微びと砕いてくれるぞ」
　イースナは神ゴツド眼め鏡がねのブリッジを指で押し上げ。
　慧理那は、黄のテイルブレスを胸の前で構えた。

「グラスオン！」
「テイルオン！」

　闇やみと雷の光波が押し合い、爆裂した。
　テイルブラックとテイルイエローは、思い出の地で対たい峙じする。
　敵に操られたわけでもなく。自分の心を乱して暴走したわけでもなく。
　二人のツインテイルズは、それぞれの信念を胸に武器を向け合う。

　禁断の戦いの火ひ蓋ぶたが今──切って落とされた。



DATA

身長：307cm

体重：289kg

属性力：尻属性（ヒップ）

神の一剣（ゴー・ディア・ソード）の戦士。自分の隊以外の戦士を見下す傲慢さが目立つ。交渉人という紳士的な役職を率先して引き受け、裡に秘めた欲望を封印。美意識という名のプライドを保ち続けてきたが、交渉が思い通りにいかないことやマーメイドギルディの挑発などで仮面はじわじわと崩れ落ち、ついに直接美尻を触りたいという、エレメリアンの一線を越えた欲望が解き放たれる。交渉の信念と同じく、粘り強い追尾攻撃が得意。

第五章　友情のツインテール。

　テイルイエローとテイルブラックが対たい峙じした直後、二人の周囲の空間が鈍にび色いろに歪ゆがんだ。
　イエローが防衛行動を起こす前に、ブラックが説明をする。
「……安心しろ、場所を移すだけじゃ。貴様の温泉には世話になった。破壊するのは忍しのびないからのう」
　二人とメガ・ネの身体からだが鈍色の亜空間に溶け込んでいく。カオシックインフィニットの応用の空間操作技だ。
　イースナがかつてフェニックスギルディと戦った折、ロエルたちの世界に危害が及ばないよう、手頃な異世界へと転移したのがこれだった。
　夕暮れでもないのにやや赤茶けた空。同じく、地平の果てまで続く石と砂の世界。
　助け及ばぬ世界にぐるりと視線を馳はせ、イエローはほっとした笑みを浮かべた。
「――ありがたいですわ。観み束つか君たちに知られずに済みますもの」
「よく言った。泣き言を言っても聞かぬぞ、お嬢様」
「…………」
　フォースリヴォンに触れ、ヴォルティックブラスターを出現させようとしたイエローの右腕に、漆黒の鞭むちが絡みつく。
「雑言ぐらい嗜たしなめ。そこは『顔に傷が付いても知らぬぞ、アイドル』とでも……なっ!!」
　グラスギアの腰部に垂れ下がる尾状のパーツ。ダークネスウィップの閃ひらめきが、イエローの初動を楽々と封殺していた。
「……きゃあっ！」

　重装甲の身体が楽々と宙に浮き、勢いよく地面に叩たたきつけられるイエロー。
　メガ・ネは言われた通り手を出さずにじっとしているが……反射的に飛び出しそうになるのを必死に押さえているようにも見えた。
「馬ば鹿かめ、自分だけ強くなった気でおったか……。お前たちが三人がかりでわらわを倒せなかったあの頃から、わらわもお前も同じだけ成長しておるのだぞ……差は縮んでおらぬ!!」
　イエローは立ち上がりざま、腰の三門レーザーポッドを前面に展開。無軌道に乱射するも、ブラックはしなやかな跳躍でそれを悠ゆう々ゆうと回避する。
「威い嚇かくで済ませずしっかりと当てよ！　わらわは焦じらされて悦よろこぶドＭではないわ!!」
　ブラックが側頭部目掛け繰り出した回まわし蹴げりを何とか両腕でガードするも、イエローは勢いを殺しきれず地面を転がった。
　細身の身体からだからは想像もできないほどの重い一撃だ。
　再度立ち上がろうとしたイエローの端たん麗れいな顔面に、容赦のないサッカーボールキックが飛んでくる。
　紙一重でそれを躱かわし、イエローは地面目掛け背中の陽電子砲を発射。爆圧で吹き飛びブラックと距離を取る荒技に出た。
「よいか……神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアンに、人間への敬意は無い。今までならばあり得ないようなラフファイトも平気でしてくるじゃろう。貧乳は嬉き々きとして応じるやもしれぬが……貴様は為す術すべもあるまい」
　左腕の長射程光銃を展開しようとして、再びダークネスウィップに絡め取られる。しかし、二度同じ轍てつは踏まない。
　イエローはその隙すきに右腕のレーザーバルカンを展開し発射するも──今度は不意打ちでダークネスウィップを前方に引き込まれたことで、

バランスを崩す。
　バルカンは空に地にとあらぬ様に着弾、ただ土煙を巻き起こすだけだった。
「う、うう……」
　イエローは火力偏重の攻撃特化──仲間がいて十全に活いきる戦士といえる。
　攻防速ともに洗練され、特に神ゴツド眼め鏡がねによる先読みを活かしたスピーディな戦いを好むブラックとは、もっとも戦闘の相性が悪い。
　どんな武装を繰り出そうとしても、即座に始動を殺され、裏をかかれ、機先を制される。
「仲間にはこれだけ強く出られるのです……それを、アルティメギルに向ければよいではありませんか……！　何な故ぜ、再び悪の道を歩もうとなさるのです!!」
「貴様とて一度、己おのが欲望に負けて暗黒に身を堕おとした痴ち女じよであろう！　わらわに説法とは笑止千万!!」
　言葉でのやりとりは、どこまでもすれ違う。どちらかが倒れるまで戦うしか、この確執に終わりは無いのだ。
「属性玉エレメーラオーブ──」
　武装による攻撃を諦あきらめ、属性玉変換機構エレメリーシヨンでの特殊攻撃を試みるイエロー。
「遅い!!」
　しかしブラックはすでに、神眼鏡の放つ光輪でイエローを束縛していた。
「カオシックインフィニット……！　ことが終わるまで、属性力エレメーラの深しん淵えんに呑のまれたまま指を咥くわえて見ておれ、ドM!!」

　ブラックの生み出した闇やみが広がり、瞬またたく間にイエローの身体を包む。
　イエローは何の抵抗もできないままに、幻惑空間に呑み込まれてしまった。
　反撃はともかく、恨み事の一つでも浴びせる時間はあったはずなのに──。
「……馬ば鹿かめが……何故本気でかかってこなかった……!!」
　ブラックが憐れん情じようとともに背を向けた瞬間──あらぬ方向から銃撃が放たれてきた。
「むっ!?」
　今し方カオシックインフィニットで幽閉したはずのイエローの健在を即座に理解し、目視に先んじて距離を取るブラック。
　果たしてイエローは、先ほど技に囚とらわれた場所とは逆方向から、ヴォルティックブラスターによる斉射をブラック目掛け放ってきた。
「！　仮装属性コスプレの属性玉エレメーラオーブで身代わりデコイを……！　わらわがあの技を使ってくると読んでおったな!!」
　使用者本人の身体からだを投影し、精巧な模倣体を作り出す──仮装属性コスプレの属性玉エレメーラオーブは、分身攻撃としては用を為さないものの、このように瞬間の目め眩くらましにならば最適だった。
「一度この身に受けた技ですし──何度も見ましたもの！」
　イエローは奇襲に隙すきを見せたブラックへ肉薄、渾こん身しんの蹴けりを放つ。
　しかしそれは、遠距離攻撃装備を持ちながらインファイトを好む、ヒーロー好きのイエローの悪い癖くせだ。ブラックに悠ゆう々ゆうと見切られ、紙一重で躱かわされる。
　──その自身の短所さえ、イエローは利用した。
「……何!?」

ブラックの驚きよう愕がくが相乗される。
拙つたない横蹴りは布ふ石せき──イエローは、振り抜いた足の爪つま先さきからニードルガンを発射し、ブラックの左手を捉とらえていた。
一発目の着弾で空中に跳ね上げられ、二発、三発と直撃し砕けていくそれは──ブラックが後生大事に手にしていた、アルティメギル基地への転送ゲートのディスク。
「き、貴様……!!」
イエローは初めから、転送ディスクを破壊することが目的だったのだ。
乾いた音を立てて地面に落下するディスクの欠片かけらを、呆ぼう然ぜんと見つめるブラック。
「変身してからもずっと手にしていて……まるで、壊して欲しいとおねだりされているようでしたから」
リクエスト通り軽口を放るイエローに、ブラックの表情から余裕が消えていく。顔を伏せたまま、離れて見守っていたメガ・ネに呼びかけた。
「……メガ・ネ……インフィニットコンバインじゃ」
神ゴッド眼め鏡がねのアンダーリムをなぞり、強化システムを発動させるブラック。
懇願するようなか細い呟つぶやきに、メガ・ネは無言で頷うなずく。イースナの合体指令に従い、閃せん光こうと共に強化パーツへと分割した。
テイルブラックの身体を覆おおう、白銀の装甲。火花を散らし加積されていく、無限の力。
黒銀入り交じる熾し天てんの翼を背に広げ、ブラックとメガ・ネの合体は完了した。
イエローは地平の果てまで続く砂と岩に視線を馳はせながら、今一度

問う。
「この世界……どれだけ損壊しても、元いた世界に影響はありませんわね……？」
「ここはわらわが適当に見み繕つくろった生命無き世界。粉微み塵じんに消し飛んでもあちらの世界は何も影響は無いわ」
「了解しましたわ」
　テイルイエローは、眼前に構えた右手に黄金の首輪を実体化させる。
　ご主人様への忠誠……被ひ虐ぎやくの極地たる首輪を、テイルイエローは今、雄お々おしき決意とともに握り締めた。
「絶対服従首輪アブソリユートリング……!!」
　完全爆砕を体現した重武装が、イエローの全身を覆おおっていく。
　絶対の進化を遂げたテイルイエローは、毅然とした眼まな差ざしで相手を見据える。
「覚悟はできておろうな。貴様の最強形態アブソリユートチエイン……長くは保もつまい」
　ブラックが強化を妨害することはなかった。完全決着以外にないと悟っているのだ。
「それはあなたも同じことですわ。あなたの最強形態インフイニテイチエインも、長期戦には向かないはずです」
「本当に、言うようになったではないか……面白い、憂うれいがなくなったのなら見事、この世界を塵ちり芥あくたと変えてみせよ……!!」
　アブソリュートチェインとインフィニティチェイン。
　雷光ひかりと純黒やみはここに、最大全力を以もつて相克する。

◇

　自ら神の戦士を名乗るグリフォギルディ。

　だが──今さらそんな文句でビクつく俺たちじゃないぜ。
　初めてこの世界に宣戦布告した竜のエレメリアンは、こう言った。
　我われらは神の徒と──と。
　恐れはしないさ……俺たちは初めから、神様の使いと喧けん嘩かする覚悟はしてたんだからな!!
「戦うか、ツインテイルズ。無益な……だが、もはや拒こばみはしない。私を頭でっかちと誤解している女め狐ぎつねにも、一泡吹かせられよう」
　底が知れたな、グリフォギルディ。
　誇りにしていた交渉を捨てた時点で──撤退という和解の道を閉ざした時点で、確かにこの戦いは無益なものとなった。
　俺たちツインテイルズは──絶対に負けないからだ!!
「戦い続けるさ……この世界の人々が……ツインテールを愛する限り!!」
　俺は左腕に意識を集中する。俺自身のツインテールの到達点・ツインテイルブレスが、眩まばゆい輝きとともに出現した。
　両腕を胸の前で交差させ、進化の言葉を紡つむぐ。
「ツインテイルオン!!」
　全身を脈動するツインテールの波動。
　装甲が加積され、テイルギアの輝きが爆発的に加増する。
　───其そのツインテールは、アルティメットチェイン。
　俺の手にした、最強のツインテール。
　見せてやるぜ。心の制御を捨て去れば強いと思っているお前に。
　信念に背を向け、力に身を任せた暴走──かつて俺が犯した過あやまちを、奥の手などと断じるお前に。
　心を、ツインテールを頼もしい相棒とした俺の力を!!
「なるほど……認識を改めねばならんか。片へん鱗りんだけでこの威圧

感……究極のツインテール、恐るべし！　そしてより是非に、アルティメギルへと欲しくなった!!」
「あんたの相手はあたしよ、尻フェチ!!」
　ブルーもまた、強化デバイス・エターナルパッドを手にした。
　至極冷静に、速やかに……見せつけるような進化ではなく、もっとも効率よく戦局を進めるのだという、闘争の極地。
　神速のパッド入れがもたらした最強変身チエインエヴオルブ、エターナルチェインが降臨する。
「アア、ドンドン、露出度ガ増シテイク……ジャージデ、隠シテ……」
　切ない訴えを一いつ顧こだにせず、ツインテールをたなびかせるブルー。
『フン、急ごしらえの壁が本物の壁に勝てると思っているんでしょうかね……？　愛あい香かさん、ヒドラギルディに見せつけてやってください、本当の壁の強さを!!』
　トゥアールも通信でブルーを鼓こ舞ぶする。
「とりあえず帰ったらあんたに特等席で見せてあげるわ、臨場感ＭＡＸで」
『ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい死の４ＤＸ上映開催!!』
　鼓舞しすぎてブルーの破壊という名作映画のプレミアム席を予約してしまったトゥアール。
　ブルーはしっかりグリフォギルディの前に立つ。触手っぽいヒドラギルディはやはり俺の相手となるようだ。
「気をつけてレッド……そいつ、触手って以外にも何か不気味だわ。まるで、言葉を話すモケーみたい」
　ブルーの指摘で、はっとさせられる。そうだ、意思は感じるけれど人工的な硬質さを見るこの感覚……戦闘員アルテイロイドの雰ふん囲い気きに似ている。

「……いい読みだ。彼は人造エレメリアン。戦闘員アルテイロイドと本質は同じだよ」
　無機質な言葉で仲間を紹介するグリフォギルディ。
　……仲間を、改造したっていうのか……。
　イースナ。この戦いが終わったら、謝るよ。確かに俺たちは、神の一剣ゴー・デイア・ソードに対しての本質を見誤っていた。
　こいつらの恐ろしさは戦闘力じゃない……あらゆる面で、これまでのエレメリアンに持っていた俺たちの常識が容易たやすく裏切られる。
　せめて、完全な戦闘マシンであったなら……こいつらは何な故ぜ、自身の愛だけは裏切らず、その他の全てをかなぐり捨ててしまったのか。
「人間の心へ……そして仲間へ……どちらへの敬意も失ったお前たちなんて、どれだけ役職が上だろうが今までのエレメリアン以下だ!!」
　俺の叫びに呼応し、アルティメットチェインの超装甲が眩まばゆい輝きを放つ。
「ほう……？」
「何、ダト……」
　グリフォギルディ、ヒドラギルディ──そしてこいつら神の一剣ゴー・デイア・ソードへ、俺は宣戦布告する。
「尻しつ尾ぽ巻いて引き上げてもらうぜ！　神の一剣ゴー・デイア・ソード!!」

◇

　ツインテイルズ最多の武装を持つ戦士イエローと、最多の技を持つ戦士ブラック。
　互いの最強形態を発動した戦いは、熾し烈れつを極めていた。
　もはや、何をされようとイエローは止められない。腕を絡め取られよ

うが、投げ飛ばされようが、構わずに身体からだのいずこかの武装を一射するだけで、大気は軋きしむ。誤射が地面に直撃するだけで、ブラックを激震が襲おそう。
　止とめ処どを失った爆薬庫相手に、先読みは意味を為さない。
　二人の戦いは、ようやく五分と言えるまでに変遷していた。
　ブラックに残された最も有効な方法は、全速力を以もつて逃げることだ。回避ではなく、最果てへの逃走だ。イエローが力尽きるのを待ち、悠ゆう々ゆうと止とどめをさせばいい。
　だがそれをしてしまったら、ブラックは敗北する。自身の信念を粉砕される。
「一度アルティメギルに裏切られたあなたが！　非情に切り捨てられたあなたが！　何故今一度、アルティメギルを信じられるのです⁉」
「信じるわけがなかろう！　だから、わらわ一人で行くつもりだったのじゃ‼」
　ことここまで及んだ今、二人は正面から激突する以外に道は残されていなかった。
「誇らしいか⁉　地形が変わるほどの破壊力──戦いの果てに得たその力が！　だが、それでも神の一剣ゴー・デイア・ソードとの戦いは乗り越えられぬ‼」
「でしたらまた強くなればいいだけですわ！　何故、及ばぬ相手を目にする前に諦あきらめてしまうのです⁉」
「神の一剣ゴー・デイア・ソードのさらに先にある、首領の力を見たからじゃ‼」
　交錯する強化武器、ヴォルティックブラスターフォートレスとダークネスグレイブメビウス。銃撃武器と斬ざん撃げき武器。射線と斬線が光の帯を空へと残し、破裂音が天に地に木こ霊だまする。
「この先、総そう二じでも勝てない相手が出てきたらどうする⁉　い

や……必ず現れる！　総二は、また無茶をする！　どんどん人間離れしていってしまうのじゃぞ!!」
「その時はわたくしたちが支えれば──」
「支えられなかったではないか！　わらわたちは総二がいなければ途端に弱くなる！　ティラノギルディとの戦いで露見したであろう！　支えられているのは、わらわたちの方だと!!」
　メビウスクラッシャー──ダークネスウィップにメガ・ネのタイヤ状のパーツを合体させた超重武器モーニングスターを猛然と振り回し、イエローへと投とう擲てきする。
「わらわたちが神の一剣ゴー・デイア・ソード相手にこれ以上足あ掻がけば！　これ以上、強い敵を呼び寄せれば！　総二が、総二でなくなってしまうのじゃあっっ!!」
　隕いん石せきが激突したような激震を響かせる打撃武器をかろうじて回避しながら、イエローはツインテールを地面にアンカーとして打ち込んだ。
「───絶対脱衣形態アブソリユートブラストモード……!!」
　地球最強の一斉射撃。ただ一門で一撃必殺の火力を持った武装を全開放するイエロー。
「メガ・ネ！　防御じゃ!!」
　メビウスクラッシャーからタイヤ状のパーツが分離し、独立飛行防御盾シールドフライヤーとなって飛翔。イエローの絶対脱衣形態アブソリユートブラストモードの一斉射を防ぎ散らしていくが……その火力の前に押し負け、ついにシールドは弾き飛ばされた。
「うっ……」
　しかし、優勢なはずのイエローが先に苦く悶もんの声を上げる。
　圧倒的な破壊力を誇るアブソリュートチェインの最大の弱点は、通常形態とは比較にならない燃費の悪さ。

エネルギーが尽きる。限界の到来を悟ったイエローは、一撃へ戦局を導く。
「属性玉エレメーラオーブ──巨乳属性ラージバスト!!」
弾性を備えた防護膜を眼前に展開するイエロー。
隙すきを見逃さず斬きりかかってきたダークネスグレイブメビウスがゴム状に伸びる防護膜に絡め取られ、すんでの所でイエローまで届かない。
逆に、その分の反動で弾き飛ばされ、ブラックの動きが止まる。
「ちっ、忌いまゝいましき乳め!!」
その隙にイエローは距離を取って離脱。まとった重武装を、凛りんとした表情で脱衣パージした。
裂れつ帛ぱくの脱衣はすなわち、渾こん身しんの最終攻撃へと遷移する。
「完全解放ブレイクレリーズ！」
解き放たれた装甲は超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンへと合体。イエローは、ツインテールを撥ば条ねに空高く跳躍した。
テイルイエロー・アブソリュートチェインの最大最強の必殺技。
あまりの破壊力に地へ落とすのを恐れ、これまで天逆さか巻まき宇宙まで突き抜けていた蹴撃。被害を考慮せずに済むため、地上目掛け放つのはこれが初めてのことだった。
「コズミックジャッジメン
トーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
大銀河を貫つらぬく稲妻の襲撃。
「──わらわに合わせ、あえてオーラピラーを展開せぬとは……小こ癪しゃくな!!」
迎える黒の戦士は、手にした処刑鎌デスサイズを大上段に構えた。
オーラピラーで拘束しないという手心には、断じて回避しないという

勇猛で応じる。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　ブラックも武装を完全解放し、急墜するイエロー目掛け最強の必殺技を解き放った。
「インフィニットバニッシャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　互いの中間を激突点とし、エネルギーの奔ほん流りゆうが擂すり鉢ばち状に放射されていく。
　ブラックの足元の地面は巨大なクレーターとなって陥没し、イエローを襲おそう衝撃は成層圏を越えこの世界の宇宙へと爆裂する。
「もう、諦あきらめよ……諦めてくれ！」
「ぐ、ぐ、ぐ……!!」
　歯を食いしばり耐えるイエロー。ブラックの全力の攻撃にも、ブラックの全霊の懇願にも。
　超弩ど級きゆうの破壊エネルギーが、イエローの右足を容赦無く攻め苛さいなむ。ほんの少しでも気を抜けば、その端正な美脚がギアもろとも圧壊してしまうかもしれない。
「取捨選択をせよ……全てを守るなどという綺き麗れい事ごとが通用するほど、世界の属性力こころは優しくない!!」
　総そう二じの理想を、願いを否定された時。
　イエローの中で何かが弾け、爆発した。
「いい加減にしろッ！　ですわーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　左腕に残していた属性玉変換機構エレメリーションへ、総二が生身で倒したエレメリアン──ロンギスギルディの遺した、お転婆属性トムボーイの属性玉エレメーラオーブを装そう填てんするイエロー。
（観み束つか君、あなたが命懸けで倒したエレメリアンの力を──）

それは、発動中の技にさらなるお転婆アクションをアペンドする強力な付加効果を持つ。
（あなたの思いも乗せて、イースナさんへ――!!）
イエローはその力で、コズミックジャッジメントのまま錐きりもみ状に回転する賭かけに出た。
蹴けり技の名手たるイエローの本領発揮、土壇場での新技の開眼。
「な、何じゃと!?」
貫通力特化の派生技、その名もコズミックジャッジメント・ミーティア。
巨大な流星となったイエローは、インフィニットバニッシャーの只ただ中なかを削岩。
気迫に気け圧おされたブラックは、自身の技を貫つらぬき迫撃するイエローに対抗する術すべを持たなかった。
「うあああああああああああああああああああ……!!」
ダークネスグレイブメビウスの刃やいばの腹に右脚が直撃し、ブラックは地面を抉えぐり吹き飛ばされる。
一方のイエローも、着地ままならず、肩から地面に墜落した。
「……う……はぁ、はあ……!!」
よろめきながら立ち上がると、イエローは遥はるか彼方かなたまで吹き飛んだブラックの元へと歩みを進める。
武装を全て脱ぎ去り、ほとんど全裸となった痴ち女じよが悠ゆう然ぜんと近付いてくる様を眼め鏡がねに捉とらえながら、ブラックは完敗を受け容いれた。
「わ、わらわも焼きが回ったか……貴様にしてやられるとは……」
「あなたが本気でわたくしを倒そうとしていたなら、どちらも無事では済みませんでしたわ」
全身から放電するブラックを見つめながら、イエローは自身の無事の

理由を考察する。
「……諦あきらめのよさは、物わかりのよさではありません。世の中をわかったふうに考えるのは、それこそただの逃げですわ」
　イエローの投げかけた言葉に、ブラックから小さく息が漏もれる。
「……と。観み束つか君なら、きっとこう言いますわ」
「……ああ。言いそうじゃな……」
　ブラックが悔しげに握り締めた拳こぶしから、ふっと力が抜けた。
「メガ・ネ。何とか合体してくれてはいたが、やはり迷っていたようじゃな……。ひたむきに突っ走ってくるこやつには、分が悪かったか……」
〈……それは……〉
　ブラックと合体したまま、言葉を呑のみ込むメガ・ネ。
「もうよい……合体解除じゃ……」
　何を言っても言い訳になる、と。それ以上、ブラックは何も言わなかった。
　イエローは悟っていた。インフィニットバニッシャーが全力で放たれていたなら、膠こう着ちやくの末に両者自滅して終わっていただろう。
　勝敗を別ったのは、信念。心の迷いの有無だ。
　最強変身チエインエヴオルブから一気に変身解除し、慧え理り那なの姿へと戻る。
　そしてブラックもまた、力尽きたように善いい沙すな闇あん子こ──イースナの姿へと戻る。
　アイドル衣装のまま大の字に倒れ伏すイースナの隣に、へたり込むように腰を下ろす慧え理り那な。
「……本当のことを教えてください、イースナさん。なぜ再び、アルティメギルへ行こうと……本当に戦いが怖いだけならば、あなたならどんな異世界へも避難できるはずですわ……」

　事実、こうして今、世界移動してみせているのだ。
　一度離反した組織に舞い戻るなど、身の安全を確保するどころか、リスクでしかない。
「決まっておろう……再び組織を牛ぎゆう耳じって、進軍を諦あきらめさせるためじゃ」
　その答えに、おおよそ見当はついていたのだろう……慧理那は俯うつむき、唇くちびるを引き結んだ。
「総そう二じを……守りたかったのじゃ……」
　インフィニティチェインへの合体を解除し、再結合したメガ・ネ。すぐさまイースナへと手を伸ばそうとし──激しい葛かつ藤とうを思わせる震ふるえとともに、無言で腕を下ろす。
　メガ・ネは駆動音を響かせ、顔を伏せた。
「本気で、好きになったから……」
　最初は、冗談半分だった。自分のファーストキスを奪い、裸を見た憎き男……。
　話してみれば、ぶっ飛んだ感性の持ち主で、しかし眩まぶしいまでの誠実さを持っていた。
　敵である自分に本気で怒り、全てを諦めた自分を命懸けで守ってくれた。
　いつしか他た愛わいの無い冗談は、何物にも代えがたい本心へと移り変わっていったのだ。
「だから──何をしても、総二を守りたかった……。たとえ、総二に恨まれ、再び敵と蔑さげすまれたとしても……」
　今度は自分が彼を守ろう。彼と、彼の愛する世界のために生きようと、心に誓った。
「アルティメギルにいた時は、朝が憂ゆう鬱うつじゃった……正しいと思うことをしているのに、何かに責められているような焦燥感……。

ずっと夢を見ていたいと、何度願ったことか……」
　イースナの想いを語り聞かされ、慧理那は神妙に唇を引き結んだ。
「今は違う。早く起きたい、早く朝が来て欲しい……。夢など見なくてもいい、早く総二の顔が見たい……。毎日が、楽しみで仕方がないのじゃ……」
　声を震わせ、珠たまの涙を零こぼすイースナ。
　その幸せな毎日に背を向け、迎えたくない朝を再び受け容いれる恐怖。二度目の裏切りを決意するまで、この小さな子供がどれだけ葛藤を重ねたか。
「……わたくしも、同じですわ……」
　朝を待望する気持ち。今の慧理那になら、よくわかる。
「……じゃが……最近、また夢を見るようになった……。この世界がエレメリアンに支配され、ツインテイルズが倒され……総二が、消えてしまう夢を……」
　しかし、現実を伝えるイースナの声は、優しい思い出を回顧する余裕もないほどに震えきっていた。
「あなたの優しさは尊とうといものですわ……けれど、なぜ一人でやり遂げようとするのです！　なぜ、わたくしたち仲間を信じてくれませんの!?　なぜ、悲しみを繰り返そうとしますの!?」
　何な故ぜ、何故、と、駄々っ子のように繰り返し──悲痛に詰め寄る慧え理り那な。
「同じようなことを、総そう二じにも言われた……。故郷を滅ぼされたトゥアールの悲しみを知っていながら、何故アルティメギルとして同じことをしたのか、と……」
　合わせる顔が無いとばかりに、弱々しく頭を逸そらすイースナ。
「結局わらわは……どこまで行っても裏切り者なのじゃ……。一念発起して仲間を守ろうとしても、選んだその手段は裏切りだったのじゃから

な……」
　慧理那を見上げ、イースナは自身の眼め鏡がねを指差す。
「……わらわの眼鏡を壊せ、ドＭ」
「だってそれは、あなたの……」
　眼鏡を愛するイースナにとって、眼鏡を失うことは心臓を失うも同然。
　総二がツインテールを斬きり落とされるようなものだ。
　イースナは一介かい錯しやくしてくれ、と懇願している。
「……プテラギルディに命を賭として教えられたのに……わらわは、繰り返してしまった……やはりわらわは、ツインテイルズでいる資格はない」
　慧理那は顔を強こわ張ばらせ、イースナを抱き起こす。
　そして背後に回って腰を抱き締め……イースナを持ち上げようとして失敗し、二人でもつれ合いながら地面に倒れた。
「あわわ……！」
「何をしておるのじゃ、貴様は！　うおっ、お股またを触るなお股を!!」
　もつれた拍子にイースナのスカートの中に手を突っ込んでしまっていることに気づき、慧理那は慌てて手を離す。そして、しょんぼりと項うな垂だれた。
「津つ辺べさんがいつもトゥアールさんにしている、こう、どかーんという技をしたくて……」
「バックドロップか!?　アホか、変身もしていないのにお前のような、なよっちい女ができるはずがない!!」
　むきになって顔を寄せてくるイースナを見て、慧理那は柔和に微笑ほほえんだ。
「ここで諦あきらめるべきではありません。何度間違っても、正しい道

にはきっと戻れますわ」
　土と煤すすに塗まみれた、慧理那の気け高だかい笑顔を目にした瞬間。
　部室で無む碍げに払った優しき手を、再び差し伸べられた瞬間。
　物分かりよく決着しようとしていたイースナが……堰せきを切ったように叫びだした。
「……誰だれも彼も、わらわの言うことを聞かぬくせに……説教ばかりは一いつ丁ちよう前まえじゃなっ‼」
「イ、イースナさん……？」
「ずっとじゃ……。わらわの言うことなど、誰も真剣に聞いてくれぬ！　アルティメギルにいた頃も、みんな、わらわと一線を引いていた……あやつらはいつも楽しそうにしておるのに、その輪の中にわらわを入れてくれなかった‼」
　今度はイースナが、慧え理り那なに掴つかみかかる番だった。
「わらわはずっと！　ずっと訴えたのに！　神の一剣ゴー・デイア・ソードは恐ろしい部隊なのだと！　戦わなくて済むならそれが一番なのじゃと……！　お前も貧乳も、むしろ戦えることを楽しみにしておったではないか‼　グリフォギルディだけで食い止めようと、わらわは頑張っていたのだぞ‼」
　激情に任せ、何度も地面を叩たたくイースナ。
「熱くなって、仲間面づらをして説教かましおって！　本当はお前、こういうシチュエーションに酔っ払ってるだけじゃろう！　わらわなんて、友達の友達くらいしか思っていないくせに‼」
　固く拳こぶしを握り締め、黙って聞いていた慧理那は──
「ずるいですわ……」
「え……？」
　ついに、感情を爆発させた。

「ずるいですわ！　一人だけ、皆さんと距離があったように言って！　わたくしだって、不安でしたわ！　いいえ今でも不安ですわ！　皆さんとまだ距離があるんじゃないかって!!」
　今度は、慧理那が胸の裡うちを吐と露ろする番だった。
「ドＭ……」
「ほら、また名前で呼んでくださらない！　イースナさんは真剣にわたくしと向き合ってくださってますの⁉　友達の友達としか思っていないのはあなたじゃありませんの⁉」
　人が変わったような慧理那を見て、イースナの勢いは見る見るうちに消沈していった。
　そしてメガ・ネは、じっと二人を見守っていた。
　もしメガ・ネが人間だったなら、握り締めた拳は爪つめが肉に食い込み、血を流していたかもしれない。止めに入りたい、自分も何か言葉をかけてあげたい……。沈黙という、優しい彼女にとって一番の仕打ちに耐えながら、慧理那とイースナの喧けん嘩かを嘱しよく目もくしていた。
「ずるいですわずるいですわ！　津つ辺べさんだって、トゥアールさんとばっかり仲良くして！　わたくしにはパンチの一発もしてくださらないのに!!」
「お前じゃその一発で死ぬからじゃろ……」
　真っ当なツッコミも聞かず、慧理那は捲まくし立てる。
「観み束つか君、津辺さんやトゥアールさんだけが好きなんじゃないかって……もやもやして眠れなかったこと、たくさんありますわ！　わたくしだって、お二人に負けないくらい、観束君のことが大好きですのに!!」
　砂の大地にさんざめく告白に、イースナは呆あつ気けに取られる。
「探り探りですわ、何もわかりませんわ！　どうすれば観束君が喜んで

くださるのか、えっちなことだって津辺さんやトゥアールさんには全然敵かないません！　わたくし……半年前までは、えろほんが何かも知らなかったんですのよ！　結婚もできる年ですのに!!」
　さりげなく愛あい香かもエロカテゴリに区分けしながら──慧え理り那なは言い切った、とばかりに深呼吸し……再び、天てん真しん爛らん漫まんな笑顔でイースナを照らした。
「……不安ですけれど……でも、その分観み束つか君が微笑ほほえんでくれたり……津つ辺べさんやトゥアールさんや、イースナさん……あなたたちと会話が弾んだり、新しい一面を見れた時は、たまらなく嬉うれしいですわ。だからわたくし、毎日が楽しくて仕方がありません」
　小学生のような初うい々ういしさは、慧理那が自身の初恋を満喫していることに外ほかならなかった。
　そして、彼女を可愛かわいい可愛いと愛めでるだけだった級友たちとは別に、対等に話し合える友達が、恋と同じくこの年で初めてできたことを。
「ねえイースナさん……この不安も、素敵なものだと思いませんか……？　だってわたくしたち、恋をして、友情を育はぐくんで、青春を分かち合っているんですもの──」
　赤面しそうな真っ正直な言葉を投げかけられ、イースナは頬ほおを緩めた。
「そうじゃな……」
「……でしたら──」
「しかし、わらわは弱い……こうして貴様に説教をされ、この場では納得しても……次に同じようなことが起こった時、また裏切らないと言える自信が無い……！　だからお前も、わらわなど知らんぷりせよ!!」
「その時は!!」



　慧え理り那なが拳こぶしを振り上げるのを見て、身体からだを竦すくませるイースナ。
　その拳はイースナの眼前で開かれ……頼もしく、差し出された。
「――――また、わたくしがぶっ飛ばしますわ」
　イースナは、憑つき物が落ちたように不敵に笑い――
「……たわけ。花を持たせるのは一度だけじゃ。次は――こうはいかん！」

　差し出された慧理那の手を、固く握り締めた。

◇

　俺とヒドラギルディ、ブルーとグリフォギルディ――グラウンド狭しと疾しつ駆くし戦ううち、対戦相手を入れ替えながら、再び戻り……乱戦の様相を呈ていしてきた。
「何な故ぜだ、何故人間の心を乱すような力を！　お前たちエレメリアンは、人間の心に敬意を払っていたはずだ‼」
　俺の訴えなど一笑すらせず、グリフォギルディは俺の斬ざん撃げきを躱かわす。
「何故……だと？」
　そして再びブルーの相手に戻りながら、俺の背中に向けて高らかに語る。
「心奪うことこそ、我われらが真実……その方法に是非を問うからこそ、他の戦士は下級なのだ」
　ヒドラギルディの猛攻を捌さばきながら、俺は歯は噛がみしながら背後の暴言を聞いていた。
「その真実に〝何故〟という惰だ弱じゃくを投げかけた瞬間いま、君の

敗北は必然と化した!!」
　はっきりしたことがある。
　神の一剣ゴー・デイア・ソード──戦闘特化ではない交渉役、先せん鋒ぽうでこの強さということは恐らくこいつらは、全兵士がこれまでの幹部級エレメリアンの力を備えているということだ。
　そしてもう一つ。その幹部級の敵はこれまで、自分の属性に誇りを持ち、敵ながら尊敬できる奴やつらばかりだったが──こいつは違う。
　神なる力に奢おごり、誇りの在あり方も間違っている。
「ひいっ……パ、パス!!」
　首の触手じみた蠕ぜん動どうに恐慌し、ブルーがすぐにヒドラギルディとの対戦を俺にスイッチしてくる。もう一方の、このヒドラギルディ……謎なぞが多く、油断できない。
「ジャージ……ニ、似合ウノハ……ブルマ……？　ホットパンツ……？　スパッツ……？」
　学校のグラウンドという、青春の汗煌きらめく運動の聖地で、ジャージ好きは苦悩する。
　ジャージに似合うのは何なのかと。ジャージだけでは欲望を満たしきれない、様々なものと組み合わせたいと。
「！　複合属性……!!」
　これまでも、リボンの他に人形、など、コアの属性以外に複数属性を持っていた奴やつはいた。
　こいつは運動着属性ジヤージという核を取り巻くように、不自然なほどいくつもの属性を持っているのか。
　まるで、無理矢理たくさんくっつけたみたいに……。
　そしてその思考の迷路に陥おちいったという頭脳の拠点、九つの首は今や一つ一つが投とう擲てき武器と化し、無軌道に伸長して俺に襲おそいかかってくる。

　ブレイザーブレイドだけでは捌さばくに心こころ許もとない。それだけの気迫がある。
　ならば俺も、新たに手にした武装ツインテールを振るうまでだ。

「来い、俺のツインテール‼」

　俺の身体からだから飛び出し、天へと昇った光が、再び俺の元へ一直線に降り注ぐ。
　光のツインテールが武装として実体化した姿──テイルレガリア。
　それは俺が掲げたブレイザーブレイドを鞘さやに収めるように合体し、究極双房剣テイルカリバーへと進化する。
　大剣を一いつ閃せんして空に灼熱の波光を散らし、俺はヒドラギルディと相対した。
「何……己おのれのツインテールを喚よび出し戦うだと⁉　一体何だ、この人間は‼」
　ヒドラギルディに成り代わり、グリフォギルディが驚きよう愕がくする。
「見てわからないか……俺は、ただのツインテールだ」
「ぐううう、成立しているようで会話が成立しない、この不安と焦燥……どこかで──」
　ヒドラギルディの一斉攻撃に集中し、グリフォギルディに背中を向ける俺。
　またもや俺の尻を見てはっと息を呑のみ、背後でグリフォギルディが驚嘆の声を上げた。
「！　き、君は──あの方と同じ次元の存在だとでも……⁉」
「いい加減レッドのお尻を見るのを止やめなさいよ、ヘンタイ！」
「私が尻を見ることをやめる時──それは、己が死す時に外ならない‼」

　では死ね、とばかりに、強化した武装・ウェイブランスエクシードを乱舞させるブルー。
　グリフォギルディが放った光線を紙一重で躱かわすが、まるで意志を持ったかのように光線は旋回。ブルーの元へと戻ってきた。
「私の攻撃はどこまでも相手を追いかける」
「何だ、それだけ──」
　今度はランスで弾き飛ばす。重厚な音を響かせ、光線は背後へと逸それていった。
「それだけ？　私の力は地味かね、美尻の少女」
　グリフォギルディの能力に安あん堵どしかけたブルーに、弾いたはずの光線がさらに襲い来る。
「どこまでも追いかけるとは、終わりがないということだ。相手が倒れるまで──避けようが、防ごうが、決して終わらない」
「くっ……！」
「これこそが我わが交渉の極地──臀でん部ぶへの神視線オシリス!!」
　交渉人は、諦あきらめない攻撃こそが最大の対話だと高らかに謳うたう。
「マッハでは足りんな……音速では不服だ！　もっと……もっとだ！　我が尻への視線は、さらに遥はるか加速する!!」
　弾いても、交わしても、いつまで経たっても光線はブルーを狙ねらい続ける。
「この在あり方こそが、我われ々われエレメリアンと人間との決定的な差だ。君たちに勝利は無い。どれだけエレメリアンを倒そうと決して尽きることなく、侵攻に終わりは無い」
　グリフォギルディの光線は霧散することも縮小することもなく、常に万全の状態のまま飛翔し続けるのだ。
「フッ……ダークグラスパー様はその意味するところをわかってらっ

しゃるようだな」
「……彼女はテイルブラックだ、ダークグラスパーじゃない!!」
　それだけは聞き逃せない。俺は強引に相手を入れ替え、グリフォギルディに斬ざん撃げきを放つ。
「残念だが……復帰もどるのだよ、ダークグラスパーに」
　俺とブルーが焦燥に駆られ始めた頃──

「────いいや、違う」

　その不安を吹き飛ばす晴れ晴れとした声が、グラウンドに響きわたった。

「わらわはツインテイルズの一人、テイルブラックじゃ──二度とその名で呼ぶでない!!」

　イエロー、そしてブラックが、肩を貸し合いながら到着した。二人とも、身にまとうギアがボロボロだ。後ろには、二人を護衛するメガ・ネの姿も。
「ほう……もう少し賢さかしいと見受けておりましたが、仲間に言いくるめられましたか」
「おお、たんと言いくるめられたわ。おかげで今は、とてもいい気分じゃ!!」
　どうやらグリフォギルディの小こ賢ざかしい提案は、晴れて破談となったらしい。
　俺は拳こぶしを突き出し、二人の帰還を祝福した。
「遅いぞ！　ったく……二人とも早退したから、俺たちだけで戦ってたんだぜ!?」

「フッ……そこなドＭと女子トークに花が咲いてのう。ちと遅刻してしもうたわ」
　恥ずかしそうに顔を伏せるイエロー。
　イースナ、慧え理り那なの早退、二人揃そろっての遅刻。そして、ぼろぼろのギア。
「あっ……！　あんたたち、まさかっ！」
　頭の中でようやくそれらが意味することを悟ったのだろう、ブルーが羨うらやましそうに二人を見つめる。
「そーいうことするなら、あたしも交ぜてよ!!」
　かねてから、ブラックと拳こぶしでわかり合いたいって言ってたもんな、ブルー……。
『どうりで二人の反応が一向に掴つかめないと思っていました……』
　通信越しに、トゥアールも呆あきれ声を出す。その少し後、マイクに吐息がかかる程度の、小さな笑い声が聞こえた。
　立ちはだかるグリフォギルディなど視界に入らないかのように、イエローとブラックは俺たちの元へと歩み寄ってきた。
　その背中──尻へと視線を向け、グリフォギルディは戦せん慄りつする。
「こ、これは……！　テイルブラックのお尻が、きゅっと引き締まっている……！　この短期間で一体、何が……!?」
　いや、変わったのはブラックだけではない。
「たまにはブルーを見習って……今日はわたくしも、心の赴おもむくままに暴れます」
　その隣のイエローからは、これまでにない野性味を感じた。
「あなた……ムカつきますわーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
　グリフォギルディに突貫するイエロー。

「……イエロー……」
　頭に血が昇ったブルーですら気け圧おされるほど、イエローの闘志は燃え盛っている。
　しかし、実に心ここ地ちいい叫びだ。俺とブルーは向き合うと、苦笑しつつ頷うなずき合った。
　今の二人をサポートするほど野暮じゃない。俺たちの相手は、ヒドラギルディだ。
　お嬢様があそこまで発奮しているんだ、俺たちが負けていられるか！

　ブラックの確約通り、ツインテイルズは集結。
　ヒドラギルディに対する俺とブルー。グリフォギルディを相手取るイエローとブラック。
　最強軍の尖せん兵ぺいを迎え撃つ、最強のタッグが完成したのだ。
「やれやれ、本当に泥くさい戦いをする羽は目めになるとは……流儀ではないのだがね。私たちは神の一剣ゴー・デイア・ソード──神が振り下ろす、聖なる刃やいばだ。抗あらがうことさえ、罪なのだよ!!」
　陶酔に支配された持論を展開しながら、グリフォギルディはイエロー、ブラックと戦いながら離れて行く。
　罪なら、お互いとっくに背負ってんだろ、アルティメギル。
　それぞれが心輝かせて生きるための戦いだ、神様だって呆あきれて匙さじを投げてるぜ。
「生あい憎にくと俺が信じるのは、神じゃない──ツインテールだ」
　俺とブルーの攻撃と自身の首とを交錯させ、ヒドラギルディは猛襲する。
「神の剣だと!?　振り下ろしたければ勝手にしろ……！　俺はそれを全て受け止める！　人間である、俺自身の剣で!!」
　ヒドラギルディに向けての返答ではなかったのだが……俺の信念を耳

にしたヒドラギルディは、九つの首に備えた双そう眸ぼうに僅わずかに意志の光を灯ともしたように感じられた。
「オ、俺モ……信ジル……ジャージヲ……!!」
　ヒドラギルディの九つの首が円状に整列し、その口から一斉に光弾が放たれた。俺とブルーはそれぞれの武器で防御して、グラウンドに爆煙が立ち昇った。
「……俺モ、受ケ止メル……!!」
　ヒドラギルディの全身が妖あやしく発光する。
　直後、隙すきを見逃さずに突き出されたブルーのランスが、ヒドラギルディの身体からだから火花をあげて跳ね飛ばされた。
「くっ、身体そのものを硬化させたの……!?」
「……ジャージハ……俺ヲ守ッテクレル……!!」
　全てを失い、感情まで見失いかけ、それでも最後はジャージの素晴らしさに縋すがる。
　兵器として戦う戦士の悲痛な信念を前に──
「ふーん」
　ブルーは眼を細めて笑った。
「──いい能力持ってんじゃない」
　エターナルチェインの装甲に搭載された計七つの属性玉変換機構エレメリーションが分離し、ブルーの周囲を光とともに旋回する。属性玉変換機構エレメリーションの基点たる左腕に総合体し、所有する全ての属性玉エレメーラオーブが一旦外へと射出。総力を結集するように、再装そう填てんされた。
「属性玉完全解放ブレイクエレメリーズ!!」
　テイルブルー・エターナルチェインの真価。属性玉エレメーラオーブの発動を極限まで極めた能力。
　倒した相手の能力の継承ではなく、現在進行で対戦する相手の能力を

トレースするという規格外の技で、ブルーの身体はヒドラギルディと同じく完全硬化した。
　ヒドラギルディが九つの首から一斉に放った光弾が、硬化したブルーの胸に直撃。快音を響かせて、一斉に弾き返されてしまった。
「アア、オレノ能力ガ……強奪サレタ……!?」
　ブルーは、心見失いかけし戦士の最後の縁よすがをカツアゲするという蛮勇を見せたのだ……。
「……やらなきゃよかった……」
　胸を盾たてにして敵の攻撃をガインガインと弾く……今の自分の状況を俯ふ瞰かんしたのか、超防御力の代償に深く消沈するブルー。
　通信越しに聞こえるトゥアールの大爆笑が、荘そう厳ごんなＢＧＭのように響きわたる。
　ヒドラギルディがたじろいだ隙に俺は、背負った巨大な翼を光を振り散らして展開。
　炎の衝撃波をまとい、一直線に猛襲した。
　テイルカリバーの渾こん身しんの一ひと薙なぎが、ヒドラギルディを後退させる。
　二本の足を順に地面にめり込ませ、九つの首が風切り音を響かせて宙を切った。
「いくよ、レッド！」
「ああ!!」
　自分勝手に真実を語り聞かせたな、神の一剣ゴー・デイア・ソード。
　属性力こころへの愛を失ったお前たちの言葉は、決して俺のツインテールには響かない。
「俺のツインテールは、真実だ!!」
　俺が……俺たちが胸に懐いだくそれぞれの真実は、何物にも惑わされることはない!!

「「完全解放ブレイクレリーズ!!」」
　俺とブルーは同時に武装を完全解放し、ヒドラギルディ目掛け一直線に飛翔する。
「テイルカリバー！　究極装填アルテイメツトモード!!」
　唸うなりを上げるテイルカリバーの炎に照らされ、ヒドラギルディは最期の咆ほう哮こうを響かせた。
「エクストリームウェーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーイブッ!!」
「ファイナルブレイザーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　巨大な胴体をＸ字に斬きり裂さかれ、火花を散らすヒドラギルディ。
「───ジャー、ジ……!!」
　最期の一瞬まで、愛だけは失わず──人造兵器、ヒドラギルディは爆散した。
　勝利の一息をつく間もなく、唐突に入るトゥアールの通信。
『総そう二じ様！　……お疲れのところ、何ですけれど……わたし、願いごとが決まりました』
「えっ……待ってくれ、帰ってから──」
　制止構わず、願いを紡つむぐトゥアール。
　戦場の只ただ中なか、彼女の思いを聞き届けた俺は──根限り強く頷うなずいた。

◇

　イエローとブラックは再び最強形態へと進化。グリフォギルディを引きつけ、学校に隣接する裏山へとなんとか誘い出していた。グラウンドが広いとはいえ、破壊の規模がこれまでとは桁けた違いだからだ。

「成長したようだな、〝テイルブラック〟……。君の放つ闘気がこの目に見える。まるで溜たまりに溜まった気が、その尻から轟ごう音おんと共に一気に放たれるかのような──」
「最悪な表現をするなあああああああああああああああああああああああああああ!!」
　グリフォギルディの繰り出す追尾光線を、イエローとブラックは互いに動きを補完しながら捌さばいていく。
　迷いを振り払ったとはいえ──こちらは、レッドやブルーとは違い、旗色が悪い。先ほどの戦いで全力をぶつけ合い、二人はすでに満まん身しん創そう痍い。最強形態を維持するのが精一杯の状態だ。
　ならば──二人に残った力を一つに結び、一撃に全霊を込めるのみだ。
「……本当に吹っ切れたのですかな……？　確かに見違えましたが──!!」
　僅わずかに残った迷いをグリフォギルディに見み透すかされ、動揺するブラック。
「……ああ……。確かにわらわは、許されないかもしれん……。一時とはいえ、再び魔道への誘惑に負けかけた……！　自らの不安よわさを、仲間に押しつけたのじゃからな……!!」
　救いを求めることさえ拒こばみ、ブラックは自罰を胸に歯を食いしばる。
「────不安よわさなんて！　いくらでも押しつけりゃいいじゃねえかっ!!」
　その尻に──遠く離れたレッドの声が飛んできた。
「受け止めきれるかな？　いずれ、その恐怖は無限のものとなるぞ。我らの力で──」
　恐怖を煽あおるグリフォギルディを一いつ顧こだにせず、レッドは太陽の光でブラックを照らす。

「無限に現れるエレメリアンが何だ！　ブラック……お前とメガ・ネは、無限そのもののすごい奴やつらなんだぜ!?　自信がないなら、無限の冠かんむりは俺のツインテールに取っ返すけどな!!」
　自罰など必要ない。愚ぐ痴ちれ。喚わめけ。喧けん嘩かしよう。それが……仲間ツインテールだと。
「……駄目じゃ、返さん！　無限それはもう、わらわとメガ・ネのものじゃからな!!」
　照れがましく破顔するブラックへ、レッドは今しがた託されたエールを送る。
「……よし！　じゃあ行ってこい！　帰ったら……お尻ペンペンだからなっ!!」

　――イースナのこと……たくさん、叱しかってあげてください。

　トゥアールは、そんな他愛もない希望を、レッドに……総そう二じに願っていた。
　何にしようかと、胸ときめかせ悩みながら綴つづった、ノート五冊分の願い。
　それを帳消しにするほどの大切な思いで―世話のかかる〝妹〟の笑顔を望んだ。
　いつも寂しさを心に持つ者は……安易な優しい言葉ではなく、馬ば鹿かみたいな喧嘩をする方が、救われるから。思いきり叱って……そして、許してあげて欲しい、と―。
「……うん、好きなだけ、叩たたいて……」
　眼め鏡がねの奥から空へと雫しずくを零こぼし、ブラックは……一瞬、本心イースナとして頷うなずいた。
「ミートゥーですわ……」

……その後ろで、目を血走らせたパッセンジャーが追加希望をしているのだが……。
「何イイイイイイイイイイイ！　お尻ペンペンだとオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
　羨うらやましさのあまり顔をきつく歪ゆがめ、空へ大絶叫を轟とどろかせるグリフォギルディ。
「……ははは……どこまでも尻か！　なあんじゃ、地じ獄ごくを作る者たちも、結局は変態の集まりではないか！　考えすぎて馬鹿を見たわ……悩むのはもうやめじゃ!!」
　ブラックの大笑を見てほっとしたのか、よろけるイエロー。
　その状態を一いち瞥べつで気遣い、ブラックがグリフォギルディの追跡弾を弾き飛ばす。
「やはりコズミックジャッジメントで足を痛めておったか」
　競せり勝ったとはいえ、自身を武器として突撃したイエローの右足には、二人分の必殺技の負荷がかかったのだ。
「友達と本気で語り合うためですもの、心ここ地ちのいい痛みですわ」
「フッ……やはり貴様はドＭじゃな……」
　ブラックはインフィニットコンバインを解除、再結合したメガ・ネを爆走機形態メガネストライカーへと変形させた。
「乗れ、イエロー！　わらわとメガ・ネが、貴様の足になってやろう!!」
「はい!!」
　バイクに身を預け、前方へ銃を構える。友情がもたらしたタンデムに、イエローは陶然と頬ほおを染める。
「お前が総そう二じと観みていたヒーロー番組も、こうしてマシンを駆って大地を疾走しておったな」
　同じ気持ちだったのだろう、ブラックも昂こう揚ようを包み隠さず口

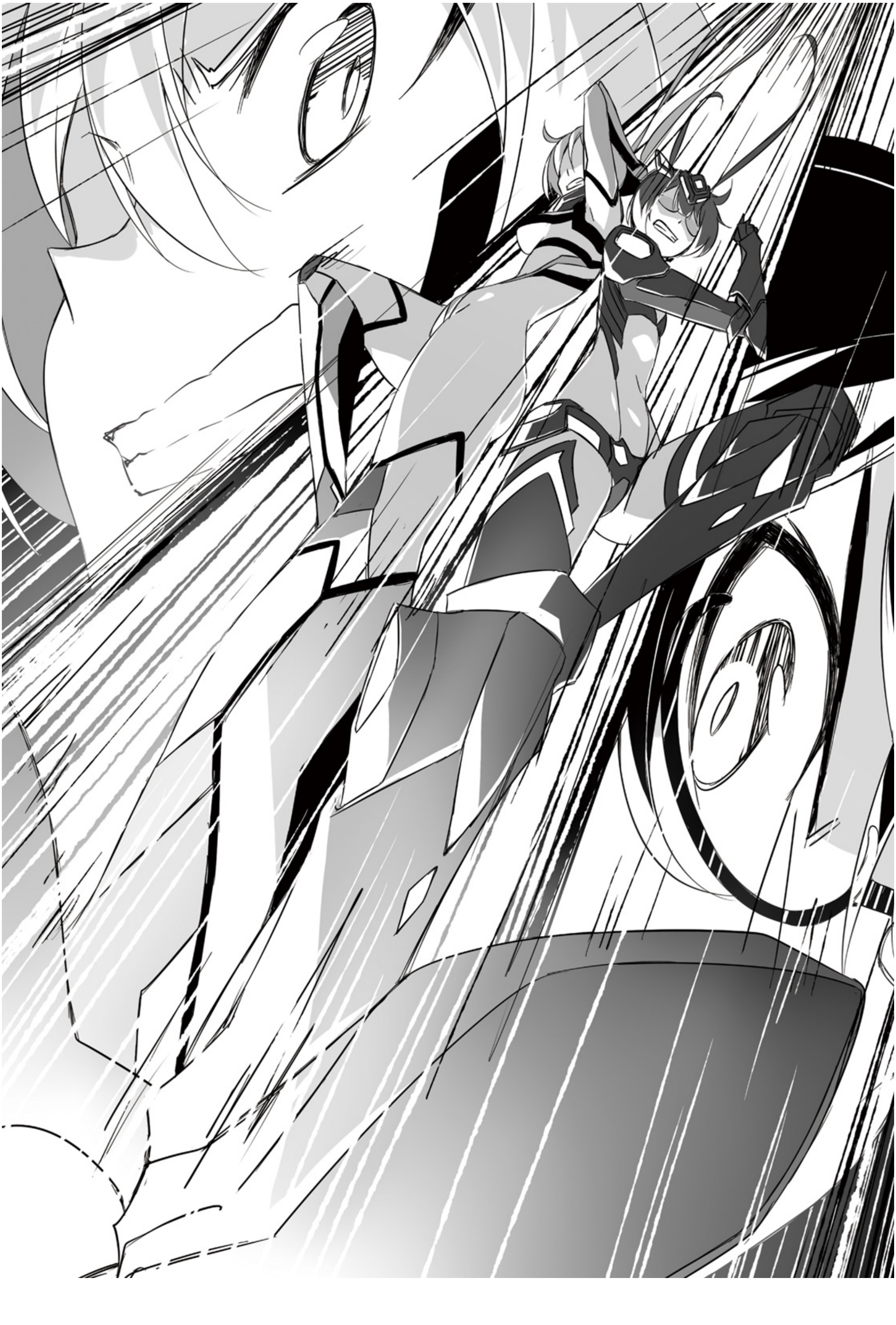
にした。
　馬ば鹿かにした虚構のヒーロー。自分たちこそが本物だと断じたブラックが今、虚構もまた本物であると──。
「……ヒーローもいいものじゃ……。お前の気持ち、少しだけわかったぞ」
「……では今度は、イースナさんと一緒に観ますわ！」
　無作為に樹立する木々を恐れることなく、二人を乗せた爆走機形態メガネストライカーは轟ごう然ぜんと大地を疾走する。空へと逃れたグリフォギルディへ、木々の隙すき間まから次々に銃撃が襲おそい来る。
　逆にグリフォギルディは、木々に阻はばまれて二人の姿を捉とらえきれない。言葉にもにわかに焦りが滲にじみ始める。
「くっ、頭も尻も隠すとは……!!」
「わらわはまた歩を進められる……この、変態じゃが頼もしい仲間たちのおかげで……!!」
　地球を守るがゆえに、地球に守られる戦士。
「後塵しりを拝しみていただけの貴様に、前へと進む者を止めることなどできぬ!!」
　その神こう々ごうしき能力で数々のマッチョ悪夢を具現化させてきた前科など泡ほう沫まつと捨て去り、ブラックは勇猛に言い放つ。
　地の利を得た二人の執念の攻撃は唸うなりを上げ、ついにグリフォギルディの背後しりへとクリーンヒットした。
　神鳥グリフオンの誇りたる巨翼から、甚はなはだしい火花が撒まき散らされる。
「う……うおおおおおおおお!?」
　空中で大きく仰のけ反ぞり、動きを止めるグリフォギルディ。
　ぐらりと身体からだを揺らし、イエローがブラックにもたれかかった。

「く……踏ん張れ、イエロー！　わらわもぶっちゃけ超苦しいのじゃ!!」
　疾しつ走そうに疾走を重ねたことで、イエローたちはもとのグラウンドの側そばまで戻ってきていた。
「イエロー！　リードを伸ばせ!!」
　再度、ご主人様の声が響く。
　庭を駆け回る犬のような喜色満面で、イエローは首輪からリードを伸ばした。
「テイルカリバー！　生命装填ライフモード!!」
　レッドがテイルカリバーを変形させる。外部デバイスとのジョイント用に展開したその柄つかへ、イエローが伸ばしてきたリードを接続した。
「今の俺なら、いくらでもチャージしてやれる……星の彼方かなたまでブッ飛ばしてやれ！」
　自身が到達したツインテールの理の数だけ、テイルカリバーに能力を付加する──今レッドが発動したのは、仲間へと属性力エレメーラを供給する能力だ。
「は、ふ……ふ……な、流れてきますわ……ご主人様が、わたくしの身体の隅々まで……ビリビリきますわ……」
　後部座席でイエローがビックンビクン跳ねるのを見て、ブラックがぎょっとする。
「おおーい！　性癖までオーバーチャージするではないわ!!」
　しかし、驚きよう愕がくの表情でイエローを見るは、味方以上に敵側の方が烈はげしかった。
「バ、バカな……戦いの最中にそこまで羞しゅう恥ちを捨てた面おもてを晒さらすとは……!!」
　破綻した自身の美意識に怯おびえるように、グリフォギルディは二人

目掛けて光線を乱射する。
　イエローは、未いまだ繋つながるリードを通して、さらなる力が流れ込んでくるのを感じていた。
　レッドが発動したのだ。テイルカリバーの、絆装填ネクサスモード──武装の合体を司る力──!!
「メガ・ネさん……わたくしの武装、よろしくお願いしますわ！」
〈よっしゃ、どんときいや!!〉
　三人はそれぞれの思考を悟り、追撃する光線を躱かわして空中へと跳躍した。
　爆走機形態メガネストライカーから戦闘機形態メガネウインガーへ──空中で華か麗れいに変形したメガ・ネの上に、再度乗り込むイエローとブラック。
　さらにイエローは自身の重武装を脱衣パージし、それらは超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンへと融合。
　戦闘機形態メガネウインガーの底部に組み付け、即席の合体を完成させた。
「うおっ……貴様、煽あおりで見るとほぼ痴ち女じょじゃな!!」
　コックピットで仰のけ反ぞってイエローのほぼ剥むき出しの巨乳を間近で見たブラックは、声を張り上げた。
「ブラック！　前を向いてくださいまし!!」
　自分から目を逸そらせと叱しつ責せきするドＭ。与えられし無茶に口くち端はを吊つり上げ、ブラックはグリップを最大に回す。
　高速と重武装を両立させる、理不尽を体現した超兵器。
　グリフォギルディを翻ほん弄ろうするスピードで天を駆けながら、メガ・ネに合体した武装が一斉射撃を敢行する。
　果てなき天空を爆砕する、極彩色の射光。
　グリフォギルディは数射の直撃に身体からだから紫し電でんを散らし

ながらも、飛翔を止めない。
「……仲間の、絆きずな……これが……！　……駄目だ、これを認めては、あいつに――!!」
「「完全解放ブレイクレリーズ!!」」
　イエローとブラックは戦闘機形態メガネウインガーのコックピットを蹴けり抜き、高々と跳躍。
「蹴り技などわらわの流儀ではないが……」
　二人の背中で、黒と黄のマーブルの閃せん光こうが煌きらめく。
　メガ・ネと合体した超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンから放たれた光波は、寸分の狂い無く同時に二人の背中を捉とらえた。
「今日だけ、貴様に合わせてやる!!」
　負傷した右足ではなく、左足を突き出すイエロー。それを補佐するブラックは右足を突き出し、二人は天羽ばたく神目掛け、蹴撃の旋せん律りつを奏でた。

「「シンフォニックスマーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッシュ!!」」



　たじろぐグリフォギルディが見たのは、希望溢あふれる二つの尻。
　道を踏み外した者でも、真の美の前では威勢を振るうことなどできず。
　グリフォギルディは、イエローとブラックの同時蹴げりをその身に受けた。
「ぐわあああああああああああ……か……完かん璧ぺきなる尻のユニゾン……見事!!」
　全精力を使いきったイエローの武装が、メガ・ネから剥はがれて大地に落下していく。
　メガ・ネは空中で二人をキャッチし、グリフォギルディの前で静止した。
「怖がっていたのは私だったのだ、テイルブラック……」
　全身から放電しながら、プライド高き交渉人は、ついに敗北を認める。
「私こそ部隊に居場所がなかった……交渉人などという役目を引き受け、自分は特別な存在なのだと思い込んでいた……体ていよく使われていただけだったのだがね……フフフ……」
　しかし……今いま際わの際、エリートは最後の誇りを振り絞った。
「だが、私は堂々と伝えるぞ──神の一剣ゴー・デイア・ソードの本隊へ！　『誇りを持って進撃せよ』とな!!」
　神を名乗る戦士が、人の子を認めたがゆえの言葉。
「よかろう──伝えておけ！　進軍するならこの世界はエレメリアン生誕の地ではない、終しゆう焉えんの地になる！　わらわたちツインテイルズの絆きずなでな!!」
「……夢物語だ……話にならないな、全く──」
　交渉の終結に満足げな笑みを浮かべ、グリフォギルディは空に爆華を咲かせた──。

◇

　不可解なことに、グリフォギルディを倒しても属性玉エレメーラオーブは出現しなかったらしい。
　俺とブルーが倒したヒドラギルディもそうだったのだが、てっきりこちらは人造エレメリアンという特殊なケースだからだと思っていた。
　神の一剣ゴー・デイア・ソードのエレメリアン……まだ謎なぞが多そうだ。
　そうして戦いの後、俺たちは全員で基地に戻った。
　だが……イースナが、コンソールルームの入り口で俯うつむいたまま入ってこようとしない。
「あ、あの……私……私……総そう二じさんを……みんなを、裏切ろうと……」
　おおよその事情は把握した。
　きっとそれは、俺でも愛あい香かでも駄目だった。一度自分の欲望に負け、邪悪を受け容いれた慧え理り那なだからこそ、イースナを救うことができたのだろう。
「何言ってんだ？　また怖い夢でも見たんじゃないのか？」
「ち、違……」
　二人はもう、散々魂たましいをぶつけ合ったはずだ。だったらもう、俺たちが何か言うことはない。
「仕方ない。また一緒に寝てあげるから、いつでも部屋においで、イースナ」
「……うっ……うう……」
　涙で顔をくしゃくしゃにしながら、イースナは俺に抱きついてきた。
　震ふるえるその頭をそっと撫なで──俺は、慧え理り那なに向かって頷

うなずく。
　慧理那の爽さわやかな笑顔が、全てを物語る。君が、仲間との絆きずなを繋つなぎ止めてくれたんだな。
　強くなったな、慧理那──。
「これから私、総そう二じさんに、いっぱい、お尻ぺんぺんされる……んですね……」
「わたくしもですわ」
　迷いの無い表情という最強の隠いん蔽ぺい工作を発動するお嬢様。
　……本当に強くなったな、慧理那──。
「そ、そーじ……あたしも、怖い夢、見るんだけど……」
　こちらをじっと見ていた愛あい香かが、爪つま先さき立ちで俺に近付いてきた。
「愛香さんは怖い夢を見せる側でしょう。というわけで総二様、基地でいつも私が見せられる怖い怖い蛮族の悪夢を……と、お、おおっ⁉」
　トゥアールが後ろから何かに突き飛ばされてバランスを崩し、俺の胸に飛び込んできた。
　咄とっ嗟さのことで、俺はトゥアールを抱きしめてしまう。
「ひゃっ……」
　軽く声を上げるも、すぐに俺に身体からだを預けてくるトゥアール。
　その背後で、イースナがちろりと舌を覗のぞかせていた。
「……お、お願いごとの分の……お礼」
　トゥアールはすぐに愛香に引き剥はがされ、また二人はじゃれ合う。

「あのね、総二さん……総二さんのお部屋も、いいけど……」
　もじもじと指を合わせながら、うん、と頷き。
「私……約束しかけたことが、あるの……。あっちも、覚えてて、くれて……」

　メガ・ネに視線を送り、満面の笑顔になるイースナ。
「……だから、ずっと、私のこと、見ててくれて……嬉うれしかった……」
　些さ細さいな誘いが嬉しくて、ボロボロになって彼女を助けた慧理那は━頷いて、胸に懐いだく。
　頑張って選び、ゆっくりとパズルのピースを揃えるような、たどたどしい言葉を。
　喧けん嘩かを続けるふりをしながら、愛香とトゥアールも、微笑ほほえみながらイースナを見守っていた。
　メガ・ネも━嗚咽おえつを噛かみ殺すように、震えている。
「……今なら、ちゃんと、言えます……。あの時、言いたかったこと……」
　それは幾度か見せた作り物イミテーションの微笑みではなく……彼女の心そのものの、優しい笑顔だった。

「今度、私の家に、遊びに来てね━慧理那」

エピローグ　神なる科学。

　マーメイドギルディの研究室の奥には……万一にも外部からの侵入を許さぬ、結界にも似た堅固さを備えた隠し部屋がある。
　そこでマーメイドギルディは、一体のエレメリアンと相対していた。
「ってなわけで、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士もツインテイルズに負けちゃいました～！」
　陽気に柏手を打つマーメイドギルディ。
　壁に設置されたＰＣモニターサイズのスクリーンには、グリフォギルディらの敗北の報が映し出されている。
　映像を一いち瞥べつし、薄暗い部屋でも焔ほのおの如く双そう眸ぼうをぎらつかせるのは──
「……で？　俺様をこんなとこに攫さらってきて、てめえは何をするつもりだ」
　不死鳥のエレメリアン。フェニックスギルディだった。
「攫われた、なんて思ってないくせに……。私と利害が一致したから〝来た〟んでしょう？」
　拘束されているわけでもなければ、力を抑え込む結界の類たぐいに囚とらわれているわけでもない。
　家に招待された友人じみたごく普通さで、フェニックスギルディはこの隠し部屋の床に胡座あぐらを掻かいていた。
　時を溯さかのぼること、ティラノギルディが最終侵攻を開始する少し前。
　人間世界でスワンギルディに修行をつけ終えたフェニックスギルディに、マーメイドギルディは密かにコンタクトを取ったのだ。
　対たい峙じし、戦闘をするでもなく、逃走をするでもなく。反逆者で

あるフェニックスギルディにとっては敵地も同然の基地へとやって来たのは、両者の思惑が複雑に絡み合ってのことだ。
　案内される側も、案内する側も、正気の沙さ汰たではない。
「約束するわ。私に協力してくれたら、教えるわよ。首領の居場所」
　だが、マーメイドギルディの口から出た〝取引〟は──その乱心をしてなお度外れた暴挙だった。
「首領が気に入るわけだ。似てるぜ、てめえ──そのスカしたところがよ！」
　後頭部で手を組み、鼻じらむフェニックスギルディ。
「アレと一緒にしないで欲しいわね……あ、言っちゃった」
　首領への不敬という最大の禁きん忌きを犯しながらも、マーメイドギルディはいささかの罪悪感も滲にじませていない。
「かー、これだから理系は。話が回りくどいんだよ、とっとと案内しろ！」
「せっかく数週も一緒にいたんだし、もう少しゆっくりしていったら？　漫画もアニメもゲームもたくさんあるわよ？」
「男しかいねえじゃねえか！　ポニーテールがいねえんだよ！　……まあ、熱い展開もあって面白かったから、全部見ちまったけどな‼」
　世に言う女性向け……男性キャラに人気のある作品は、得てして熱血展開が多く、食わず嫌いをしている層ほどハマることが多い。
　熱血の塊であるフェニックスギルディにとっては、ドンピシャな作品もいくつかあったのだが……数週もの間、ニートも同然の軟禁をされていては機嫌も悪くなる。
「俺様だって暇ひまじゃねえんだ。いつまでもこんな陰気くせえ部屋に入れとくなら、ブチ壊して出て行ってもいいんだぜ」
「えー、もっとお話ししましょうよ、あなたが出て行ったら──」
　マーメイドギルディは、側そばの端末に人間世界の映像を投影する。

　そこに映っていたのは──修行に明け暮れる若者。
　フェニックスギルディの弟子、スワンギルディだった。
　案内されてついてきたフェニックスギルディが数週もの間忍耐していた理由がこれだ。
「……あいつに手ェ出したら、部屋じゃなくててめえをブチ壊すぜ」
「わー、あなたが女に進化してなかったら、最高のシチュエーションだったのに♪」
　それに暴れて出て行けば、この基地を脱出する前に必ず末端兵が駆けつけるだろう。
　そしてマーメイドギルディの口から反逆者だと説明されれば、彼らは戦うしかなくなる。
　勝ち目のないフェニックスギルディ相手に、群れを為して特攻してくるというわけだ。
　フェニックスギルディも、無益な戦いは望まない。自身の定めた正義のためだけに戦うという矜持があるからだ。
「私の知る限り、全てのエレメリアンの中であなたしか持っていない能力──それを貸して欲しいの」
　フェニックスギルディが誇る最大の力と言えば、最終闘体で人間の身体からだへと進化することだが──マーメイドギルディの狙ねらいは、その全容の解明だろうか。
　あるいは、別の能力……？
　いずれにせよ、実直で王道を旨むねとするフェニックスギルディにとって、このマーメイドギルディという魔女はどこまでも相あい容いれない存在なのは確かだった。
「てめえは一体、何が目的だ。まさかアルティメギルを潰つぶす気か？　俺様みてえに」
「やあね、アルティメギルは潰さないわよ」

　不審の視線をものともせず、マーメイドギルディは妖よう艶えんに微笑ほほえむ。

「潰すのは——全異世界。私はね、全てを書き換えてしまいたいの」

あとツインテールがき

　お久しぶりです、水みず沢さわ夢ゆめです。健康に気をつけつつ、塩分も取り過ぎないよう注意しながら好物のフライドポテトは相変わらずめっちゃ食べています。これはいけない。
　前巻が集大成バトルの巻だったので、今回は日常成分多め、肌色成分多めの巻となっております。機会があればさらに小ネタに特化した完全日常巻とか……書いてみたいなあ。
　温泉は、青森県内のならいくつか行ったことがありますね。冬にばかり。
　……冬の露天風呂、普通に寒いよ。みんなおいでよ、冬の青森県。
　あと、テイルブルー滑り止め御守りはグッドアイディアだと思うのですがどこか（略
　謝辞です。イラストの春かす日がさん、今回は何といっても初の肌色口絵イラスト！　そしてついに本格的な女性怪人イラストと、11巻でまだまだ初めて尽くし、ありがとうございます!!
　担当の濱はま田ださん、テイルブルー滑り止め御守りを何とか次のコミ（略
　そして帯コメントをくださった、惑星コウグからやってきた宇宙人のニパ子ちゃん！　地球のツインテールはエレメリアンっていう怪人が狙ねらっているけど、ツインテイルズがいるから安心だ！　もしくはアルティメット繋つながりでテイルレッドと共闘してね!!
　今回も、完成と出版に携たずさわる全ての方と読者の皆様に、感謝とツインテールを！

ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

No.008 ヒドラギルディ

TEXT ONLY

設定抜粋：ジャージ属性。昔イースナのジャージ姿を見て一目惚れし、それからずっとつけ狙う。壁のような真っ平らな胴体はかなり大きく、倒れ込んでプレス攻撃をする。リヴァイアクラーケギルディをヒントに、似た属性のエレメリアンが全部で九体合体している。九つの首一つ一つに意志がある。そのせいで、趣味の違いで喧嘩をする。ジャージだけでもいいが、上だけジャージ、下ブルマみたいな変化球が素晴らしいと感じている。

埼玉県・祭透さんの作品

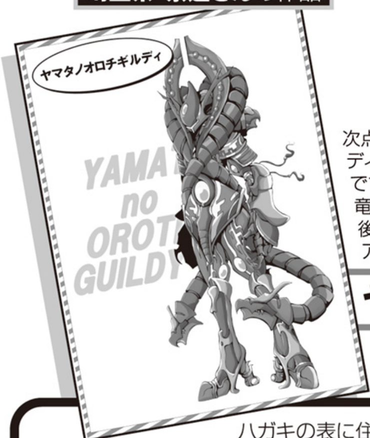
水沢夢の選んだポイント

神話の怪物ヒドラをモチーフにしたエレメリアンの応募は募集初期からイラスト、テキストオンリー合わせて何作か届いていました。今回はその中でも、テキストのみながら実に便箋四枚分にわたって設定を作り込んでくださったこちらをご紹介。首の数だけエレメリアンが合体しているという設定が、科学者マーメイドギルディの参戦にピッタリでした。テキストオンリーでは初の首位採用です！

応募のポイント

神の一剣、残存部隊、引き続き何でも募集中です！ 出オチ、一発勝負、ニッチな属性の応募大歓迎ですので、どしどしご応募ください！（他作品のパロディや流用はすみませんがNGです……！）

次点として紹介したいのがこちらヤマタノオロチギルディ。四巻でシーラカンスギルディが採用になった方です。九頭竜ヒドラに対し、こちらは日本神話の八首竜。こちらも設定が素晴らしいので、あえて属性は今後のために保留、ヒドラギルディにちなんだヴィジュアルのみの紹介とさせていただきます。



ヤマタノオロチギルディ

東京都・だびんちさんの作品

応募方法

ハガキの表に住所・氏名・ペンネーム・年齢・電話番号を、裏にエレメリアンの名前とデザイン、属性力を書き、下記のあて先までお送りください。
また、デザインのみ、属性力のみでの応募も可能です。

▶▶▶ **〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館**
ガガガ文庫編集部「ぼくのかんがえたエレメリアン」係

メールでのご応募の場合は、データファイルを添付してこちらのアドレスまで。

▶▶▶ **sukisukitwintail@gmail.com**

なお、採用したエレメリアンの著作権は著者およびイラストレーターに帰属されます。
また、応募していただいたハガキ、ファイルの返却は行っておりません。

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。大きなバトルの後ということで、今回は日常エピソード多めの巻となっております。のんびりと最後までお楽しみください。色々な友情を描けるのも、話が続けられるおかげ。いつも応援してくださる読者の皆さまのおかげです！

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。11

２０１６年３月25日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　立川義剛

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１６年３月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451599-2